



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本中央アジア学会報, 第20号, 全1冊
Citation	日本中央アジア学会報, 20
Issue Date	2024-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98882
Type	journal
File Information	JB20.pdf



日本中央アジア学会報

第20号

2024 年

目 次

論説

- 工芸品の価値の差異化をめぐる真正性のリアリティ ……今堀 恵美 … 1
—日本における「ウズベキスタンの刺繍とスザニ」展示会での協働の事例から—

研究ノート

- ウズベキスタンの STEAM 型人材養成教育政策に関する研究 ……木之下 健一 … 23
- 中央アジア絨毯の博物館コレクションの形成過程と呼称の変遷 ……志田 夏美 … 40
—貿易品目からエスニシティ分類へ—

日本中央アジア学会2023年度大会プログラム ……57

日本中央アジア学会2023年度大会発表要旨

- COVID-19パンデミック下の日本における
ウズベキスタン人移住者への影響 ……ジャスル・ソイポフ … 60
- 都市に暮らす若者の幸福観 ……土居 海斗 … 62
—タシケント市の大学生への質問票調査から—
- ガージャール朝末期マシュハドの為替と金融 ……水田 正史 … 64
—中央アジアとの関係を中心に—
- トルキスタン共産党機関紙『トルキスタン』における
民族へのプロパガンダ分析 ……石山 実弥 … 66
- 権威主義体制下のトルクメニスタンにおける情報統制 ……鈴木 朝香 … 68
—抑圧的な情報空間にみられる協力調達戦略をめぐって—
- ウズベキスタン手工芸家支援の試み ……今堀 恵美 … 70
—日本における刺繍展示会とワークショップの報告—
- Kazakhstan's Multi-vector Foreign Policy: ……Lyailya Nurgaliyeva … 72
Focus on China and Russia

日本中央アジア学会2023年度大会パネルセッション報告要旨

ウズベク移民と日本社会	ティムール・ダダバエフ	76
—— 在日ウズベキスタン人移民の日本選択と新来在留外国人としての位置づけ ——		
中央アジアの心象地図と日本	園田 茂人	78
—— 2018 年アジア学生調査の結果から ——		
中央ユーラシアの新たなコネクティビティ	篠原 建仁	80
—— The Middle Corridor ——		
ウズベキスタンにおける高等教育の国際化と日本	宗野 ふもと	83
書評		85
中央アジア現地事情		
ナウルーズの祭典における地区展示	志田 夏美	92
—— ウズベキスタン・スルハンダリア州の事例 ——		
新刊紹介		99
中央アジア関連研究文献リスト2023		101
投稿規定・執筆要領		106
日本中央アジア学会会則		112

JACAS BULLETIN

No.20

2024

Article

Realities of Authenticity

Surrounding the Differentiation of Craftsmanship Value: IMAHORI Emi .. 1

A Case Study of Collaboration at Japan's "Uzbekistan Embroidery and Suzani" Exhibition

Research Notes

Uzbekistan's STEAM-based Human Resource Development

and Education Policy..... KINOSHITA Kenichi .. 23

The Construction of Central Asian Carpet Collections and Their Naming: ... SHIDA Natsumi .. 40

From Trade Category to Ethnic Classification

Program for the 2023 JACAS Annual Meeting 57

2023 JACAS Annual Meeting: Presentation Abstracts

Effects of the COVID-19 Pandemic on Uzbekistani Migrants in Japan SOIPOV Jasur .. 60

Views of Happiness Among Young Adults in Urban Cities:..... DOI Kaito .. 62

A Survey of University Students in Tashkent

Exchange and Finance in Mashhad During the Late Qajar Era:..... MIZUTA Masashi .. 64

Relations with Central Asia

Propaganda Toward Ethnic Groups by the Communist Party of Turkistan

in the Official *Turkistan* Newspaper..... ISHIYAMA Miya .. 66

Information Control in Turkmenistan under Authoritarianism: SUZUKI Asaka .. 68

A Sign of Cooperative Strategies in a Repressive Information Space

Experimental Collaboration with Uzbek Embroidery Artists:..... IMAHORI Emi .. 70

A Report on Japan's Uzbek Embroidery Exhibition and Workshop

Kazakhstan's Multi-vector Foreign Policy: NURGALIYEVA Lyailya .. 72

Focus on China and Russia

2023 JACAS Annual Meeting: Panel Abstracts

Open Panel Sessions

Uzbek Migrants and Japanese Society:	•DADABAEV Timur •	76
Migration Choice and Uzbek Migrants as Newcomers to Japan		
A Mental Map of Central Asia and Japan:	•SONODA Shigeto •	78
Findings of the 2018 Asian Student Survey		
The Middle Corridor:	•SHINOHARA Kenji •	80
New Connectivity in Central Eurasia		
Internationalization of Higher Education in Uzbekistan and Japan's Position	•SONO Fumoto •	83

Book Review	85
--------------------------	----

Current Affairs in Central Asia

Regional Exhibitions at the Festival of Navro'z:	•SHIDA Natsumi •	92
The Case of Surkhandarya Oblast, Uzbekistan		

New Book Information	99
-----------------------------------	----

List of Publications in the Field of Central Asian Studies in 2023	101
---	-----

Guidelines for Contributors	106
--	-----

Statutes of the Japan Association for Central Asian Studies	112
--	-----

論 説

工芸品の価値の差異化をめぐる真正性のリアリティ —— 日本における「ウズベキスタンの刺繍とスザニ」展示会での協働の事例から ——

今堀 恵美

はじめに

2017年から2023年までの6年間でウズベキスタンへの外国人観光客数はおよそ2.5倍(660万人、2023年)に増加した[Uzdaily 2024年4月1日]。とくに2018年のビザ要件の大幅な緩和以降、日本を含む91か国の国民がウズベキスタンへの入国にビザが必要なくなり(2024年4月時点)、同国は訪れるべき観光先として大きく注目されるようになった。CNNは2024年世界で訪れるべき24か所の一つにウズベキスタンを取り上げ、サマルカンド、ブハラなどのオアシス都市のほかにサマルカンド郊外の村にも注目を促している⁽¹⁾。日本でも2023年7月に駐日ウズベキスタン大使館主催のウズベキスタン観光PRイベントが渋谷で開催された⁽²⁾。ウズベキスタン国家統計局によると、ウズベキスタンを訪問する外国人観光客のうち日本は20位であり、2023年の訪問者数は6800人だった。コロナ前の2019年の1.2万人に比べると完全に回復したとはいえないが、今後回復していくだろう。

ウズベキスタンを訪問する外国人観光客の多くは様々な種類の工芸品を土産物として購入する。日本人観光客の多くが中央アジアを訪問する際に参考にするガイドブック『地球の歩き方 Plat ウズベキスタン』(2023年版)ではウズベキスタン土産物の目玉としてスザニ刺繍品を取り上げ、地域ごとの刺繍の特徴を紹介している[地球の歩き方 2023: 33]。

筆者はおよそ20年来ウズベキスタンの観光地で販売される刺繍とその制作者を研究してきた[今堀 2006a; 2006b; 2023]。2002年から調査している刺繍家の一人であるズフロ・オブロベルディエヴァ(以下ズフロ)が2020年3月の国際女性の日でウズベキスタン大統領ミルズィヨエフから友好賞を受賞した。彼女が長年制作してきた刺繍作品や事業が高く評価された証拠といえよう。だが受賞当時彼女の作品はウズベキスタン国内の観光地では販売されていなかった。これは彼女が事業を開始した1990年代に比べ、観光地における廉価な刺繍品

⁽¹⁾ 「2024年どこを訪れるべきか。最高の訪問場所」 Best travel destinations to visit in 2024 | (2024年1月2日記事) [CNN] 参照。

⁽²⁾ [駐日ウズベキスタン大使館文化観光局 HP] 参照。

とその種類が増加したことが原因だという。市場原理による急速な刺繍デザインの画一化が進み、中央アジア起源のデザインとグローバル化によって外部からもたらされたデザイン、手仕事かマシンか、刺繍糸や布地の素材も十分に差別化されない状態で販売されているという。それゆえ、現在ズフロは自分の作品を理解してくれる海外の固定客と限定的な取引のみを行っている。

グローバル化が進む現代世界では外部からのデザイン流入や混交それ自体は批判されるべきではなく、多彩な作品を生み出す想像力の源泉となりうるだろう。だがウズベキスタンの刺繍品が質量ともに発展し、質の高い刺繍制作を目指す人材を育成するためには、糸や布地といった素材だけではなく、技法やデザインに関する確かな知識に基づき、質の高い制作をする刺繍家の活動も確保する必要がある。そのためにはウズベキスタンの刺繍において廉価品と高級品の価値をめぐる差異化を検討する必要があるだろう。だが工芸分野の研究者ではない筆者には技術の詳細な差異化についての客観的検討は力にあまる。そこで本稿ではウズベク刺繍についての筆者の研究成果を還元する目的で主催した展示会において、制作者や消費者がウズベク刺繍をめぐる想像する作家性や作品の価値、その真正性のリアリティについて考察していきたい。具体的には「ウズベキスタンの刺繍とスザニ：ウズベキスタンで最も有名な刺繍家、ズフロ・オプロベルディエヴァの世界」展示会⁽³⁾（以下スザニ展）で観察・収集された事例から、展示会に参加する人々が協働する中で生み出される工芸品の価値をめぐる真正性について論じていこう。

理論的な背景および問題意識

1) 工芸における無銘性から作家性の確立へ

では工芸の価値とは一体何だろう。19世紀末から20世紀中葉、ウズベキスタンでは多くの工芸は無銘⁽⁴⁾のものとして表現され、工芸品は地域ごとに表象されていた。現在のウズベ

⁽³⁾ 本展示会が「展覧会」か「展示即売会」かについては本稿では問わない。ズフロは事業家として販売作品を制作するが、それが無二の工芸品であることもまた事実だからである。販売だけが目的ではないが、販売しなければ下請け女性に払う収入を得られないのである。

⁽⁴⁾ 日本の民藝運動を提唱した柳宗悦は、西洋の美術と工芸の差異を検討するなかで、工芸としての美しさや価値の一つを無銘性に求めている。名もなき民衆が生活に用いる道具を制作し、使用することこそ工芸の美しさと価値があると論じた。柳は工芸における無銘性について以下のように書く。

よき作を集めるならば、そのほとんどすべてに作者の名が見えないではないか。いつも自我への固執が消されているのではないか。あの名品を誰が作ったのであろうか。その地方のその時代の誰でもが作り得たのである。そこには大勢が活きて個人は匿れた。どこに個性を言い張る者があつたのであろうか。工藝は無銘に活きる。よき作を見られよ。そこには特殊な性格の特殊な表示はない[柳 2005: 420]。

これはおそらく19世紀末から20世紀に生きた柳が当時の日本に残る名もなき人々が作る手仕事に光を当てるために記述したものであろう。

キスタンを含む中央アジアの刺繍は結婚時に花嫁が持参財として持ち込む生活用品（壁掛け、新婚用シーツ、礼拝用敷物など）として（名もなき）女性たちが制作していた[Сухарева 2006]。

だが1991年のウズベキスタン独立以降、刺繍制作の環境は激変した。かつて手作りで刺繍の持参財を準備したウズベク女性たちは、ソ連時代から現れた既製品で持参財を準備するようになり、独立後はグローバル市場から多種多様な布製品がもたらされる中、もはや手作りで持参財を準備する必要はなくなった。一方、急増する外国人観光客が購入する土産物として、ウズベク民族文化やシルクロードをイメージさせる工芸品の需要は高まった。独立後の失業率の高まりで、現金獲得手段が男性に偏りがちになる中、刺繍は女の仕事というジェンダー規範から女性に現金収入をもたらす貴重な手段となっていく。実際に政府も90年代後半からコロナによる規制が行われた2020年まで観光客に販売する工芸品制作を外貨獲得や失業対策として注目し、積極的な工芸振興策が取られてきた[今堀 2021: 36]。結果、仕事として刺繍制作を続ける刺繍家や下請けぬい子と、刺繍業に携わらないウズベク女性との間には制作スキルで差が生まれた。当該地域の女性たちの誰もが刺繍をするのではなく、特定の刺繍家やぬい子たちが集中的に刺繍スキルを向上させていった。

この事実はウズベキスタンの工芸に関する文献の記述にも変化をもたらすことになった。ソ連時代から独立前後までのウズベキスタンの刺繍をめぐる研究は作品を地域で表象する傾向が中心だったが[Чепелевская 1961; Морозова ほか 1979 など]、特にこの10年間に英、露、ウズベク語など3か国語で出版された文献では各工芸分野で活躍する工芸家たちを実名で網羅的に取り上げ、作品と経歴、展示会（とくに国際展示会）への出品、受賞歴を紹介する研究[ЎзМЭ 2016; Раҳмоваほか 2017; 2019; Бинафша 2021; Хакимов 2023 など]が増加した。上述の5冊研究文献の中でХакимов[2023]以外の4冊がズフロを扱い、Раҳмова[2019]では刺繍分野のトップページで彼女の経歴や作品の紹介を行っている。そのほかにも特定の工芸家との共同展示や[廣田・カブディル 2019]、伝統工芸を近代デザインに転用する工芸家の試みに注目する研究[Mentges and Shamukhitdinova 2013]が増加傾向にある。これら一連の研究に共通するのは工芸における制作者個人への注目であり、特定の作家性⁽⁵⁾の強調である。

この作家性の確立は大量生産される製品との差異化によって、卓越した技術で質の高い制作をする工芸作家の活躍できる場を増やす可能性があるだろう。それは単に制作者にメリットがあるだけではない。市場に溢れかえる多種多様な工芸品の中から自分のためだけの一品を購入したい消費者にとって、作家性が付与された工芸品はブランドとして作用し、高級品の購

(5) 日本では工芸品の産業振興化や手工芸の機械化が進む一方で、美術工芸や伝統に回帰する伝統工芸が生まれ、その作品づくりを行う工芸作家が誕生し、作家性が重視されるようになった。濱川[2023]は、九州の工芸作家における作家性を分析する中で、作家性を「その作家特有の思想や技術が作品に投影されることで生じる特徴」と定義した。そして工芸技術は単なる倣作のためではなく、現代の工芸作家には高度な伝統技術の維持と創造性が求められると述べている[濱川 2023: 33]。

入が満足感を覚える経験となる⁽⁶⁾。ウズベキスタンにおける作家性に着目する一連の研究は、工芸作家に安定した収入を確保して質の高い制作環境を保証するだけでなく、活躍する工芸作家の作品を購入する消費者にも高い満足感をもたらし、工芸や観光業を支える次世代の人材育成のロールモデルにする効果があると考えられる。

とはいえ、作品を最初から最後まで一人の手で仕上げる刺繍家とは異なり、ズフロは観光客に販売するために多くの下請けのぬい子を抱える事業家として刺繍制作を統括している。事業家として関わるズフロは刺繍家としてどこまで「本物」の作家性をもつといえるのだろうか。

2) 観光をめぐる協働による真正性のリアリティ

観光で売買される民族文化体験や伝統工芸品が「本物」であるか否か、といった問題は、人類学では真正性 (Authenticity) をめぐる議論で取り上げられてきた。例えば、観光で購入される工芸品はそれが単に卓越した技を駆使した作家性が見出せる作品であれば十分なわけではない。ウズベキスタンにはウズベク人以外の多くのエスニシティ (たとえばロシア系住民) がいたとしても、ウズベキスタンの観光地でロシア風デザインの作品を販売しても大きな売り上げは見込めない。ウズベキスタンの観光地という場ではウズベクラしさ、つまりウズベク民族文化における真正性が見出される作品が好まれる傾向にある。

真正性という概念は一般に「本物らしさ」といった意味で使用されるが、その用法を観光との関連で再検討したのが王である [Wang 1999]。王によれば、元々真正性とは美術館で専門家がある作品を説明通りの価値をもつ「本物」であるかを判断する審美眼のようなものとして使われていたという [Wang 1999: 350]。だが真正性の概念が客体的／オブジェクトな真正性、構築主義的な真正性、ポストモダン的な真正性など様々な文脈で用いられるに伴い、曖昧さや妥当性が問われるようになった。この点について渡部 [2017] は、1980年代にホブズボウムとレンジャーの『創造された伝統』が、伝統文化を西洋文化や資本主義経済の只中で歴史的に捏造・創造されたものだと明らかにした時点で、伝統文化の本質的な真正性など到底見込めそうにないことは誰もが知ったと述べる。であるにもかかわらず、その後も様々な論点から「真正性」を見出そうとする議論が継続している理由について、コーエンを引用しながら、彼女は観光対象物の真正性を否定しつつも別の真正性を探求し続けるのは観光客ではなく、むしろ学芸員や民族誌家、人類学者の側である⁽⁷⁾という。観光のホストとゲスト

⁽⁶⁾ 北欧デザインのブランドイメージ確立に対して「作家性」の付与が消費者にいかなるイメージを喚起するのかを研究した内田と木谷 [2018] は「日用品に「作家性」を付与することは製品評価の向上に寄与する」と結論づけている [内田・木谷 2018: 535]。

⁽⁷⁾ 観光地で提供される文化経験の虚偽性のみを指摘し続けられれば、研究者は調査自体を断られるからという [渡部 2017: 29]。

は観光対象物の虚偽性に薄々気づきながらも「公然の秘密」とし、秘密であればあるほどそこに魅惑を感じるという。ここに学芸員や人類学者などの研究者側が求める真正性と、観光を主催するホストとゲストでは真正性をめぐる認識のズレが存在しているといえる。先述の王は実存的真正性の可能性について取り上げ、観光客が求める真正性とは単に他者に真正性を求めるだけではなく、自分自身や自分たち同士で見いだせる真正性に重きを置くことに注目する。彼は観光対象物や観光経験が単に観光客を呼び集める手段に過ぎず、その後に観光客自身や彼ら同士で経験する真正な対人関係こそが重視されるのだという[Wang 1999: 364]。また渡部はタウシグの議論に寄りながら、たとえ「公然の秘密」が暴かれたとしても本物と偽物の境界は常に曖昧なままであると述べる。本物か偽物かどうかの最終判断を永遠に先送りする決定不可能性が観光対象物の客観的真正性への期待感、探究心をかえって増幅して真正性のリアリティを生み出し、それがエキゾチックな観光対象物の消費につながると指摘する[渡部 2017: 33]。彼女はこの真正性のリアリティについて「「まがいもの」か否かの境界線が曖昧にされる中で、人びとが本物を想像しながら行為することで立ち上がる現実的な世界」と定義している[渡部 2017: 27]。

ウズベク刺繍品をめぐる価値の差異化を考察する上で、真正性のリアリティ論は渡部が提示するヒマラヤ産のアクアマリンのように特定の産地の真偽のみが真正性の根拠として問題にされる事例と単純に同列に扱うことができない。刺繍のような工芸品をめぐる真正性には、少なくとも技術的・物質的側面(刺繍ステッチの精緻さ、刺繍糸や布地の材質、作品の完成度、作品サイズや種類など)、文化的側面(伝統モチーフの種類と意味や象徴性、刺繍モチーフへの配色とその文化的・民族的な正統性、継承されたデザインとその地域性、文化的な用途やジェンダー規範、儀礼で用いられる文脈など)、経済的側面(制作費用や販売価格、雇用および制作・労働環境、販売ルートや販売手段など)、アートの・物語的側面(驚き、喜びや感動の経験、作品をめぐる背景やヒストリー、作家個人のストーリー、作品制作についての語りなど)が関係する。これらの多様な側面が複合的に真正性をめぐる価値付けの対象になりうる工芸品では「まがいもの」と本物を区別する境界線は幾重にも張り巡らされている。そう考えると、ズフロが個人で刺繍の全工程を仕上げる作家ではなく、多くの縫い子に下請けに出す事業家だったとしてもその点のみで「まがいもの」とされることはなく、むしろズフロの作品の真正性をめぐる境界線は曖昧なままである。このように真正性を価値づける基準が多ければ多いほど、真正性をめぐってどの基準を重視して何に真正性を見出すかは工芸をめぐる多様なアクター(工芸作家、販売業者、消費者、そしてそれを解説する知識人など)が関係する。本稿ではウズベキスタンの刺繍をめぐる真正性とは何かを議論することはせず、むしろ刺繍に関わる多様なアクターがそれぞれの「本物を想像しながら行為することによって、ときに偽物として疑い、ときに真正性のリアリティを共有していく様を明ら

かにしていきたい。それは彼らが出会い、協働する場⁽⁸⁾において新たに見出し、互いにズレを含みながらも、改変し続ける真正性のリアリティである。本稿ではこれを「協働による真正性のリアリティ」と呼び、工芸の価値を差異化する契機の一つになると論じたい。

では実際に「協働による真正性のリアリティ」はどのように立ち現れてくるのだろうか。以下では筆者が主催したスザニ展の具体的な事例からみられる協働による真正性のリアリティを記述する。そこから工芸をめぐる価値の差異化について考察していこう。

スザニ展とワークショップ

1) 展示会開催までの経緯からみる多様なアクターとの協働のあり方

開発人類学者エスコバルによる開発を先進諸国による権力介入の言説とみなす議論[エスコバル 2022]を引用するまでもなく、筆者は自分が研究対象としてきた刺繍を開発の対象とすることについて慎重な立場を取ってきた。

だが人類学者が開発に歩み寄り、開発の文法を受け入れることで、発言の場を確保して協働する重要性を指摘する特集[関根 2008]が組まれるようになり、人類学者には開発担当者と現地の人をつなぐ仲介者の役割が期待されるようになった。また人類学における存在

表 1 スザニ展開催経緯

時期	展示会開催経緯
2018～2023年	国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))「ウズベキスタン手工芸史の再構築と「守るべき伝統」による地域開発の研究」(研究代表者: 菊田悠)に研究分担者として参加。
2020年2年間	新型コロナウイルスのため現地調査不可。
2020年3月8日	大統領ミルズィヨエフから刺繍家ズフロ・オプロベルディエヴァが友好賞を受賞。
2023年1月～2月	ウズベキスタンの刺繍家追加調査。刺繍家ズフロから最新情報の聞き取り。その際に日本行きを打診される。
2023年3月	科研費年度末のオンライン会議。研究代表者と相談し、刺繍家を日本に招聘し、展示会を開催することを企画。
2023年6月	日本のウズベク雑貨店「KINUYA」に展示会相談。刺繍教室のワークショップ開催を提案される。
2023年7月	相模原市ユニコムプラザ相模原で会場を予約。
2023年10月～11月	展示会開催打ち合わせにウズベキスタンに渡航。招聘手続き。アルバイト雇用申請、ポスター、チラシ、パンフレット作成。
2023年12月	ポスター、チラシ印刷、配布。インフルエンサーへの告知依頼、SNSによる情報拡散。
2024年1月22日	大学事務から科研費で展示会販売・刺繍教室参加費徴収不可と通告。
2024年2月	展示会、刺繍教室ワークショップ開催。

筆者作成

(8) アート実践における主催者や芸術家、鑑賞者が協働することの重要性の指摘については登・兼松[2020]による特集「協働／プロセスの人類学——同時代のアートをめぐる省察から——」を参照のこと。

論的転回において引用されるインゴルドの「他者を真剣に受け取る」[インゴルド 2020] といった議論に触れる度に、研究対象としてきた刺繍家から幾度となく日本での刺繍作品の代
行販売という協働を持ちかけられても「真剣に受け取って」こなかった自分の態度を内省した。

2023年3月コロナによる規制緩和後、久しぶりにウズベキスタンを訪問した筆者に対して
ズフロから日本人のウズベク刺繍への強い関心を説かれ、日本行きを打診された。これまでの
彼女の研究協力への応答に加え、先述の大統領からの受賞があって日本でのスザニ展開催
を決定した。それはこれまで付き合ってきた多くの刺繍家たちの中で、特定の一人のみを日
本に招聘できないと感じていたからであった。だが2020年の受賞が筆者にズフロを他の刺
繍家とは異なる対応をすることを正当化させてくれた⁽⁹⁾。この展示会は筆者が研究分担者
として参加する国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))「ウズベキスタン手工芸史の
再構築と「守るべき伝統」による地域開発の研究」(研究代表者: 菊田悠)の助成を受け、研究
成果の還元として実施できることになった。以下では展示会開催に至るまでの様々なアク
ターとの協働の様子を概観したい。

展示会主催の経験がない筆者は日本のウズベク雑貨店「KINUYA」に展示会の相談を持ち
掛けた。ウズベキスタンで受賞した有名な刺繍作家の展示会と説明すると、展示会だけでは
なく日本で刺繍教室のワークショップに需要があるとアドバイスを受け、展示会と併せて
ワークショップも開催することになった。広報用チラシ、ポスター作成やパンフレット作成
には印刷会社I社の担当者とメールでやりとりをしつつ作成した。また展示会場の責任者と
は展示レイアウトや展示方法の打ち合わせを行った。展示会スタッフとして学生3名と社会
人1名を筆者の勤務する大学で雇い入れ、ポスター発送業務から展示会での刺繍ステッチ指
導補助まで担当してもらった。この業務の費用は科研費で助成を受けた。また展示会での作
品販売やワークショップの材料費としての参加費徴収をめぐる幾度となく大学の事務担当
者と交渉を繰り返した。最終的に科研費による展示会で販売やワークショップ参加費徴収が
認められないことになった。理由として筆者が受けた主な説明は、科研費の監査において販
売の必要性や参加費の適正性を事務担当者が大学の規定に沿って説明できないといったもの
だった。この決定が展示会1週間前になされたために主催者や展示スタッフはその対応に追
われた。だが販売業者であった「KINUYA」が最終的にズフロの作品を引き取り、展示会と
は別に販売を引き受けてくれた。この結果、ズフロのバッグやクッションカバーなど販売用
に準備した商品の大半は1時間以内で完売した。

展示会広報では、インスタグラムなどのSNS、中央アジアや手芸などを扱うインターネッ

⁽⁹⁾ 本来、国家の表彰をもって工芸として真に高い技能をもっている制作者と判断するのは、工芸の価値を考える
上で慎重でなければならないだろう。ウズベキスタンには刺繍技能をもっているも事業家や、工芸家協会に認
定された工芸家として活躍できる人たちがばかりではない。ただし、本稿では観光客向けの制作をする事業家に
焦点を当てているため、ウズベキスタンの刺繍という工芸の価値についての考察は今後の課題としたい。

トサイト、大学で学生への告知など、多くの方に協力頂いた。中でも T さんは中央アジアに関する同人誌を複数冊発行され、中央アジアに関心をもつ日本人に大きな影響力をもつインフルエンサーである。彼女が中央アジアに関心をもつ人たちが緩やかに集まる SNS 上のグループに情報を拡散してくれ、本展示会の来場者数が増加した。これらの SNS 上で集まる人々は互いに何度も会話し、よく知っているにも関わらず一度も対面で会ったことがない人も多い。展示会で初めて対面で会えたという経験を話してくれる来場者もいた。研究倫理や個人情報保護に過敏な研究者としての筆者は、SNS やネットへの情報提示には慎重だった。だが後述する来場者アンケートの結果でも示されたように、展示会への来場者のおよそ 4 割は SNS から情報を仕入れており、SNS で情報を知った人が関心のありそうな知人に知らせるといった経路で展示会の情報が広まっていた。この結果、ワークショップには予想を超える申し込み人数があり、急遽ボランティアスタッフとして 5 名の学生スタッフに展示会受付業務や撮影などを担当してもらった。

上記のようにスザニ展では工芸制作者や研究者、販売業者や消費者だけではなく、T さんや印刷会社の担当者、展示会会場の責任者や展示スタッフなど、多様なアクターが協働していたことが分かる。彼らとの協働は通常大きく取り上げられることはないが、彼らが今回の展示会で来場する刺繍家とその作品が本物／真正性であると想像し、行動したことが展示会を現実／リアルに実現させたといえる。一方、大学事務担当者など科研費の使い方を監査する側は展示会販売を中止させる力をもっていた。

主催者であり研究者でもある筆者や制作者であるズフロに展示会のイニシアティブがあったのは事実だが、実際にはウズベキスタンのスザニ刺繍の実物を見る、有名な刺繍家に直接刺繍ステッチを学べるといった「真正性」を本展示会に想像できた人々の行動と、監査という形式で展示会の「真正性」を検証し直す人々（これをストラザーンは「検証の儀礼」⁽¹⁰⁾ [ストラザーン 2023: 18] と呼ぶ）との想像力が重ね合わされる中で本展示会の開催形式は決定された。展示やワークショップといった現実の場を来場者に提供できたのは彼らとの協働によるものといっても過言ではない。

2) スザニ展概要⁽¹¹⁾

スザニ展は 2024 年 2 月 2 日から 5 日まで実施された。会場には 5 日間でおよそ 560 名の来場者があった。2 月 3 日、4 日の土日には「ズフロ・オプロベルディエヴァ本人が教える刺繍教室」（以下ワークショップ）を実施し、申し込み 88 名、実際の参加は 74 名がズフロから刺

⁽¹⁰⁾ 「監査が……教育機関という公的機関に適用される場合には、……監査技術の形で内部統制を確実に実施することの方にあらさまに関心がある」[ストラザーン 2023: 19] とストラザーンは指摘している。

⁽¹¹⁾ 本稿で用いられる展示会の写真で主催者やスタッフ以外の来場者は個人が特定されないように顔の部分に加工を入れている。

表2 スザニ展概要

展示会概要	
展示会名	「ウズベキスタンの刺繍とスザニ：ウズベキスタンで最も有名な刺繍家、ズフロ・オプロベルディエヴァの世界」
日程、場所、 来場者数	2024年2月2日(金)～2月6日(火)
	ユニコムプラザ相模原 マルチスペース
ワークショップ	2月2日 51名、3日 137名(188)、4日 260(448)、5日 80(528)、 6日 32(560) 560名(5日間合計)
	ズフロ・オプロベルディエヴァ本人が教える刺繍教室
ワークショップ 日程	ユニコムプラザ相模原 実習室2
	2024年2月3日(土)、4日(日)
ワークショップ 日程	第1回 2月3日 13時～14時半 16(18)名
	第2回 2月3日 15時～16時半 17(18)名
	第3回 2月4日 10時～11時半 14(18)名
	第4回 2月4日 13時～14時半 12(17)名
	第5回 2月4日 15時～16時半 15(17)名 参加74名 申込88名
展示種類	スザニ(壁掛け)、パノール(目隠し布)など40点以上、クッションカバー、 バッグ、上着、テーブルクロス、ハンカチ、スカーフなど多数。来場者には ウズベク刺繍のモチーフの意味を説明したパンフレット配布

筆者作成

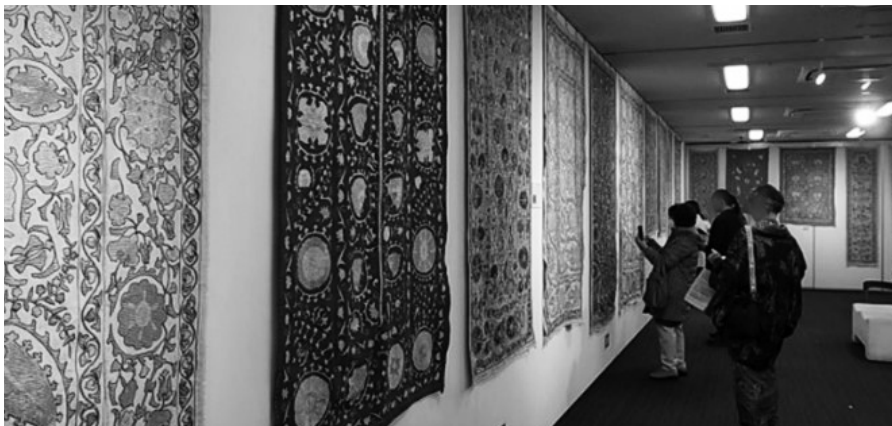


写真1 スザニ展で撮影する来場者

2024年2月3日 展示スタッフ撮影

織技法を学んだ。本展示会のコンセプトはズフロ・オプロベルディエヴァという現代の個人作家の作品紹介に注力することであり、制作者不明や年代不明の作品は展示しなかった。また制作は単なるアート(自己表現)ではなく、現地の女性刺繍作家が事業のイニシアティブをもち、事業によって村落部の下請け女性に収益がある点を配布パンフレットで説明した。

会場は相模原市の市民・大学交流センターである「ユニコムプラザさがみはら」を選んだ。理由は主に神奈川県内の大学の研究成果を一般の市民に公開する施設であること、また新宿



写真2 展示品の一例

2024年2月3日 展示スタッフ撮影

表3 写真2の展示品のキャプション

作品名	碁盤模様のスザニ (大判)
材料	100%天然染色の絹糸
サイズ	3 m × 3.2 m
制作年(制作地)	1997 年製 (ウズベキスタン、 ブハラ州ショーフィルコーン 地区)
制作方法	10 人の縫い子が1日5時間制 作し、6ヶ月間で完成
使用ステッチ	ザミンドゥズ

筆者作成

からも横浜からもアクセスが良い立地だったためである。展示会場として126㎡のマルチスペースを借用し、3枚の仕切りで4スペースに区切り、壁面と仕切りにスザニなどの壁掛け40点以上⁽¹²⁾を常時展示した。展示品にはズフロから聞き取った内容に基づき、キャプションをつけた。キャプションには作品名、材料、作品サイズ、制作年、制作方法および作品に使用される刺繍ステッチの種類を明記した(表3参照)。ズフロは展示会が決まってから展示会用の作品の大半を制作したため、作品の4分の3以上が2023年作だった。刺繍作品はどれも手作りにも関わらず制作スピードの速さに驚く来場者が多数いた。

1997年の作品～2023年の作品までどれも美しく、大切に保管されている事が分かりました。また制作期間のスピードに驚きました。大判のスザニは各々製作し、10人分の刺繍布を複合して製作しており、その跡が残っているのがとても趣深いと感じました(2024年2月4日来場者感想より。原文ママ)。

この制作スピードはズフロが20年以上かけて教育してきた刺繍ステッチの下請けをするぬい子たちによって可能となったものだ。大規模な下請けの組織化こそ、ズフロの刺繍事業を特徴づける要素である[今堀 2006a]。従って厳密な意味でズフロの作品は彼女個人のみが仕上げた作品とはいえない。ではズフロの刺繍作家としての真正性はどこにあるのか。後ほど考察していこう。

(12) 展示品は開催日や時間帯で入れ替えがあったため、正確な数字を出すことが出来ない。

展示レイアウトはズフロ来日後に展示会場を見学してもらい、彼女や展示スタッフと相談する中で決定していった。他の中央アジア工芸に関する多くの展示会との違いは、展示する作品をガラスケース越しでなく、刺繍ステッチや裏面をめくって直接に鑑賞できる展示法をとった点であろう。この点は来場者に「これはガラス越しに見るべき作品だと思う。実際に触れられるなんて贅沢」「ズフロさんの作品は裏側までが美しい」といった感想をもたらした。また来場者には写真撮影を可とし、SNS による拡散を許可した。ここから刺繍作品をバックにインスタなど SNS にアップする写真を自撮りする来場者が多数みられた。

日本人来場者が彼女の作品を鑑賞する中で見せた態度についてズフロは展示会最終日に以下のように述べた。

日本人の作品の鑑賞態度は他の国とは全く違い、とにかくステッチの細かい部分や裏側、糸や布地の質まで鑑賞している。これは今まで展示をしてきた他の国ではみられないことだ（ズフロ 2024年2月6日）

ズフロはウズベキスタン国外での国際展示会に何度も参加し、多くの外国人顧客をもつ。だが彼女の作品に対する日本人来場者の反応が彼女自身に作品の価値を再考させる契機になっていった。この感想をズフロが持つに至ったエピソード1を紹介したい。

〈エピソード1〉

展示会で日本人来場者の鑑賞態度の様子をうかがっていたズフロが筆者に話しかけてきた。

ズフロ「あの人たちは一体、私の作品で何を一生懸命探しているの？」

筆者「あれは作品の中で刺繍されていない部分を探しているんだよ」

ズフロ「どういうこと？」

筆者「調査を始めたばかりの頃、教えてくれたじゃない？ 刺繍モチーフにあえて縫い残しをつくる意味。それをキャプションの Q & A 解説としてつけておいたんだよ。」

筆者が書いたキャプションは以下のようなものである。

Q. 刺繍されていない、縫い残しの部分があるのはなぜですか。

A. 明らかに一つのモチーフの中で空いている部分、刺繍されていない部分がありますね。どうして刺繍しない部分を残すのでしょうか。それは作品を完全に終わりにしない、つまりこの仕事がいっまでも続きますように、という願いを込めている

とされています。最近はこの文化を理解しない人が多く、なくしてきたといっていますが、少しは残っています。探してみてくださいね。

ズフロ「あんたは天才だね！ いやノーベル賞ものだ！」

このキャプションによって来場者の多くがズフロの作品をみて必死に縫い残しを探し、見つからないと縫い残しがどこにあるかを教えてほしいと聞きに来ていた。筆者に自分で探してみるように言われてやっと見つけた大学生の一人は、
大学生「本当だ、こういう模様なのかと思っていました。ズフロさんの作品は刺繍の技術やデザインも本当に素晴らしいけど、こういうのがすごくエモくて、いいんですよ」と述べた。

実はこのキャプションは販売中止の対応に迫られていた筆者が展示会初日に慌てて後からつけたものであった。何の説明もない展示品を最初に見ていた展示スタッフの一人が上記のキャプションを見て言った。

展示スタッフ「こんな意味があったんですね、実は前から(作品に縫い残しがあることを)気づいていたんですよ。これ、聞いちゃいけないやつだと思っていました」

(2024年2月2日から5日に筆者が聞き取った内容に基づき、再構成)。

このエピソード1は刺繍モチーフの真ん中に明らかに残る刺繍し残した部分をめぐって、制作者、主催者(筆者)、来場者、スタッフの異なる想像力が重なり合うことで真正性をめぐるリアリティが作りあげられた事例である。まず制作者であるズフロは「真正なる」ウズベク刺繍には縫い残しがあることを学び、自分の作品に組み込んでいた(だが現在はあまり知られなくなり、殆どしていない)。だが20年前から彼女の制作スタイルを知る筆者は制作者本人すら忘れかけていた制作の特徴を展示会のキャプションでつけて、刺繍にみられる「真正性」として提示した。そのキャプションを見た来場者たちは技術の精巧さやデザインの美しさだけでなく、そこに隠されたウズベク刺繍の伝統や作者のストーリーを発見することで驚きや喜び(「エモい」)を見出し、制作者と主催者が提示した「真正性」にリアリティを感じ始める。一方、この解説を見ていない段階で作品に触れていた展示会スタッフは当初作品の欠陥(「聞いちゃいけないやつ」)と想像していた。つまり作品の出来映えを部分的に疑っていたのだが、欠陥ではなく、あえて残すという隠された意味を知ることによって欠陥に見えていた箇所を真正性の証として想像し直すのである。ここに刺繍の縫い残しをめぐって様々な想像力が向けられるが、最終的に展示会という場でお互いが縫い残しを発見し、その意味を語るという協働作業のプロセスによって真正性のリアリティが作り出されていくのである。このような真正性をめぐるリアリティは、ズフロのスケッチを実際に体験できるワーク

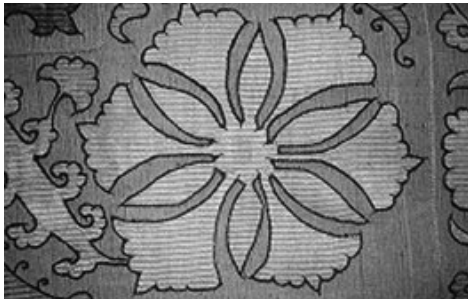


写真3 ザミンドゥズ(縁取り糸は黒綿糸)
2003年筆者撮影

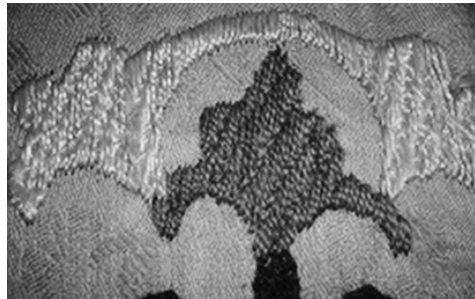


写真4 カルスドゥズ(縁取りはない)
2003年筆者撮影

ショップでより一層強化されるようになる。

3) ワークショップ概要

2月3日および4日の土日の2日間でズフロ本人が刺繍ステッチを教える刺繍教室を開催した。2日間で1時間半のワークショップを合計5回開催し、74名が参加した。場所はユニコムプラザさがみはらの実習室で行った。

ズフロの用いる刺繍ステッチは日本刺繍では一般に用いられないステッチであり、参加者はズフロの刺繍ステッチに高い関心を寄せていた。今回ワークショップでは、ズフロ自身の呼称に従って「ザミンドゥズ」(写真3)と「カルスドゥズ」(写真4)という2種類のステッチを扱うことになった。ザミンドゥズもカルスドゥズもブハラ・コーチング・ステッチ(ボスマ)と呼ばれる[福田 2024: 25]サテンスステッチの一種である。モティーフを埋める釜糸に掛糸を斜めに掛けて装飾を入れるのがカルスドゥズであり、同じようにモティーフを埋める釜糸に掛糸で装飾を入れるが、織り目に沿って直線の装飾を入れるのがザミンドゥズである。基本的な手の動かし方などは同じだが、綺麗な直線の装飾を入れるザミンドゥズは難易度が高い。刺繍教室はおよそ1時間半の時間を取り、以下のような流れで進行した。

1. 挨拶・解説(主催者、ズフロ)(写真5)
2. オーダーメイド⁽¹³⁾で刺繍モティーフを選び、下絵を描いてもらう(写真6)。
3. 刺繍糸を選ぶ(写真7)
4. 刺繍の仕方を教えてもらいながら、作品を仕上げる(写真8)。
5. 仕上がらない部分は刺繍糸を持ち帰り、自宅で仕上げる。

(13) ズフロの作品で用いられるモティーフを何種類か参加者に見せ、その中から選んでもらい、ズフロまたはズフロの娘がその場で参加者一人一人に描いて渡す形式。動物モティーフという希望も出たが、難易度やワークショップ時間内での制作といった点で花柄から選んでもらうことになった。



写真5 ワークショップの趣旨説明

左は筆者、スカーフを頭に巻く女性がズフロ
2024年2月3日 展示スタッフ撮影



写真6 下絵を描く

2024年2月3日 展示スタッフ撮影



写真7 染色した絹糸を渡す

2024年2月3日 展示スタッフ撮影



写真8 刺繍ステッチを指導する

2024年2月3日 展示スタッフ撮影

筆者は主にズフロの通訳を務める傍ら、刺繍モチーフや刺繍糸の説明、ズフロの工房での制作や指導法などを参加者に解説した。ズフロと娘が二人で下絵を描いて渡し、刺繍ステッチを指導した。参加者は刺繍するモチーフを選び、自家染色された手紡ぎの刺繍糸から好きな色を取るなど、選択の幅が広がるように工夫を凝らした。

刺繍ステッチの指導には大学生の展示会スタッフにステッチの研修を予めズフロから受けてもらい、日本語で刺繍指導できるように準備した。参加者には刺繍初心者から熟練者も含まれ、ウズベキスタン渡航経験の有無も様々だった。多くの参加者は刺繍の刺し方を一度見せてもらっても、いざ自分で始めると正しい刺し方ができないこともあり、途中で何度もズフロや彼女の娘に自分の刺し方が正しいかどうかをチェックしてもらっていた。当初ザミンドゥズを習得しようとした参加者も、まずは簡単なカルスドゥズから始めるがそれもうまく刺繍できない場合もあった。ズフロは「彼女が刺繍した、この部分をほどいてしまっても問題ないか」と確認し、実際に参加者の刺繍の一部をほどき、正しいステッチを刺してみせていた。これらの体験を通じて、多くの参加者は習得の困難なザミンドゥズで美しい直線を仕上げるのがいかに大変かを実感した。主催者である筆者に「ザミンドゥズの習得はどれくらいかかるのか」「現地のぬい子さんたちはどうやって習得しているのか」などの質問が相次ぎ、

筆者は調査で見たズフロの指導の様子を解説した。ワークショップ参加者の一人は「自分がワークショップに参加してみて初めて大変さが分かった。展示品に対する見方まで変わった」と述べていた。ズフロの指導、筆者のステッチをめぐる解説、そして参加者の刺繍体験すべてが共に重なり合う／協働することによって、ズフロの作品に施される刺繍技能の高さ、すなわち価値の差異化が真正性のリアリティをもって参加者に共有された瞬間であった。

次にワークショップや展示会を通じてみたズフロや娘による作品の真正性についての語りをみていこう。ワークショップでは参加者に選択の幅を最大限尊重するように組んでいたが、参加者は完全に自分の好きなモチーフに好きな色の刺繍糸を選べるわけではなかった。以下のエピソード2を紹介しよう。

〈エピソード2〉

あるワークショップ参加者はそもそも寒色系の色が好みで、ズフロが描いたカーネーションの花のモチーフに水色に染められた刺繍糸でステッチを始めた。それをみたズフロの娘が「これは、色を変えたほうがいいのかもしいわね」といった。彼女はもちろん好きならそれでいいかもしれないが、と断ったうえで「この花はカーネーションなのでカーネーションに水色はないでしょう。ピンク色がいいかと思うのだけど。水色の刺繍糸を使いたいのであれば、綿花のモチーフにしてはどうでしょうか」といった。その参加者は水色の刺繍糸ではなく、ピンク色の刺繍糸でカーネーションの花の刺繍ステッチを刺し始めた(2024年2月4日)。

ズフロが描く刺繍デザインは必ずしも現実の花の色に即した配色だけとは限らない。そもそもモチーフも現実にある花だけではないし、商品ではないので参加者がモチーフに何色の刺繍糸で刺繍するかは自由なはずである。だがズフロやその娘には彼女たちの刺繍作品には「正統／真正」とされる配色のパターンがある。それを個人の好みで動かすことができないという。同様のことは展示会におけるズフロ自身が語ったエピソード3でもみられる。

〈エピソード3〉

ズフロの刺繍展示品をみた来場者の一人が「ズフロさんの作品はピンク色の刺繍デザインが多いんですね。ピンクがお好きなんですか」と質問した。私がズフロに通訳すると、彼女は「私はもともとピンクは好きではない、寒色系の色のほうが好きなんです」と答えた。そして「私の好みでこれらの刺繍作品の配色を変えるわけにはいけないので。これは私たちの地域で継承されたデザインだから。個人の好みで勝手に色を変えるわけにはいけないのです」と答えた。

ここにズフロが考える刺繍作品の真正性が垣間見える。彼女にとっての刺繍作品の真正性は自分一人で仕上げ、自己表現の手段とするアートにみられるそれではない。むしろ彼女は地域で継承された民族文化を体現する存在たらしめている。だがそれは彼女が地域の他の女性たちと同じ無名の存在であり、刺繍品を無銘と考えるからではない。彼女は彼女自身の刺繍作家としての真正性を地域で継承されたデザインや配色に基づく作品であることや、卓越した刺繍技術をぬい子に指導して品質を管理している点に見出しているのではないだろうか。では彼女が重視する刺繍のデザインや配色は来場者にどれほど真正性として捉えられているのだろうか。

アンケート調査結果からみる協働による真正性のリアリティ

筆者は展示会開催期間の5日間、展示会来場者にアンケート調査を実施した。調査手法は来場者にアンケート項目にアクセスできるQRコードを印刷した紙を配布し、QRコードをスマートフォンで読み込むと質問票にアクセスでき、展示会場で回答を収集した。展示会場におけるアンケート回収率向上のため、送信画面を見せた回答者にはウズベクの菓子を配布した。実施したアンケート項目⁽¹⁴⁾は22項目であり、アンケート回答者総数は189名であった。本稿では工芸の価値の差異化と真正性をめぐるリアリティを議論するために、来場者アンケートの回答者の属性をめぐり、作品の価値、天然染色、刺繍ステッチ、刺繍モチーフの項目のみ取り上げて紹介する。データが指し示す意味を読み取る過程で、筆者のフィールド調査による知見も併せて考察していきたい。

まず回答者の属性についてまとめていこう。回答者の男女比は女性134名、男性37名であり、およそ4分の3の回答者が女性であったことがわかる。回答年齢層は20代前半(大学生)が65名で最多だが、次に多いのは50代(39名)、40代(25名)、60代と30代(ともに22名)であり、比較的幅広い年代に回答者が散らばっていた。また先述したように展示会を知ったきっかけはSNSやメーリングリストが最多(78名)だが、主催者からの告知(52名)や知人・友人経由(51名)の来場者も多かった⁽¹⁵⁾。

⁽¹⁴⁾ 各質問項目は回答必須ではなく、回答できない質問に答えないことも可能とした。したがって各項目で回答者数は異なる。

⁽¹⁵⁾ 上記の回答者の属性をめぐり質問項目から、展示会来場者には2つのグループが存在していたと推測できる。第1には、主催者である筆者や大学教員からの告知で展示会場を訪れた大学生男女のグループ(主催者や知人からの告知を受けた項目と、20代前半の大学生の項目によるクロス集計で54名)と、第2には、先述したインフルエンサーやSNS経由で展示会を知った、30～60代女性のグループ(女性の項目と、30代から60代までのクロス集計で98名)である。展示会における聞き取りでは後者のグループには前者に比べてウズベキスタン渡航経験のある人たちが少なくなく、ウズベキスタンや手工芸に関心のある人が多かった。前者は教員の紹介であり、後者に比べてウズベキスタンの刺繍に対する知識・関心は必ずしも高くはない。彼らは同じ作品を見ても、評価や価値付けが異なる可能性がある。この検討は別稿に譲りたい。

表 4 ズフロの作品の価値についての回答

刺繍ステッチの細かさ	135
デザインの独創性	109
刺繍糸（絹糸）の品質	76
大判の布地全面にすべて刺繍されていること	119
天然染色を自ら行っていること	106
手織りの綿布を使用していること	60
伝統的なモチーフを使用していること	89
使用するモチーフが多いこと	57
古いデザインに新しいデザインを組み合わせているところ	44
多くの農村女性に仕事を与えていること	83
その他	9

次にズフロの作品の価値について問うた質問の回答を取り上げよう。

表 4 はズフロの刺繍作品の価値について選択式で問うた質問⁽¹⁶⁾の回答である。「その他」を含む 11 の選択肢の中から、複数回答可能な状態で回答を得ている。

まず「刺繍ステッチの細かさ」を選択した回答者は 135 名で最多であった。次が「大判の布地全面にすべて刺繍されている」119 名、「デザインの独創性」109 名、「天然染色を自ら行う」106 名であった。最も少ない「古いデザインと新しいデザインの組み合わせ」44 名や「刺繍モチーフの多さ」57 名はさほど大きなインパクトを与えなかったのかもしれない。ここから回答者にとってズフロの作品における価値は、大判の布地に細かい刺繍が施されており、天然染色の刺繍糸を用いて独創的なデザインの刺繍作品を制作していることと理解できる。だが刺繍作品だけでは気づくことのない「多くの農村女性に仕事を与えていること」に 83 名が価値を見出している点は彼女の事業家としての社会貢献にも注目が集まったと言える。

ズフロが刺繍制作で特に力を入れている天然染色(表 5)、刺繍ステッチ(表 6)、刺繍モチーフ(表 7)について質問をまとめたのが表 5 から表 7 である。いずれも複数回答可能である。

まず刺繍糸の天然染色(表 5)について最も多い回答は「すべての絹糸を天然染料で染色し、材料も明示してほしい」80 名である。表 4 でも明らかになったように、多くの回答者は天然染色に関心が高い。だがズフロの作品には天然染色による絹の刺繍糸がふんだんに用いられているが、モチーフを縁取りするために既製品の黒綿糸も使用されている。これは淡い色合いの天然染色による刺繍糸で刺繍されたモチーフをより鮮明に見せるために施されている工夫である。この工程の有無で 1 週間から 10 日の日数に違いが出る手間のかかる工程だ。

⁽¹⁶⁾ 来場者アンケートの質問項目が自由回答ではなく、選択式をもちいた段階で選択肢の内容そのものにアンケートを準備した主催者の恣意性が含まれていると予め理解しておく必要がある(むろん質問項目そのものにも恣意性はある)。従って本アンケートの結果は決して客観的データと受け取るべきではない。むしろ主催者と回答者の間主観的な相互行為／協働のなかで生み出されたデータと受け取るべきである。尚、選択式を使用した理由として 22 項目ある質問に展示会の会場内で短時間に回答できるように配慮したためである。22 項目のうち 4 項目のみ自由回答とした。

表5 ズフロの天然染色についての回答

すべての絹糸を天然染料で染色し、材料も明示してほしい。	80
刺繍糸の色のバリエーションを増やすためなら、天然染料と人工染料を合せて使用してもいい。	72
天然染料にこだわりはない。人工染料を用いても手に入りやすい価格にしてほしい。	20
天然染料にこだわりはない。デザインやモチーフが素晴らしいければそれでよい。	51
その他	10

表6 ズフロの刺繍ステッチについての回答

ザミンドゥズの直線が美しく整っているのが素晴らしい。	110
ザミンドゥズの直線が揃いすぎてミシンのような印象を与える。	6
ザミンドゥズの直線をどのように綺麗に揃えるのか、人の手でどうすればあれほど綺麗に揃うのか、不思議に感じる。	94
カルスドゥズのほうが絹糸の質感が美しく出て、素晴らしい。	29
カルスドゥズは粗雑な印象を与える。	2
刺繍ステッチの違いはあまり気にならない。	30
他のステッチもたくさん用いた方がいい。	3
日本にはないステッチなので、どのように刺すのか、気になる。	98
その他	9

表7 ズフロの刺繍モチーフについての回答

伝統的なモチーフが多く使われており、素晴らしい。	125
モチーフの中に何色もの刺繍糸が多用されており、価値がある。	114
唐草模様がイスラーム文化の影響を感じる。	68
複数の花模様が用いられており、デザインの豊かさを感じる。	109
デザインや多彩色の色がひしめき合っており、実用に向かない。もう少し少なくした方がいい。	5
伝統的なものだけでなく、新しいデザインも用いた方がいい。	8
ウズベキスタンの伝統的なモチーフのみを使用してほしい。	6
その他	6

大判で高級品のザミンドゥズの作品ほど、この縁取りがなされているのが特徴である（写真3参照）。この黒綿糸を絹糸に変えられないかと述べた筆者に対して、ズフロは黒の染色は色落ちするから難しいと語った。ここから100%天然染色が高級品と捉える回答者とズフロの作品作りにはズレが生じている。

表6は刺繍ステッチについての回答である。「日本にはないステッチなので、どのように刺すのか、気になる」は98名いた。ワークショップに参加しなかった展示会の来場者の多くはズフロのステッチが日本で一般に用いられないために、ステッチの違いが分からない人が多

数いたと想像できる。刺繍に詳しい人でなければ、ステッチの難易度は一見してわかりにくい。

そのため「刺繍ステッチの違いはあまり気にならない」30名は少ないとみることもできる。むしろ「ザミンドゥズの直線が美しく整っているのが素晴らしい」110名、「ザミンドゥズの直線をどのように綺麗に揃えるのか、人の手でどうすればあれほど綺麗に揃うのか、不思議に感じる」94名と、先述したザミンドゥズが高い評価を受けているのが分かる。一方、ザミンドゥズを低く見積もる「ザミンドゥズの直線が揃いすぎてミシンのような印象を与える」は6名のみである。

この難易度の高いザミンドゥズに高い評価を与える結果には一見疑問はないように感じるかもしれない。だが2023年に筆者が調査した限りでは、ウズベキスタン、ブハラの観光地では手間がかかりすぎる上に、カルスドゥズやチェーンステッチより倍以上刺繍糸を使用するザミンドゥズの評価は高くなく、あえてこのステッチを使用する刺繍家は殆どいない。それは「観光客にはステッチの違いは理解されない」「デザインや配色の美しさが購入の決め手」といった言説が現地では多数を占めていたからである。むしろ「ミシンのような印象」と批判され敬遠されることすらあり、ブハラの刺繍家たちは近年チェーンステッチの刺繍作品を制作する傾向にある⁽¹⁷⁾。それゆえ来場者アンケートでザミンドゥズが高い評価を受けた理由は、展示品で実物を見るだけではなく、ワークショップでの実体験や主催者による解説セッションが効果を発揮した結果と推測できる。

最後に表7の刺繍モチーフの質問項目において、「伝統」的モチーフについては両義的な回答がみられる。「伝統的なモチーフが多く使われており、素晴らしい」は125名であり、ズフロ作品の伝統的モチーフが多くの人に評価されていると考えられる。だが一方で「ウズベキスタンの伝統的なモチーフのみを使用してほしい」は6名のみである。伝統モチーフだけでは十分でない一方、「伝統的なものだけではなく、新しいデザインも用いた方がいい」も、やはりたったの8名である⁽¹⁸⁾。回答者はズフロの作品に伝統モチーフに限定するのでも、過度に斬新なデザインを取り入れるのも求めている。回答者がズフロという作家に求めているのは「モチーフの中に何色もの刺繍糸が多用されており、価値がある」(114名)といったズフロ自身が作家性として重視する多彩色の刺繍糸を用いた配色および、「複数の花模様が用いられており、デザインの豊かさを感じる」(109名)といったデザインの豊かさであると考えられる。ここからズフロの作品の差異化を目指すのであれば、配色や豊富なデザインという特徴を強調すべきであることが分かる。

以上、来場者アンケートの一部項目からズフロの作品の価値について考察してきた。これ

⁽¹⁷⁾ 観光客用の刺繍品を制作する刺繍家たちは販売店でどのような刺繍が好まれるか、を販売店から伝えられることが多い。その情報のやり取りで売れ行きの良い刺繍品を制作して販売店に持ち込むことが一般的である。

⁽¹⁸⁾ ここで想起されるのは先述した「工芸技術とは倣作ではない」とした濱川[2023]の指摘である。

らの回答は展示会での鑑賞経験やワークショップでの刺繍体験という制作者、主催者やスタッフ、鑑賞者が協働するプロセスで生み出された内容であることが重要である。すなわち、ある工芸の価値を「真正」として差異化するには、作品に施された卓越した技術、素材やデザインに加え、展示会やワークショップという場で多くの人々が協働し、そのリアリティを作りあげていくプロセスも併せて重視していく必要があるだろう。

おわりに

本稿では筆者が主催したスザニ展の開催経緯から展示会、ワークショップ、来場者アンケートにおいて、いかに展示会に関わった人々が展示会そのものや、展示会の作品、ワークショップでの体験を通して「真正性」のリアリティを見出すのかを考察してきた。

まず展示会開催の契機として、20年以上にわたって筆者に研究協力をしてくれたことへの応答に加え、2020年のズフロの受賞があった。展示会はウズベキスタンで受賞した刺繍作家という作家性のブランドに真正性を見出した多くの協力者との協働で実現可能になった。展示会ではズフロの作品の大半が多くの下請けぬい子によって仕上げられている事実が明示され、彼女一人がすべて仕上げた作品ではないという「公然の秘密」が暴かれたともいえる。たとえそのような「秘密」の一つが暴かれたとしても、彼女の刺繍作品の価値をめぐるまた別の基準（地域で継承されたデザインや配色、卓越した技を下請けのぬい子に指導できる力、農村女性に仕事を与える社会貢献、作品の縫い残しの意味をめぐる感動など）が彼女の作品に真正性を与える新たな語りとしてリアリティをもち、多くの人を惹き付ける原動力になった。

だが本稿で扱ったズフロの作品が来場者に真正性のリアリティを持ちえたのは、それが本物か偽物かどうかの最終判断を永遠に先送りする決定不可能性によって生み出されたわけではない。むしろ彼女の作品の真正さをめぐる多様な価値づけの基準の中から、制作者であるズフロや娘、主催者、販売業者、来場者、展示会スタッフなどが、それぞれ自分の感じた価値を互いに語り合い、発見し、体験するという協働の過程の中から真正性のリアリティが共有されていったのではないだろうか。

今後、工芸家の活動の幅を広げるために刺繍作品の差異化を目指すのであれば、多様な基準における「真正性」を多くの人々が共に作り上げる協働の場を確保することにも積極的に取り組んでいく必要があるだろう。

謝辞

本稿で扱われている展示会は科学研究費、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））、

研究課題「ウズベキスタンの手工芸史の再構築と「守るべき伝統」による地域開発の研究」(研究代表者:菊田悠)の助成を受けて行われました。記して謝意を表します。本展示会に携わってくださった全ての方、とくに刺繍家ズフロと娘さんをはじめ、スタッフや来場者の皆様にも心より感謝申し上げます。本稿執筆にあたっては、査読者や編集者の方から貴重なコメントを頂きました。この場を借りて、御礼申し上げます。

参考文献リスト

〈日本語文献〉

- 今堀恵美 2006a「ポスト・ソビエト期におけるカシュタ(刺繍)制作と副業——ウズベキスタン・ブハラ州ショーフィルコーン地区の事例から——」『日本中東学会年報』21(2)、13-140頁。
- 2006b「市場経済におけるカシュタチ(刺繍屋)事業の誕生——ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区の事例から——」『社会人類学年報』32、57-84頁。
- 2021「ウズベキスタンのコロナ対策と観光業および工芸制作へのインパクト」菊田悠・今堀恵美・宗野ふもと『ウズベキスタン手工芸史の再構築と「守るべき伝統」による地域開発の研究成果中間報告書』札幌:アイワード、25-43頁。
- 2023「フィールドワーカーの布語り、モノがたり(3) 女性の生活が変われば、布も変わる——ウズベキスタンの刺繍布とスザニ——」『季刊民族学』47(3)、96-103頁。
- インゴルド, ティム 2020『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子(訳)、東京:亜紀書房。
- 内田哲人・木谷庸二 2018「「作家性」に着目したブランド・コミュニケーションに関する研究」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』65、534-535頁。
- エスコバル, アルトゥーロ 2022『開発との遭遇——第三世界の発明と解体——』北野収(訳)、東京:新評論。
- 大淵和憲 2021「伝統工芸産業の新たな支援手法に関する一考察——佐賀県におけるNPOによる支援活動の事例より——」『日本地域政策研究』26、100-106頁。
- ストラザーン, マリリン 2023『監査文化の人類学——アカウンタビリティ、倫理、学術界——』丹羽充他(訳)、東京:水声社。
- 関根久雄 2008「特集:人類学と開発援助」『国際開発研究』17(2)、1-7頁。
- 地球の歩き方編集部 2023『23 地球の歩き方 Plat ウズベキスタン サマルカンド ブハラ ヒヴァ タシケン』東京:Gakken。
- 登久希子・兼松芽永 2020「序〈特集「協働／プロセスの人類学——同時代のアートをめぐる省察から——〉」『国立民族学博物館研究報告』45(2)、237-260頁。
- 濱川和洋 2023「工芸作家の作家性に関する一考察」『九州産業大学伝統みらい研究センター論集』6、37-50頁。

廣田千恵子・カプデイル, アイナグル 2019『カザフ刺繍——中央アジア・遊牧民の手仕事、伝統と文様の作り方——』東京: 誠文堂新光社。

福田浩子 2024「中央アジアの刺繍布スザニについて(3)——令和4、5年度スザニ刺繍ワークショップ報告——」『広島県立美術館研究紀要』27、23–28頁。

柳宗悦 2005『工藝の道』東京: 講談社。

渡部瑞希 2017「観光研究における真正性の再考察」『観光学評論』5(1)、21–35頁。

〈外国語文献〉

英語

Mentges, G. and Shamukhitdinova, L. 2013. *Modernity of Tradition: Uzbek Textile Culture Today*. Munster: Waxmann.

Wang, N. 1999. “Rethinking Authenticity in Tourism Experience,” *Tourism Research* 26 (2), pp. 349–370.

ロシア語・ウズベク語

Бинафша, Н. 2021. Ўзбекистон Амалий Санъати. Китоб Альбом. Тошкент: San’at журнал нашриёти.

Морозова, А., Аведова, Н., Махкамова, С., 1979. Ўзбекистон Халқ Санъати: Ганчикорлик, Ёғоч Ўймакорлиги, ва Нақши, Қуллочилик, Газлама, Каштадўзлик, Чарм ва Металлардан Ясалган Буюмлар. Тошкент: Ғафур Ғулом Номидаги Адабиёти Нашриёти.

Раҳмова, М., Ҳамроев, А., Ҳамроев, С. 2017. Бухоро Хунармандлиги Зебу Зарлари. Тошкент: O‘zbekistan НМИУ.

Раҳмонова, М., Ҳамроев, А. 2019. Бухоро Хунармандчилиги Дурдоналари. Тошкент: O‘zbekistan НМИУ.

Сухарева, О. А. 2006. Сузани: Среднеазиатская Декоративная Вышивка. Москва: Восточная лит. Ўзбекистон Миллий Энциклопедияси (ЎзМЭ). 2016. Ўзбекистон Хунармандчилиги ва Амалий Санъати. I: Энциклопедия. Тошкент: Давлат Илмий Нашриёти.

Ҳакимов, А. 2023. Ўзбекистон Хунармандчилиги[Матн]: Китоб-Албом. Тошкент: Oshun.

Чепелевецкая, Г. А. 1961. Ўзбекистон Сўзанаси. Тошкент: ЎзССР Давлат Бадий Адабиёт Нашриёти.

〈HPなど〉

Uzdaily 2024年4月1日付〈<https://uzdaily.com/uz/post/9208>〉(2024年5月13日閲覧)

CNN 2024年1月2日付〈<https://edition.cnn.com/travel/best-destinations-to-visit-2024/index.html>〉(2024年5月4日閲覧)

駐日ウズベキスタン大使館文化観光局 HP 〈<https://visituzbekistan.jp/archives/1548/>〉(2024年5月4日閲覧)

ウズベキスタンの STEAM型人材養成教育政策に関する研究

木之下 健一

はじめに

本稿の目的は、ICTと文理系科目の統合型教育であるSTEAM教育について、ウズベキスタン政府の教育政策の概要、国内法の整備状況、そして社会的な昨今の動静を踏まえつつ、学校教育現場における施策展開の状況について検討を行うことである。

STEAM教育とはScience(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Mathematics(数学)を統合的に学習する従来型のSTEM教育に対して、更にArts(芸術(Art)またはリベラル・アーツ(Arts))⁽¹⁾を加えたものである。2000年代以降、学力の向上、文理融合型の学びの推進、AI等の革新的技術の登場に対応しながら新しい社会基盤と技術革新を生み出せる人材の育成を目指して、世界各国で導入が進められている。

本稿が研究対象とするウズベキスタンにおいては、2019年の大統領決定以降、教育政策に関する法令において「STEAM教育(STEAM ta'lim)」⁽²⁾の用語が頻出するようになり、国家の科学技術・経済の発展に繋がる重要な教育政策の一部としての位置づけが与えられている。またSTEAM教育の導入に際しては、国外の高等教育機関からの教育パッケージの提供やICT関連企業との提携なども一つの潮流となっており、世界的な競争力のある産業と新たな雇用の創出に向けて中長期の教育政策の策定が目指されている。

こうしたウズベキスタンにおけるSTEAM教育の導入については、これまでに白村・西山・木之下[2024]、小金澤[2024]など日本語でも動向を紹介した研究が見られるが、こうした研究においてはSTEAM教育に関連する政策文書の内容を踏まえた検討が十分に行われてい

(1) STEAMの「A」が「芸術」や「デザイン」の「Art」なのか、「リベラル・アーツ」や「教養」を意味する「Arts」なのか、国や論者によって見解が異なる[辻合・長谷川2020: 94–95]。

(2) 2022年の大統領令で「STEAM」の「A」はdizayn(デザイン)であるとしている[O'zbekiston Respublikasi prezidentining farmoni 2022]。また現地研究者の論文においても、STEAMの「A」とは「san'at(芸術)」であるとの言及が一般的である[To'raqulov va Xudoyberdiyev 2024: 58; Hamroqulovna 2023: 113]。このことから、ウズベキスタンにおいては「STEAM」の「A」は「リベラル・アーツ」ではなく主に「デザイン」の意で受容されていると考えられる。

なかった。また現地の研究者による文献においても、Anvarova and Bekpolatova [2023]、Qurbonova [2023]、Xo'djamberdiyev [2024]、To'raqulov and Xudoyberdiyev [2023] 等の STEAM 教育関連の論文が見られるが、アメリカの STEAM 教育の歴史や方法論を紹介したものが多く、グローバルな動向を踏まえたウズベキスタン政府の新たな教育政策に関する検討が十分に行われてこなかった。

こうした点を踏まえて、本稿において前述の目的を明らかにするために、具体的に以下の作業を行う。まず第1章で教育制度の概要に触れた後、第2章においてSTEAM教育の理論的な展開を概説し、第3章でSTEAM教育を巡る各国の動向について整理する。そして第4章で近年発表されたSTEAM教育に関する政策文章の内容についての検討を行う。その際一部の学校で先行して実施されているSTEAM教育の内容を検討しつつ、その他の政治、経済に関する政策の方針を踏まえて分析を行い、最後の第5章では全体を通しての分析を行う。

1. ウズベキスタンの教育制度の概要

政府が具体的に学校教育のどの段階で、どのようなSTEAM教育を導入しようとしているのかという点を検討するに当たり、教育制度の概要について確認をしておきたい。

ウズベキスタンの教育制度は、就学前教育 (maktabgacha ta'lim: 3-6歳)、普通中等教育 (umumiy o'rta ta'lim: 6-17歳。日本の初等・中等教育に相当)、高等教育 (oliy ta'lim: 17歳-) の3段階に大きく分かれる。

普通中等教育を行う学校数は2023年度時点で10,163校(都市部1,440校、地方の中心都市部981校、農村部7,128校、遠隔地614校)である [Maktabgacha va maktab ta'limi vazirligi 2023]。児童数は増加し続け2022年1月以降5年以内に120万人増、2025年には合計700万人を超えることが見込まれており、学校の新設や改築が現在も進められている [KUN.UZ. 31.1.2022]。

2020年度 of 教育制度改革以降、9年生以降は所属する学校での10-11学年の継続、高等教育機関への進学を目的とする2年間のアカデミック・リツェイへの進学、または2年間の後期中等教育機関であり初等職業教育機関である職業技術学校 (kasb-hunar maktab) への進学へと分岐する。職業技術学校修了後は中等職業教育機関であるコレッジ(2年制)に、更にその後中等専門職業教育機関であるテフニクム(2年以上)に進学が可能となる。全国の機関数及び生徒数は、2021年度時点でアカデミック・リツェイ86校3万6千人、職業技術学校342校16万8千人、コレッジ184校9万5千人、テフニクム215校約10万5千人余りとなっている [O'zbekiston Respublikasi davlat statistika qo'mitasi 2021]。職業専門教育を担う機関に対しては、労働市場の需要を満たす優秀な人材の輩出や、革新的な科学技術を生み出す基盤を整

えることが求められている [O‘zbekiston Respublikasi prezidentining farmoni 2019b]。

一方、高等教育は総合大学 (universitet)、アカデミー (akademiya)、単科大学 (institut) 等において行われる。高等教育機関における在籍者数も年々大幅な上昇傾向にあり、2017年度は約 29 万 7 千人であったが、2021 年度には 80 万 8 千人 [UZSTAT 2021: 4]、2023 年度には 133 万 7 千人余りにまで増加している [Oliy ta’lim, fan va innovatsiyalar vazirligi 2024]。2023 年度在籍者の男女比は男性 49.21%、女性 50.76% であり [Oliy ta’lim, fan va innovatsiyalar vazirligi 2024]、専門分野別に在籍者数を見ると「人文」37 万 9 千人、「社会・経済・法学」12 万 2 千人、「生産技術」18 万人、「農業・水資源管理」3 万 8 千人、「健康・社会保障」5 万人、「サービス産業」3 万 7 千人余りとなっている [UZSTAT 2021: 11]。こうした学生の比率からは、STEAM 教育の実施と新たな科学技術の発展において中心的役割を担う「生産技術」、「農業・水資源管理」、「健康・社会保障」、「サービス産業」等の科学技術分野に学ぶ学生数が、その他の人文社会科学領域の学生数と比べて少ない様子が窺える。科学技術分野に学ぶ学生の層を厚くしていくことも、今後のウズベキスタン政府にとっての課題であると考えられる。

2. STEAM 教育の理論的な展開

ウズベキスタンにおける STEAM 教育の展開について考察するに当たり、アメリカに始まった STEAM 教育の展開、諸外国への波及の様子、政策上の動向について概観しておきたい。

まず STEAM 教育の前段階とされる STEM 教育は、元々は 2000 年代の米国において、学力低下への懸念を背景として、学力向上と米国の国際競争力強化を目的として提唱された概念であった [辻合・長谷川 2020: 95]。国際学力調査の PISA や TIMSS の普及により、各国は他国との学力の比較を行うことが可能となったが、学力調査の結果が思わしくなかった米国等においては、児童・生徒の科学技術リテラシーを高める STEM 教育を国家戦略の中に位置づけ、国家の国際競争力、影響力の伸長に結びつけようとする動きが広まった [ヤング吉原・木島 2019: 64]。

その後米国において 2006 年から 2008 年にかけて G. Yakman が一連の研究の中で、STEM 教育に Arts を加えて STEAM 教育とすることを提唱した [Yakman 2006; 2008] これは統合的な科学技術教育を志向する STEM 教育の実践に止まらず、より洗練されたデザインやリベラル・アーツとの融合を意図したものであった。この Yakman の提唱する STEAM 教育の理念の広がりを受けて、その後米国内で「単なる STEM では十分ではない、STEM から STEAM に拡大することが重要である」として、“From STEM to STEAM” という標語が登場した [藤岡・胸組・熊野・大辻 2022: 15]。これは科学、技術、数学の原理を研究、応用するためには、結局のところ芸術 (Art) 分野で得られるスキルが求められている、とする考えに

よるものであった [Sousa and Pilecki 2018: 4]。また STEM 教育が自然現象、人間の日常生活の中での技術的、工学的な課題解決のため、1つの解決策を目指す傾向 (収束思考: convergent thinking) がある一方で、STEAM 教育に含まれる芸術 (Art) は芸術を行う個人の主観的価値観が優先し、個人個人で異なる解決策を模索する傾向 (拡散思考: divergent thinking) を促すものであり、より多面的見方が促されるとして、新しい解決策を生み出すことが期待された [胸組 2019: 64]。

近年では、STEAM 教育に更に Robotech (ロボット工学) の「R」を加えた STREAM 教育と言われる概念も登場してきている。STREAM 教育では、プログラミング学習をする際にロボットを使用することで、プログラムした内容を目の前で確認することが出来たり、センサ (入力) とアクチュエータ (出力) との関連をプログラムで制御すること (論理的思考) が実践出来る等の利点があるとされている [川原田 2023: 173]。

また STEAM 教育は新しい社会状況の下での ICT の知識・技能の獲得のみが目的ではなく、必要とされる情報の判断、発信する情報の意義や価値などについての判断能力も養うものとされる。身の回りの情報それ自体は断片的な情報に過ぎず、それらを有機的に組み合わせ、体系化・組織化して判断や行動に繋げるといふ、一連の情報活用を学ぶ方法としての位置づけが STEAM 教育には与えられている [藤岡・胸組・熊野・大辻 2022: 13]。

そして 2020 年前後から、AI の進化や世界的 IT 企業の一層の伸長に伴って、STEAM 教育を通じた人材養成への期待が一層高まっている。AI については、今後人間以上に仕事を合理的かつ自動的に行うことが見込まれており、人間が就ける職業は、AI が得意ではなく人間の個性や感性の発揮が必要とされる分野、或いは AI 自体を使いこなす職業となることが予想される。前者については、人間がデザインし表現する仕事であり、自然現象、社会現象の因果関係に関する理解が必要であり、後者についてはプログラミング的な手段を使いこなせる必要があるが [藤岡・胸組・熊野・大辻 2022: 18-19]、こうした点においても STEAM 教育が大きな役割を果たすと考えられる。

アメリカに始まった STEAM 教育は以上のような理念の下で展開してきたが、ウズベキスタンにおける STEAM 教育もまた、後述する政策文書の記載内容、また現地研究者の論文を見る限りにおいては、概ね上記のような概念の下で受容されてきたと考えられる。例えば Anvarova と Bekpolatova は、STEAM 教育とは思考力を鍛え、問題解決能力を伸ばし、創造性を身につけるとする [2023: 447]。また、Qurbonova は、STEAM の目的は、世界の開発と経済の持続的な発展に向けて学校と国民を巻き込みながら、科学的リテラシーと競争力を高めることであるとしている [2023: 1470]。

3. STEAM 教育を巡る各国の動向

次にウズベキスタン政府が進める STEAM 教育を検討するための論点を明らかにするために、各国における STEAM 教育の導入の状況について概観したい。下記の表 1 は、6 カ国の STEAM 教育の状況についてアジア開発銀行がまとめたものである。

表 1 各国における STEAM 教育の動向⁽³⁾

項目	フィンランド	シンガポール	バングラデシュ	カンボジア	クルグズ共和国	ウズベキスタン
STEM 科目における現職教員教育の水準	高度	高度	発展途上	発展途上	発展途上	発展途上
教師の専門能力開発	高度	高度	発展途上	発展途上	発展途上	発展途上
STEM 教育の実践	高度	高度	発展途上	発展途上	発展途上	発展途上
一般的な学校教育における STEM 教科の有無	初等教育段階において有り	無し	無し	無し	無し	無し
教員養成機関の研究活動レベル	高度	高度	発展途上	発展途上	発展途上	発展途上
科学センター(拠点)の有無	有り	有り	無し	無し	無し	無し
科学技術発展に向けた科学アカデミー及び科学系諸学会の長期的連携の有無	有り	有り	有り、ただし非政府系組織の活動は限定的	有り、ただし非政府系組織の活動は限定的	有り、ただし非政府系組織の活動は限定的	有り、ただし非政府系組織の活動は限定的
学校外の STEM 教育の事業者の有無	有り	有り	無し	無し	有り	一部有り
学校における高速インターネットへのアクセスの有無	高度	高度	無し	無し	無し	無し

※ [Asian Development Bank 2022: 5] Table 1: Comparison of STEM Education in the Four Developing Member Countries with Finland and Singapore を基に一部表記を変更して転載した。

ここからは、取り組みが先行するフィンランドやシンガポールにおいては、研究の蓄積や教員養成制度の拡充が進められており、教員養成機関、科学アカデミー、プログラムを提供する教育事業者などとの間での連携が大きく発展するとともに、学校教育現場においても高速インターネット回線の普及が浸透していることが判る。一方で、クルグズ共和国やウズベキスタンについては、これらの項目について依然として途上段階に留まっている。

⁽³⁾ 本表は STEAM 教育について述べたものではあるが、先述のように世界的に「STEM 教育から STEAM 教育へ」という転換の傾向が見られることから、STEAM 教育の動向を考慮する上で重要な資料であると判断し、本稿において引用した。

このことから示唆されるのは、ウズベキスタンの STEAM に関する事例を検討する際には、政策上の方針の検討に加えて、インフラ面での環境整備の状況について目配りをすることが欠かせないという点である。インフラ面が整っていない場合は、政策目標が明確であったとしても、実際には教育政策の実現に十分には結びつかない点に留意が必要である。

次に、各国における STEAM 教育政策の登場と人材養成の方向性について概略をまとめたものが下記の表 2 である。

表 2 各国における STEAM 教育政策の登場と人材養成の方向性の概略

	韓国	中国	欧州	日本
時期	2010年	2016年	2022年	2018年
関連する政策上の動き	「融合教育・人材育成」の教育政策の一環として STEAM 教育を導入	教育部が「教育情報化第13次5カ年計画(2016-2020)」を公表。国家全体として教育情報化を推進していく方針を提示	EU の教育・研修助成プログラム Erasmus+ が資金拠出して STE(A)M IT プロジェクトを実施	文科省が、技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材、新たなビジネスを創造する人材の育成方針において STEAM 教育について言及
目指す人材養成の方向性	理科学分野と芸術分野の融合教育の推進。科学技術の発展を主導する創意的で融合的な人材を育成	分野横断的な学習を推進。次世代 AI の開発を見据え、将来的な政策や市場での優位性の確保を目指す	STE(A)M 教育の充実のための環境整備と、関連する学位、キャリアへと学習者を促す	将来世界を牽引する研究者と、幅広い分野で新しい価値を提供できる数多くの人材を輩出する

※本表は下記の本文中で引用した資料を参照し、筆者が作成。

韓国では、先述の Yakman の理念に基づき、2010年に「融合教育・人材育成」の教育政策の一環として STEAM 教育が導入され、2011年には第二次科学技術人材育成支援基本計画の教育政策として STEAM 教育が盛り込まれた[安東・金 2014: 65]。科学技術への学生の興味、知識、技術を伸張し、優秀な人材を確保し、科学技術の発展を主導する創意的で融合的な人材を育成することが目標とされている。

中国では 2016年教育部公表の「教育情報化第 13 次 5 カ年計画 (2016-2020)」において、国家全体として教育情報化推進の方針が示され、「分野横断的な学習としての STEAM 教育」に関する言及が行われた[福田・楊 2021: 23; 林・史・森田 2021: 110]。2017年には中国教育科学研究院が「義務教育小学校科学課程標準」を改定し、国家単位で分野横断的な学習の推進に取り組んでいる[林・史・森田 2021: 110]。国策として次世代 AI の開発を見据えたプログラミング教育の普及が進められており、将来的な政策や市場での優位性を確保するための優先課題として位置づけられている[福田・楊 2021: 23]。

欧州では、2022年から EU の教育・研修助成プログラム Erasmus+ が資金拠出して STE(A)M IT というプロジェクトを実施しており[European Commission 7.11.2022; STE(A)M IT

project 18.02.2020]、STEMにArtsを加えることでより創造性が発揮されるとしている。STE(A)M ITは、初・中等学校教師が統合的な教育を行うための研修、教育ツール、ガイドラインを提供し、児童・生徒にコミュニケーション・批判的思考スキルを身につけさせ、STEM分野で学位とキャリア追求を促す取り組みとなっている。

日本では2018年に文科省が、Society 5.0を牽引する技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材と、それらの成果と社会課題を繋げ、新たなビジネスを創造する人材を育成する[文部科学省 2018: 6]として、高校段階でのSTEAM教育の導入方針を示した。また、思考の基盤となるSTEAM教育を全ての生徒が学び、より多くの優れたSTEAM人材の卵を産みだし、世界的な研究者の輩出と、幅広い分野で新しい価値を提供できる人材の輩出に繋げる[文部科学省 2018: 13]として、STEAM教育を通じた高度人材育成の方針を示している。

以上の各国の事例からは、まず2010年代が各国におけるSTEAM教育を巡る政策上の転換点であったことが判る。この点については2019年に実施を表明したウズベキスタンも、世界的な教育政策上のトレンドに歩調を合わせていたことが判る。またSTEAM教育導入の目的に若干の温度差がある点が窺える。端的に言えば国ごとに、文理融合型の教育の一層の充実を志向し学力・探究心の向上に力点を置く場合(学びの重視)と、グローバルな社会変動に対応し世界市場で活躍する人材の育成に力点を置く場合(市場の重視)がある。ウズベキスタンのSTEAM教育についての検討を行う際には、上記の観点から政策上の力点の所在に着目することが有効であると考えられる。

4. STEAM教育を扱った政策文書とその後の展開に関する検討

STEAM教育のグローバルな展開を念頭におきながら、ウズベキスタンにおける導入について、政策文書の記述と関連する教育政策の展開について見ていきたい。

一部留意すべき点として、現在までのところ政府発表のSTEAM教育の政策文書は、大枠の提示に留まっており、各学校教育段階や各教科の教科指導を通じた実践の詳細について述べた政策文書や教育スタンダードが見当たらない点が挙げられる。このため差し当たり本稿においては、公開済みの政策文書の分析を通じて大枠を明らかにしつつ、一部学校で先行実施されているSTEAM教育の内容を踏まえて、その特徴について検討を行いたい。

① 2019年2月 大統領学校設置に関する大統領決定

2019年2月に大統領学校(Prezident maktablari)の設立に関する大統領決定において、政策文書上最初のSTEAM教育に関する言及が行われた(O'zbekiston Respublikasi prezidentining

qarori, “prezident maktablarini tashkil etish chora-tadbirlari to‘g‘risida.” 2019)。

大統領学校とは、多額の国家予算の下で最先端の英才教育を行ういわゆるエリート学校のことである。才能ある生徒を選抜して教育し、総合的な発達を促しながら生徒たちの知的、科学的、創造性を引き出すこと、また科学、外国語、工学、情報技術の習得を促し、革新的な発想力の開発に必要な環境を整えることが目的であるとされる。

大統領決定においては設置目的、入学選抜、定員、カリキュラムの記述と併せて「STEAM教育に基づくプログラムを導入する」との言及が見られる。そして附則において、開学までの行動計画の記載があり、施設設置、カリキュラム編成等に関する準備期限と併せて「II 教育課程の組織化」の項で「STEAM教育のプログラム」については、2019年3-8月にかけて国民教育大臣 Sh. Shermatov 及び財務大臣 A. Haydarov の責任の下で準備を進める、とされている。

STEAM教育に関する言及は以上となっているが、この大統領決定を受けて実際にウズベキスタンの各地で大統領学校が開設された。大統領学校は初等教育4年生修了者が受験し、5年生から入学して11年生まで在学することが出来る。入学定員1学年24名(12名2クラス編成)と極めて少人数の難関校となっており、例えばタシケント市の大統領学校も2019年の設立時には12,000人が入学試験を受験したが、合格者は僅か144名であった[KUN. UZ 18.09.2019]。

難関を突破した最優秀の生徒に対して、大統領学校はSTEAM教育を正規教育プログラムとした教育活動を行っている。大統領学校のSTEAM教育を含む教育プログラムの計画、評価はケンブリッジ大学国際教育機構が行っており、2023年に大統領学校全14校が正式に認定校となった。これにより修了者に対しては国外の大学への進学が可能となるA-Level資格の取得が可能となり[O‘zbekiston Respublikasi ixtisoslashtirilgan ta’lim muassasalari agentligi 27.07.2022]、画期的な取り組みとして国内で広く報道された。タシケント市の大統領学校もまたSTEAM教育理論による教科書、教材を使用しながら英語でSTEAM教育を行っている⁽⁴⁾[KUN. UZ 18.09.2019]。生徒はそうした学修の修了に際しては、前述のA-levelの他、国際バカロレア、Advanced Placement (AP)、International Advanced Levels等の資格を取得し、卒業後国外の大学へ進学することも可能となっている[Gazeta.uz 21.02.2019]。

また大統領学校とは別に、2023年10月に「Barkamol avlod bolalar maktabi (完璧な世代の子

(4) 同校のSTEAM教育の授業内容や方法論に関する資料は入手できず詳細は不明となっているが、ケンブリッジ大学国際教育機構が正式な認定を行っていることから、同機構が有するSTEAM教育プログラムの知見に基づいて教育活動を行っていると考えられる。一方、ケンブリッジ大学から派遣された講師が、同機構のカリキュラムについて、ウズベキスタンの専門家に対して特別研修を行い、更に国内の他の学校へのSTEAM教育の普及を担うことを目的とした専門家のグループが設置された、との報道も見られる[KUN. UZ 18.09.2019]。

どもたちの学校)」と呼ばれる就学前・学校教育省管轄下の先験的な科学技術教育等を実施する学校のうち100校について、STEAM教育ラボを段階的に設置する方針が示された[Daryo 03.10.2023]。このように就学前から中等教育段階における STEAM 教育の導入については、予算や施設・機材の環境が整った学校から順次導入を進めている様子が窺われる⁽⁵⁾。

② 2019 年 10 月 2030 年までの高等教育発展計画に関する大統領令

前述の大統領決定の 8 か月後に発表されたのが、2019 年 10 月の高等教育発展計画に関する大統領令である (O‘zbekiston Respublikasi prezidentining farmoni, “O‘zbekiston Respublikasi oliy ta’lim tizimini 2030 yilgacha rivojlantirish konsepsiyasini tasdiqlash to‘g‘risida.” 2019)。同大統領令では、高等教育改革と人材育成機能の強化に関する計画や、2030 年までに高等教育就学率を 50% に引き上げる、といった具体的な数値目標が示された。

また冒頭で述べられているのは、「高等教育の国際競争力の強化」である。より具体的には、QS 世界大学ランキング、THE 世界大学ランキング、世界大学学術ランキング (ARWU) のいずれかにおいて少なくとも 10 機関がトップ 1,000 に入ること、また国の中心拠点大学であるウズベキスタン民族大学とサマルカンド国立大学が世界トップ 500 に入ることを目標に掲げている (本大統領令発表時の 2019 年時点ではウズベキスタンの高等教育機関はトップ 1,000 圏外)。

そしてそのための手段の一つとして、STEAM 教育に関する言及が行われている。「第 3 章 高等教育発展のための戦略的目標と優先事項」、「第 1 節 高等教育の対象の拡大と高等教育を通じた専門家育成の質の向上」の中で、資金投資計画や世界的な技術革新を踏まえて高等教育を受けた専門家育成プログラムの目標値を設定しつつ、教育と専門性を見直しを行う際には STEAM 分野の開発を特に考慮する、とされている。ただし、これ以外には同大統領令の中で STEAM 教育に関する言及は見られず、具体的にどのように高等教育の発展と STEAM 教育を接続していくのか、という点については不明点が残る。

これとは別に、個別の大学が STEAM 教育を取り入れている事例⁽⁶⁾や、個別の研究者の高等教育段階での STEAM 教育導入事例に関する研究論文は見られるが (例えばニュートンの法則に関する学修で STEAM 教育を取り入れた Xo‘djamberdiyev の実践 [2024] 等)、高等教育全体としての STEAM 教育の導入について具体的に述べた資料は見つかっていない。

⁽⁵⁾ ただし、このことはウズベキスタンにおける STEAM 教育が「エリート教育」に特化した取り組みであることを意味するものではないと考えられる。後述する 2030 年までの教育目標を定めた大統領令が、全国の全ての教育段階で STEAM 教育を導入することを目指すとしていることから、他国と同様、国民の間で広く STEAM 人材のすそ野を広げることを目的とし、教育環境を整備する資源さえ整えば全国的に展開することを目指している。

⁽⁶⁾ 例えば、Tashkent International University of Education は STEAM 教育に基づいた教育プログラムを提供していると同大学のホームページで紹介している (<https://tiue.uz/uz/talimni-boshqarish-2/> 閲覧日：2024 年 8 月 20 日)。

③ 2021年3月 2030年までのジェンダー平等達成のための戦略に関する上院決定

ウズベキスタンの特徴として、ジェンダー平等と女性の地位向上の手段の一部として STEAM 教育が位置付けられている点が挙げられる。2030年までのジェンダー平等達成のための戦略に関する上院決定 (O‘zbekiston Respublikasi oliy majlisi senatining qarori, “2030-yilga qadar O‘zbekiston Respublikasida gender tenglikka erishish strategiyasini tasdiqlash haqida.” 2021) においては、女性の地位向上、社会進出、男性とのジェンダー不均衡の是正のための各種の取り組みに関する言及が行われている。

また附則において、女性の地位向上、所有の拡大、雇用創出等に関する行動計画と目標に関する記述があり、「Ⅱ 我が国の社会経済、政治、法、文化および人道的発展における女性と男性の平等な権利と機会を確保することを目的とした取り組み」の第15項目として、国及び民間で STEAM 分野の女性の修士、博士課程における学修及び研究の支援という項目がある。ここでは2021年11月までにイノベーション・発展大臣 I. Abduraxmonov の責任の下で修士、博士課程の学修・研究支援を行い、2022年5月までに高等中等専門教育大臣 A. Toshqulov の責任の下で科学、イノベーション、情報技術の発展への女性の参画を推進し、2022年5月までにマハッラ・家庭支援大臣 R. Mamatov の責任の下で遠隔地の女性のための優先的な研修プログラムを確立し、才能ある女性の高等教育への進学を推進するとしている。

具体的な言及は以上となっているが、報道においても女性の一層の社会進出を推進する取り組みの一つとして、上記の上院決定に基づいた行動計画が紹介されており [KUN.UZ 08.04.2022; REVIEW.UZ 02.06.2021]、政府としても STEAM 教育関連の学位を持つ女性を増やすことで、女性の社会的地位の向上とジェンダーギャップの是正、そして経済とイノベーションの好循環に結び付けたいとの思惑が窺われる。

④ 2022年5月 2022-26年学校教育発展のための国家計画の承認に関する大統領令

2022年5月の大統領令においては、2022-26年の学校教育の発展に関する計画が発表された (O‘zbekiston Respublikasi prezidentining farmoni, “2022–2026 yillarda maktab ta’limini rivojlantirish bo‘yicha milliy dasturni tasdiqlash to‘g‘risida.” 2022)。この中では、外国で使用されている教科書の導入、教師の待遇改善、学校設備の更新、デジタル教材の導入への言及があり、更に附則の2030年までの公教育制度の発展目標の「Ⅰ 教育内容の実効性及び人材の質の向上」の第8項において、国民教育省の責任の下で、国家全体として STEAM 教育を実施出来る教師の育成を強化し、STEAM 教育研修を修了した教員数を2019年の0%から2023年に10%、2024年に15%、2025年20%、2030年までに50%にするとの目標を示している。同大統領令における STEAM 教育に関する言及はこの部分のみであり、STEAM 教育を行う教員の育成・研修の詳細については不明点が残る。また一部報道では、STEAM 教育に関す

る教員養成講座が開催されているとの情報も見られるが⁽⁷⁾、このような取り組みが全国単位でどの程度進展しているのか、という点についての正確な情報は得られていない。

5. 分析

以上より、ウズベキスタンにおける STEAM 教育は、その他の国と同様に国際競争力の向上、文理融合型の教育による人材の輩出、新たな経済発展等を目的としているが、一方で AI 時代への対応や、革新的技術の創出等は余り強調されていない。他国と比較して特徴的なのが、女性の社会進出、地位の向上と STEAM 教育を結び付けている点である。高等教育進学者の男女比は先述のように男性 49.21%、女性 50.76% (2023 年度) と同程度であり、むしろ女性の方がやや進学率が高いが、ウズベキスタン社会は男性優位の風潮が根強い。結婚、家事、育児等で社会進出に課題が残る女性たちについて、STEAM 教育を通じたキャリア形成及びスキルアップを支援するという点がユニークな取り組みであると考えられる。

STEAM 教育を実践できる教員の養成については、2030 年の 50% という数値目標に向けて準備が進められており、国外の教育機関、教育関連事業者との連携の下でカリキュラムの整備も進められている様子が窺える。実際の STEAM 教育活動は、大統領学校や特別に選定された学校を中心に先行的に導入されており、今後は教員養成と施設・機材の準備が進み次第、段階的に全国的な STEAM 教育の導入が行われることが予想される。

高等教育段階についても、国際的な高等教育の競争力強化を目的として STEAM 教育が導入されているが、実際の進展具合については、今回は十分に確認ができなかった。また高等教育における STEAM 教育の強化が、大統領令において目標設定された世界大学ランキングにおける上昇に直結するのか、という点についても疑問が残る。大学ランキングは、教育リソースや教育の充実度、教育の成果や国際性等の指標を基に作成されるため、少なくとも STEAM 教育の導入によって短期間で成果へと結びつけることは困難であると考えられる。

以上を踏まえると、女性の社会進出と地位の向上というユニークな取り組みが注目に値するが、近年急速に進む AI 等の技術革新や社会構造の変化を考慮すれば、STEAM 教育の普及状況は十分とは言えない。今後数年のうちに、AI 等の技術革新等が一層進み、現在想定されている STEAM 教育の概念でさえも新たな社会構造に十分に対応できなくなる可能性があるが、「2030 年までに STEAM 教育の教育資格を持つ教員を 50% に」という目標の達成時期はやや遅く、グローバルな社会構造の変化に十分に対応できない可能性がある。

(7) 例えば、2024 年 3 月 1 日にコーカンド大学の教員がフェルガナ州のウチコプリクで STEAM 教育に関する教員向けセミナーを開催し、約 30 名の学校長等が研修を受けたとの報道が見られる [Kokand University 04.03.2024]。

一方で前向きな判断材料としては、STEAM 教育は先行する諸外国の事例や教育プログラムのパッケージが利用可能であるという点が挙げられる。教材の言語の翻訳や、ウズベキスタンの教育カリキュラムとの整合性に関する問題は残るが、英語圏やロシア語圏の教材等については導入のためのハードルが低く、実際に STEAM 教育の蓄積を多く有する米マサチューセッツ工科大学と協働しながら STEAM 教育を実施している学校も存在する [白村・西山・木之下 2024: 40]⁽⁸⁾。また本稿では扱えなかったが、都市部を中心に STEAM 教育を掲げる民間の塾 (o‘quv markazi) が多数存在し、そうした塾では英語やロシア語の教材を用いて教育活動を行っている事例などが確認できる。こうしたことから、国外のリソースを有効活用することで、STEAM 教育の展開速度が促進される可能性がある。

また STEAM 教育を実施するために、身近な ICT 機器の活用が考えられる。ICT 機器は広く市民生活に浸透しており、特にスマートフォンについては国内の普及率が8割を超えている⁽⁹⁾。こうした ICT 端末に STEAM 教育に関連するアプリを導入することで STEAM 教育に基づいた学習をオンライン学習も含めて行うことも可能である。

また STEAM 教育の進展と関連して、政府が IT 分野への投資を促進していることと、2022年2月ロシアによるウクライナ侵攻をきっかけとして移転してきた企業、IT 技術者の存在が一定の役割を果たす可能性がある。例えばレロカント (релокант/relokant)⁽¹⁰⁾ と呼ばれる IT 専門家がウズベキスタンに拠点を移す動きが2022年以降に見られる。2022年にウズベキスタンに渡航したロシア人は、長期の移住、商用の訪問、観光客、トランジットを合わせて40万人 (正確な内訳は把握が困難) であるが、国家統計局によれば少なくとも2022年に約2,000人が永住権を得る目的で転入している [Ozodlik radiosi 17.08.2024]。

また政府による積極的な投資を受けて、情報技術省傘下の IT 関連特区であるタシケントの IT PARK 地区には、2022年から2024年初めまでにロシアから239社、ベラルーシから31

(8) マサチューセッツ工科大学が公開している STEAM 教育の教育パッケージについては、下記のサイトからも閲覧することが出来る。ここでは様々な STEAM 教育のリソースが無償で公開されている (<https://fullsteam.mit.edu/> 閲覧日: 2024年8月20日)。

(9) UNDP の報告書によれば、2022年時点でのウズベキスタン国内のスマートフォン所有率は女性87%、男性83%であり、インターネットの使用率は「毎日」が女性の83%、男性81%、所有する IT 機器については地域差が見られるが、パソコン所有率がタシケント市、シルダリヤ州、ホラズム州で39%、ナヴォイ州で40%、タブレット所有率がシルダリヤ州、ナマンガン州で33%、タシケント州で11%となっている [UNDP 2022: 6, 26, 38]。一方、ウズベキスタンの統計局によれば、教育機関におけるインターネット利用者の割合は、2024年1-6月の調査で12.3%であり (2021年は3.6%、2022年は5.5%、2023年は9%) [O‘zbekiston Respublikasi prezidenti huzuridagi statistika agentligi 2024]、インターネット接続の環境整備にはまだ課題が残る。

(10) レロカントとはプーチン大統領の2期目から増加したロシアから出国する移住者、またウクライナ侵攻以後にロシア国外へ移住した人々を指す新語である [松本 2024: 32]。英語の *relocate* が語源であり、一時的に別の場所に移転していたり、仕事の都合など何らかの理由で移動しているが、強制的に追放されたわけではない、というニュアンスを持ち「転居者」と邦訳される場合もある。

社が移転している〔日本貿易振興機構 22.03.2024〕。実際にレロカントとしてモスクワやサントペテルブルクから転居し、IT PARK で働く IT 専門家たちへのインタビューを報道から見る事が出来るが、彼らによればウズベキスタンで生活する上で、停電や銀行サービス、ドライバーのマナー等に課題を感じるものの、国を挙げた IT 業界への支援体制とその将来性に大きな可能性を感じている、としている〔Xabar.uz 25.11.2022; ITPARK 11.05.2023〕。

このように（不本意な形ではあるものの）移住してきた高度な IT 技術者と企業が STEAM 教育に対して影響を与えていく可能性がある。そうした因果関係を明確に述べた資料や統計は見つかっていないが、IT 人材の大量流入は、一過性のものではあったとしてもウズベキスタン全体の IT 分野の成長に一定の効果を与えると考えられる。

おわりに

社会構造の大規模かつ急激な変容への対応や、柔軟な発想に基づく新たな産業や雇用の創出に繋がる STEAM 教育の導入は、全世界規模の潮流となっている。2019 年段階でそうした STEAM 教育を国家教育政策に位置づけ、法制化を行った政府の対応は、グローバルな潮流に取り残されることなく、新たな国の経済基盤を構築しようとする意欲的な試みであったと言える。

他方で STEAM 教育の完全実施に向けた前途は未だ多難であり、政府が目標とする国際競争力の強化や経済・産業の強化に繋がるかどうかは、現状では見通せない。ただし、最後の分析で述べたように、今後 STEAM 教育の進展に向けた前向きな判断材料もある。こうした好条件も念頭に置きつつ、IT や AI 技術の急速な進展により年々社会構造が変化する中、政府が今後どのような教育政策の方針を打ち出すか、動向を見極めつつ引き続き検討が必要と考えられる。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP20H01646 基盤研究 (B)「ロシア型 STREAM 教育の構造と周辺諸国への波及に関する研究」(研究代表者: 澤野由紀子 (聖心女子大学)) の助成を受けたものである。

参考文献

日本語文献

- 安東恭一郎・金政孝 2014 「科学と芸術の融合による教育の可能性と課題——韓国 STEAM 教育の原理と実践場面の検討——」美術科教育学会編『美術教育学』35、61–77 頁。
- 川原田康文 2023 「小学校段階の STREAM 教育の導入と脱カリキュラム・オーバーロード」日本科学教育学会編『日本科学教育学会第 47 回年会論文集』、173–174 頁。
- 小金澤鋼一 2024 「ウズベキスタンにおける STEAM 教育支援」日本科学者会議編『日本の科学者』59 (5)、44–45 頁。
- 辻合華子・長谷川春生 2020 「STEAM 教育における“A”の概念について」日本科学教育学会編『科学教育研究』44 (2)、93–103 頁。
- 日本貿易振興機構 22.03.2024 「中央アジアからの IT サービス輸出が大幅増」URL: <https://www.jetro.go.jp/biznews/2024/03/e33806d2c26c145a.html> 閲覧日：2024 年 5 月 9 日。
- 白村直也・西山聖久・木之下健一 2024 「ウズベキスタンの学校教育が抱える問題——STEAM 教育の実施をめぐる——」岐阜大学教育推進・学生支援機構編『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』9、35–47 頁。
- 林晨洋・史珍妮・森田裕介 2021 「中国における STEM/STEAM 教育の研究動向」早稲田大学人間科学学術院編『人間科学研究』34 (2)、109–118 頁。
- 福田隆眞・楊世偉 2021 「中国における STEAM 教育の発展状況について」山口大学教育・学生支援機構編『大学教育』18、23–32 頁。
- 藤岡達也・胸組虎胤・熊野善介・大辻永 2022 「日本における STREAM 教育の背景と国際動向」藤岡達也編著『よくわかる STEAM 教育の基礎と実例』東京：講談社、3–52 頁。
- 松本かおり 2024 「レロカント——ウクライナ侵攻とプーチンの国から脱出する人々——」ユーラシア研究所編『ロシア・ユーラシアの社会』1071、31–55 頁。
- 胸組虎胤 2019 「STEM 教育と STEAM 教育——歴史、定義、学問分野統合——」鳴門教育大学編『鳴門教育大学研究紀要』34、58–72 頁。
- 文部科学省 2018 『Society 5.0 に向けた人材育成——社会が変わる、学びが変わる——』東京：文部科学省。
- ヤング吉原麻里子・木島里江 2019 『世界を変える STEAM 人材』東京：朝日新聞出版社。

英語文献

- Asian Development Bank. 2022. “*STEM and Education Technology in Bangladesh, Cambodia, the Kyrgyz Republic, and Uzbekistan: A Synthesis Report.*” URL: <https://www.adb.org/sites/default/files/publication/806356/stem-education-technology-synthesis-report.pdf> 閲覧日：2024 年 5 月

8日。

European Commission. 7.11.2022. “*STE(A)M IT: Europe’s First Integrated STEM Framework*.” URL: <https://school-education.ec.europa.eu/en/discover/publications/steam-it-framework> 閲覧日: 2024年8月16日。

Sousa, David Anthony and Pilecki, Thomas J. 2018. *From STEM to STEAM*, Second Edition. California: Corwin.

STE(A)M IT project. 18.02.2020. “*STE(A)M IT: An Interdisciplinary STEM Approach*.” URL: <https://steamit.eun.org/> 閲覧日: 2024年8月16日。

UNDP 2022. *Gender Digital Divide Assessment: Uzbekistan*. Tashkent: UNDP Uzbekistan. URL: https://www.undp.org/sites/g/files/zskgke326/files/2023-03/Final_Gender%20Digital%20Divide%20in%20Uzbekistan_d.pdf 閲覧日: 2024年8月16日。

Yakman, Georgette. 2006. *STEM Pedagogical Commons for Contextual Learning*. Virginia: Virginia Tech. URL: https://www.researchgate.net/publication/328006952_STEM_Pedagogical_Commons_for_Contextual_Learning_How_Fewer_Teaching_Divisions_Can_Provide_More_Relevant_Learning_Connections 閲覧日: 2024年5月9日。

———. 2008. *STEAM Education: An Overview of Creating a Model of Integrative Education*. Virginia: Virginia Polytechnic and State University. URL: https://www.researchgate.net/publication/327351326_STEAM_Education_an_overview_of_creating_a_model_of_integrative_education 閲覧日: 2024年5月9日。

ウズベク語文献

Anvarova Dilshoda and Bekpolatova Diyora. 2023. “Steam ta’lim texnologiyasi asosida maktabgacha yoshdagi bolalarga ta’lim-tarbiya berish imkoniyatlari.” *Raqamli texnologiyalar davrida tillarni intensiv o’qitishning psixologik-pedagogik jihatlarini respublika ilmiy-amaliy anjumani*. pp. 447–450. URL: <https://cyberleninka.ru/article/n/steam-ta-lim-texnologiyasi-asosida-maktabgacha-yoshdagi-bolalarga-ta-lim-tarbiya-berish-imkoniyatlari/viewer> 閲覧日: 2024年5月8日。

Daryo. 03.10.2023. “O’zbekistonda 100 ta “Barkamol avlod” maktabida STEAM-ta’lim laboratoriyasi tashkil etiladi.” URL: <https://daryo.uz/2023/10/03/ozbekistonda-100-ta-barkamol-avlod-maktabi-da-steam-talim-laboratoriyasi-tashkil-etiladi> 閲覧日: 2024年5月8日。

Gazeta.uz. 21.02.2019. “Shavkat Mirziyoyev prezident maktablarini tashkil etish to’g’risidagi hujjatni imzoladi.” URL: <https://www.gazeta.uz/oz/2019/02/21/prezident-maktabi/> 閲覧日: 2024年5月8日。

Hamroqulovna, Urunova Hulkan. 2023. “STEAM ta’lim tamoyillari va ularni maktablarda qo’llash.” *ЛУЧШИЕ ИНТЕЛЛЕКТУАЛЬНЫЕ ИССЛЕДОВАНИЯ*. 1(1). pp. 113–119. URL: <https://www.pedagoglar.uz/index.php/01/article/view/4521/2928> 閲覧日: 2024年8月16日。

ITPARK. 11.05.2023. “IT rivojlanayotgani va insonlarga ish o’rinlari mavjudligi xursand qiladi.” URL: <https://it-park.uz/uz/itpark/news/it-rivojlanayotgani-va-insonlarga-ish-o-rinlari-mavjudligi-xursand-qiladi-polina-rakova-o-zbekiston-haqida> 閲覧日: 2024年8月18日。

- Kokand University. 04.03.2024. “*Steam ta’lim texnologiyasi bo’yicha o’quv-amaliy seminar bo’lib o’tidi.*” URL: <https://www.kokanduni.uz/uz/p/news/a-study-practical-seminar-on-steam-education-technology-took-place> 閲覧日: 2024年8月4日。
- KUN. UZ. 18.9.2019. “*Prezident maktabiga media-tur: Bu maktab ta’lim sifatini oshirishda o’zi xos lokomotivga aylanadimi?*” URL: <https://kun.uz/06423720#!> 閲覧日: 2024年5月8日。
- . 31.1.2022. “*Xalq ta’limi vaziri ta’lim sifatini oshirishdagi ikki asosiy vazifa haqida yozdi.*” URL: <https://kun.uz/uz/news/2022/01/31/xalq-talimi-vaziri-talim-sifatini-oshirishdagi-ikki-asosiy-vazifa-haqida-yozdi> 閲覧日: 2024年5月8日。
- . 08.04.2022. “*«Olima ayollar jamiyati» nimalar bilan shug’ullanishi ma’lum bo’ldi.*” URL: <https://kun.uz/83120153?q=%2Fuz%2F83120153> 閲覧日: 2024年8月18日。
- Maktabgacha va maktab ta’limi vazirligi. 2024. “*O’zbekiston Respublikasida faoliyat ko’rsatayotgan umumiy o’rta ta’lim maktablari soni.*” URL: <https://uzedu.uz/uz/page/statistics> 閲覧日: 2024年5月8日。
- Oliy ta’lim, fan va innovatsiyalar vazirligi. 2024. “*Oliy ta’lim.*” URL: <https://stat.edu.uz/> 閲覧日: 2024年5月8日。
- Ozodlik radiosi. 17.08.2024. “*Cho’zilib ketgan qishlash. Rossiyalik “relokantlar” O’zbekistonda qanday yashamoqda?*” URL: <https://www.ozodlik.org/a/cho-zilib-ketgan-qishlash-rossiyalik-relokantlar-o-zbekistonda-qanday-yashamoqda/32668886.html> 閲覧日: 2024年8月18日。
- Qurbonova, Maxtuma Fazliddinovna. 2023. “*Steam ta’lim tizimining hozirgi kundagi o’rni. O’zbekistonda fanlararo innovatsiyalar va ilmiy tadqiqotlar jurnali* 19. pp. 1464–1471. URL: <https://bestpublication.org/index.php/ozf/article/download/6708/7033/6314> 閲覧日: 2024年5月8日。
- REVIEW.UZ. 02.06.2021. “*O’zbekistonda qancha xotin-qizlar ilmiy tadqiqot faoliyati bilan shug’ullanadi.*” URL: <https://review.uz/uz/post/skolko-jenshin-v-uzbekistane-zanimayutsya-nauchni-issledovaniyami> 閲覧日: 2024年8月18日。
- To’raqulov, Akbar Rustam o’g’li and Xudoyberdiyev, Sanjar. 2023. “*STEAM Ta’lim Tizimi Afzalliklari.*” *International Journal of Recently Scientific Researcher’s Theory*. 1(1), pp. 58–61. URL: <https://uzresearchers.com/index.php/ijrs/article/download/104/85/163> 閲覧日: 2024年8月16日。
- Xabar.uz. 25.11.2022. “*Rossiyalik relokant: «O’zbekiston bu idealga yaqin».*” URL: <https://www.xabar.uz/uz/tahlil/rossiyalik-relokant-ozbekiston-bu-idealga> 閲覧日: 2024年8月18日。
- Xo’djamberdiyev.M.S. 2024. “*Oliy ta’lim tabiiy aniq fanlar tizimida STEAM ta’lim texnologiyasi asosida kasbga yo’naltirishning pedagogik asoslari.*” *Zamonaviy dunyo ta’limi: yangi davr muammolari – yangi yechimlar*. 1(5), pp. 80–83. URL: <https://universaljurnal.uz/index.php/jurnal/article/view/649/597> 閲覧日: 2024年8月18日。
- O’zbekiston Respublikasi davlat statistika qo’mitasi. 2021. “*O’zbekiston Respublikasida o’rta-maxsus, professional ta’lim faoliyatining asosiy statistik ko’rsatkichlari.*” URL: https://stat.uz/images/makhsus-kasb-khunar-talim_uzbek-110822.pdf 閲覧日: 2024年5月8日。
- O’zbekiston Respublikasi ixtisoslashtirilgan ta’lim muassasalari agentligi. 27.07.2022. “*14 ta Prezident*

maktabining barchasi xalqaro Cambridge imtihonlarini o'tkazuvchi rasmiy markazga aylandi!" URL: <https://piima.uz/news/2022-yilning-6-oyi-yakunlari-bo-yicha-prezident-ta-lim-muassasalari-agentligi-tomonidan-amalga-oshirilgan-ishlar-yuzasidan-ma-lumotlar-berib-otamiz> 閲覧日: 2024年8月16日。

O'zbekiston Respublikasi oliy majlisi senatining qarori. 2021. *"2030-yilga qadar O'zbekiston Respublikasida gender tenglikka erishish strategiyasini tasdiqlash haqida."* URL: <https://lex.uz/uz/docs/-5466673> 閲覧日: 2024年8月18日。

O'zbekiston Respublikasi prezidenti huzuridagi statistika agentligi. 19.07.2024. *"Ta'lim muassasasida internetdan foydalanayotganlar ulushi oshgan."* URL: <https://stat.uz/uz/matbuot-markazi/qomita-yangiliklar/55229-ta-lim-muassasasida-internetdan-foydalanayotganlar-ulushi-oshgan> 閲覧日: 2024年8月16日。

O'zbekiston Respublikasi prezidentining farmoni. 2019a. *"O'zbekiston Respublikasi oliy ta'lim tizimini 2030 yilgacha rivojlantirish konsepsiyasini tasdiqlash to'g'risida."* URL: <https://lex.uz/docs/-4545884> 閲覧日: 2024年5月8日。

———. 2019b. *"Professional ta'lim tizimini yanada takomillashtirishga doir qo'shimcha chora-tadbirlar to'g'risida."* URL: <https://lex.uz/docs/-4500926> 閲覧日: 2024年5月8日。

———. 2022. *"2022–2026-Yillarda maktab ta'limini rivojlantirish bo'yicha milliy dasturni tasdiqlash to'g'risida."* URL: <https://lex.uz/ru/docs/-6008663> 閲覧日: 2024年5月8日。

O'zbekiston Respublikasi prezidentining qarori. 2019. *"Prezident maktablarini tashkil etish chora-tadbirlari to'g'risida."* URL: <https://lex.uz/acts/-4208152> 閲覧日: 2024年5月9日。

ロシア語文献

Государственный Комитет Республики Узбекистан По Статистике (UZSTAT). 2022. *Основные Статистические Показатели Деятельности По Высшему Образованию В Республике Узбекистан (за 2021/2022 учебный год)*. Tashkent: UZSTAT. URL: <https://stat.uz/images/001-olij-talim-ruscha.pdf> 閲覧日: 2024年5月9日。

中央アジア絨毯の博物館コレクションの 形成過程と呼称の変遷

—— 貿易品目からエスニシティ分類へ ——

志田 夏美

はじめに

19世紀末から20世紀にかけて徐々に定住生活様式を受容していった中央アジアの牧畜民の間には、定住生活への移行後もなお遊牧的な伝統が残っているといわれる。その代表例の1つに絨毯製品をあげることができる。それは遊牧民の伝統的な住まいを実用的かつ装飾的に構成する物質文化であった。この約1世紀の社会変動とともに、中央アジアの人々をとりまく生活も大きく様変わりしたが、絨毯製品はけっして過去の遺物ではなく、現代の彼らの生活にも欠くことのできない物質文化でありつづけている。

筆者は、かつての遊牧部族集団の末裔の間に残る絨毯作りという営みに着目することで、現代のウズベキスタンの住民の間に存在する遊牧的な文化や伝統に光をあてたいと考えている。そこで本稿では、これまで中央アジア絨毯がどのように研究されてきたのかを考察するために、標本資料の所在とその体系化の過程を明らかにし、各コレクションの分析を試みる。具体的には、現存する博物館コレクションの収集と体系化に貢献した2人の研究者に焦点をあて、その収集調査の目的や踏査地を明らかにする。さらに、中央アジア絨毯の流通網と呼称の対応関係から、それぞれの博物館コレクションの標本の生産地や作り手のエスニシティを推定する。

本稿では、次の3つを一次資料とする。うち2つは、帝政期に収集調査を実施した S. M. Dudin の著作で、「中央アジアの絨毯製品 (Kovrovye izdeliya Srednei Azii)」と題する論文 [Dudin 1928] と、『1900–1902年における中央アジア出張に関する S. M. Dudin の報告書 (Otchet S. M. Dudina o poezdakh v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg.)』 [Dudin 2021] である。後者は、ロシア人類学・民族学博物館 (Rossiiskii etnograficheskii muzei) 保管の手稿の報告書 (1903年提出) を同博物館の T. G. Emel'yanenko がテキスト補完および注釈を加筆し近年刊行した書籍である。残る1つは、ソ連期に数度の収集調査に従事した V. G. Moshkova の著作で、『19

世紀おわりから 20 世紀はじめの中央アジアの人々の絨毯 (Kovry narodov Srednei Azii kontsa XIX – nachala XX vv.)』と題する書籍 [Moshkova 1970] である。これは、博士論文の執筆途中に病没してしまった著者に代わって、その学術的草稿を保管していたウズベク・ソヴィエト社会主義共和国科学アカデミー歴史・考古学研究所 (Institut istorii i arkheologii AN UzSSR、以後「ソヴィエト社会主義」は省略して表記する) より刊行されたものである⁽¹⁾。

I. 中央アジア絨毯研究とロシア社会

まず、中央アジア絨毯とはどのようなものを指すのか。本稿で扱う用語の範囲を明らかにしておこう。中央アジアの遊牧民は、日常使いの敷物以外にも大小さまざまな用途の袋物や家畜用毛布、天幕の帯類など、身の回りの生活用品を絨毯製品によって賄ってきた。その製法には、大別すると、パイル(vorsovye)、平織り (gladkotkanye)⁽²⁾、刺繍 (vyshitye)、フェルト (koshma) があり、1つの製品に2つ以上の技法が用いられることも少なくなかった。原料には、主に羊毛が使用された。本稿における「絨毯 (kovry)」という用語は、その用途や形状、技法、素材の如何に関わらず、広い意味で用いられる。ただし、本稿の一次資料の原著者が区別して用いている場合はこの限りではない。手織り絨毯の主な生産地は、イラン、アナトリア(トルコ)、コーカサス、中央アジア、東トルキスタンである。中央アジアの地域概念と同様に、中央アジア絨毯の指す範囲も一律ではない。というのも、「中央アジア絨毯」という用語には、旧ソ連領中央アジア 5 か国で作られた製品以外に、アフガニスタン北部や東トルキスタンで作られた製品も含まれることがあるからである。本稿においては、資料の性質上、主に旧ソ連領中央アジア 5 か国産のものを対象とするが、時にその周辺地域の製品についても言及することがある。

次に、中央アジア絨毯研究の大まかな流れについてふれておこう。中央アジア絨毯はどのような社会背景のもとに研究対象となってきたのか。以下は、Moshkova による研究史の要約である。すなわち、中央アジア諸民族の絨毯織りに関する研究は 19 世紀半ばからはじまった。当初の資料としては、旅人や商人、中央アジアのロシア外交使節団の成員、軍事遠征の関係者の短い報告やメモがあった。その当時、絨毯を生産地域や芸術様式によって分類した目録がつくられたが、時に矛盾すら生じるほどの誤りがあった [Moshkova 1970: 12]。中央

(1) いずれの著作も原文はロシア語で、管見の限り、志田 [2022] と宗野 [2015] による Moshkova [1970] の抄訳以外に日本語訳は発表されていない。引用にあたっては筆者がロシア語から直接日本語に訳した。現地語の表記については、ロシア語使用者がキリル文字で表記したものを、筆者が『中央ユーラシアを知る事典』の「翻字・アルファベット表」[小松ほか編 2005: 592–593] に則ってラテン文字に転写し、さらにカタカナに置き換えた。そのため現地語の発音とは異なるものがある点を断っておく。

(2) 平織りは「パイルなしの絨毯 (besvorsovye kovry)」または現地語の「パラス(palas)」という用語でもしばしば表現される。これは、オリエント絨毯研究で一般的に用いられるトルコ語の「キリム(kilim)」に対応するものである。

アジア併合の後、帝政ロシアの研究者によって、この地域の民族の歴史や生業に関する研究がはじまった。専門調査の資料に基づく詳細な情報が印刷物として出版されるようになると、なかでも民族手工芸はロシア社会から高い注目を集めた。現地の地方行政とロシア中央当局は、ロシアの商業的・工業的資金力を示すために積極的に文献を出版し、様々な展覧会を催した。このような背景のもとに、19世紀おわりから民族手工芸と住民の生業（経済）の専門調査がはじまったのである [Moshkova 1970: 12–13]。ロシア 10 月革命を機に、民族手工芸の組織形態と調査の拠点にも変容が生じた。中央アジア諸国における民族政策の実施は、民族 (natsiya) 文化全般への特別な関心を引き起こし、すべての民族共和国において国立および公共組織による民族手工芸の研究がはじまった。ソヴィエト期の手工芸研究で着手された主要な課題は、生産の現代的状況を示すことにあった [Moshkova 1970: 14–15]。

以上から、少なくとも旧ソ連領中央アジア 5 か国産の絨毯を対象とする研究は、つまるところロシアと中央アジアの関係史のなかで進展してきたものであることがわかる。中央アジアがロシアに組み込まれはじめた帝政期の初期から中後期、ソ連期へと 3 つの時代的変遷とともに研究が本格化していった様子が窺える。次章以降では、中央アジア絨毯の呼称と分類法に着目しつつ、この 3 つの流れに沿うかたちで研究の変遷を追っていこう。

II. 絨毯貿易における識別

ソ連期の民族学者 Moshkova [1970: 13–14] は、最初期の分類に「誤り」がみられた要因について概ね次のように指摘する。すなわち、扱われた絨毯製品がすべて正確に検証された付帯情報 (pasport)⁽³⁾ を持っていたわけではなく、おおよその類型の特徴によって特定されることが多かったからである。当時の研究者たちは直接、絨毯が生産されている場所へは行かず、転売業者や商人、その他「絨毯専門家 (kovrovye spetsialisty)」の手に渡った絨毯資料を使わざるを得なかったのだ。

要するに、商人などから二次的に取得した標本資料の情報は、実際の生産地や作り手の情報を反映するものではなく、そのせいで当時の分類には「誤り」が生じたと Moshkova は認識していた。それでは、その二次的な情報とは一体どのようなものだったのか。

Moshkova [1970: 23] によると、ロシアに比べてオリエント絨毯研究がすすんでいた西ヨーロッパの学者たちの間では 19 世紀末まで、中央アジア産の絨毯はすべて「中央アジア遊牧民の絨毯」と呼ばれ「小アジア群」に属していた。そのような状況下で、絨毯貿易の発展により「貿易 (torgovaya)」分類が明確化した。ただし、この分類は当事者間で取り決められたもので、

(3) 原語の pasport は、標本資料ごとに生産者や生産地等の情報を記録した資料カードのようなものを指すと思われる。博物館学においては、そのような標本とともに登録された情報を「付帯情報」とよぶため、本稿ではやや意識的にこの語を用いる。

ロシアの絨毯市場とヨーロッパの貿易慣行により、中央アジア絨毯は「ブハラ(bukharskie)」、「テキン(tekinskie)」、「カシュガル(kashgarskie)」の3つのグループに分けられていた。これらの呼称の原則に関して、Dudin [1928: 90-91] は次のような見解を述べている。

カスピ海からコーカサスを経由するペルシア絨毯と区別して、オレンブルグを経由してロシアに流通する中央アジア絨毯をすべて「ブハラ」と呼んだ。……中略……トルクメン絨毯の特徴が研究され、その品質が知れわたると一般的なグループと区別されるようになった。

つまり、オレンブルグ経由の絨毯は、生産者の別にかかわらず「ブハラ」という貿易品目でロシアに流通し、そのうち品質的に優れたもののみがトルクメン絨毯と認識されるようになったようである。

では、そもそもなぜ「ブハラ」という呼称になったのか。Moshkova [1970: 47-48] によれば、それは絨毯貿易におけるウズベキスタンの都市の重要性と関係している。

〔牧畜民家庭の〕地元の小規模な絨毯生産では、おびただしい数の都市部や農村部の住民の絨毯製品の需要を満たすことはできず、それゆえにウズベキスタンは常に輸入絨毯の大消費国であった。ウズベキスタンの領土は、中心部に位置し、主要な貿易ルートが横断しているおかげで、トルクメニアや東トルキスタン、アフガニスタン北部で生産された様々な絨毯製品が輸入されていた。このため、ウズベキスタンのいくつかの都市(旧トルキスタン地方の都市) コーカンド、アンディジャン、サマルカンド、そして旧ブハラ・ハン国の (byvsh. Bukharskogo khanstva) 首都ブハラは、20世紀初頭には、地元商人やロシア商人が外国商社と取引を行う中央アジア絨毯貿易の主要拠点となっていた。

つまり、貿易分類における「ブハラ」という呼称は、絨毯バザールが位置する都市名ないしブハラ・アミール国(上掲引用文中の「ブハラ・ハン国」)の名に由来すると解釈できる。後述するが、「ブハラ」絨毯にはブハラ・アミール国領域内で作られた製品を多く含んでいたため、国名に由来すると解しても誤りではないが、他の貿易品目の適用法則に鑑みると都市名に由来すると考えるのが妥当である。この見解は、Moshkova [1970: 23-24] も示唆しているところである。

貿易の拡大とともに「サマルカンド(samarkandskie)」や「アンディジャン(andizhanskies)」といった新しい製品群が登場し、区別されるようになった。これらの製品群の割り当ては、「ブハラ」と同じく、当事者間で取り決められたもので、絨毯の産地や種類ではなく販売場所による定義に基づいていた。

また、同じく Moshkova [1970: 23] によれば、19世紀から20世紀初頭にはすでにブハラとその近郊では絨毯製品は生産されていなかった。したがって、「ブハラ」絨毯を都市ブハラ産の製品と解するのは誤りである。

では、「カシュガル」の場合はどうだろうか。東トルキスタンでの調査旅行中に観察した製品について、Dudin [2021: 116] は次のように述べている。

ロシア国境へ大量に輸出されているのは、毛織物のパラス、フェルト、絨毯である。これらの製品は、カシュガルで生産されるのではなく、ホータン(Khotane)やアクス(Aksu)から運ばれてくる。

ここでもカシュガルは生産地ではなく、あくまで各地方の絨毯製品の集積地であることが示唆されている。つまり、貿易分類における「カシュガル」という呼称は、商人が取引を行う絨毯バザールが位置する都市名に由来すると考えていいだろう。

一方、「テキン」という貿易品目だけは地名ではない。これはトルクメンの部族の名に由来するもので、総称的にトルクメン絨毯を指したようである⁽⁴⁾。ただし、この貿易品目の「テキン」が指す範囲は、現在知られているところのトルクメン諸部族をすべてカバーしたわけではなく、品質やデザインによっては含まれないものもあったようだ。これに関しては、以下の Dudin [1928: 91] の記述が参考になる。

トルクメン部族のキジラヤク(kizilayakskii)とバシル(bashirskii)の絨毯が「ブハラ」と呼ばれたのは、品質的にトルクメンのものよりもウズベクのものに近いからである。キジラヤクとバシルの絨毯がロシアの市場に出回るようになったのは、昔も今もブハラ経由であり、トルクメン絨毯の多くはブハラを迂回するため、私の誤解でなければ、これらの絨毯がロシアに出回るようになったのはかなり後のことである。ヨムド(iomud)やオグルジャリン(ogurdzhalin)から先に入ってきた絨毯は、その〔芸術様式的〕特殊性から、しばしば商人によってコーカサス絨毯と分類されていた。

ここに述べられているように、キジラヤクとバシルの絨毯がブハラを経由して輸出されていた事実は、ともすればブハラを経由するか否かがトルクメン諸部族の製品の扱いのちがいを生んでいるようにも読める。しかし、Dudin [1928: 91] によれば、ブハラやサマルカンドの地元の目利きや商人の間でも、キジラヤクとバシルの絨毯はウズベク絨毯とみなされていたという。したがって、すでに Dudin が述べているように、流通経路の他に品質やデザインに

⁽⁴⁾ なぜ他の部族名ではなくテキンであったのかについては筆者が用いた文献からは明らかでない。これに関しては、稿を改めて考察したい。

よる識別もまた同時に存在していたと捉えるべきだろう。

以上の内容をまとめると次のようなことが言える。貿易分類の呼称は、地名と部族名のどちらかに由来した。後者にあたるのはトルクメン諸部族の絨毯を指す「テキン」で、これは品質を基準とする分類であった。そのため、一部のトルクメン諸部族の製品はこれに含まれなかった。その他の貿易品目名は、ロシア商人が取引を行う貿易拠点すなわち絨毯バザールの位置する都市名に由来するものだった。

Ⅲ. 標本収集活動の目的と踏査地

以上のような輸出品からの不確かな情報は、当該分野の研究者たちの間に混乱を招いた。そうした状況下で、中央アジア絨毯を科学的に分類し直すことが試みられるようになる。

科学的分類の考案には、中央アジアの民族や部族集団に関する研究とも深く結びついていた。以下は、そのことを示す Moshkova [1970: 23] の要約である。すなわち、絨毯作りを生産地で直接調査した研究者たちは皆、中央アジアの人々の製品の技術や装飾が狭い部族的性格を有すると指摘している。科学者たちは、作品の芸術的外観の特徴により、作り手の民族的または部族的所属を決め、その出自に基づいて中央アジア絨毯を分類することを提唱した。このような特徴による分類は、古い絨毯標本の付帯情報がないこと、いくつかの地域では絨毯作りが衰退あるいは全面的に終了しているせいでその補填が不可能なこと、絨毯を作っている中央アジアの人々の個々の民族や部族集団に関する研究がほとんど行われていないことなど、入手可能なデータが不十分なためにかかなりの困難を伴っていた。絨毯を科学的に分類することが可能になったのは 20 世紀初頭のことで、その独自の芸術的伝統の担い手である作り手の出自から、個々の絨毯群の典型的な特性を導き出せるようになった。

なかでも後述する帝政期のロシア人民族学者 Dudin の現地調査と標本収集は、比較的正確な情報をロシア社会にもたらし、科学的分類の礎を築くことになった。彼が収集した博物館標本をもとに絨毯に描かれるデザインの抽出と類型化がすすむようになり、最終的にソ連期の民族学者 Moshkova が自身の現地調査の成果をふまえて中央アジア絨毯の作り手についてエスニシティ別に体系化していくこととなる。それでは、その科学的分類に寄与することになった現地調査とはどのようなものだったのか。収集の目的や対象、踏査地について具体的にみてみよう。

1. 帝政期

S. M. Dudin (1863–1929) は、ウクライナ生まれのロシア人民族学者である [Prishshepova 2011: 611]。報告書の序文を書いた Emel'yanenko [2021: 13–14] によれば、彼は 1900–02 年の

出張の前にすでに中央アジアでの現地調査を経験していた⁽⁵⁾。彼にとって最初の民族学的経験は1891年、V. V. Radlov (1837–1918) 率いるオルホン溪谷へのモンゴル探検隊の一員としてであった。続いて1893年に V. V. Bartol'd (1869–1930) の中央アジア旅行に同行し、1895–99年には N. I. Veselovskii (1848–1918) 率いるトルキスタンの古代遺跡を調査する歴史・建築探検隊に写真家として参加していた。

1900–02年の調査旅行は、当時ロシア帝国の首都サンクトペテルブルクに建設された新しい民族学博物館の最初の調査であると同時に、ロシアで初めての目的をもった民族学的調査でもあった。皇帝アレクサンドル3世ロシア博物館 (Russkii muzei imperatora Aleksandra III) の民族学部門⁽⁶⁾は、P. P. Semenov (1827–1914) や Bartol'd などの著名な歴史学者や考古学者、東洋学者、民族学者によって設立されたものであり、彼らは、伝統的な文化の現物資料を収集・保存することで、ロシア帝国の各民族の「民族の肖像 (etnicheskii portret)」を作成することを任務としていた。そのため、民族学的調査の際には現地の人々から資料を収集し、最も完全で信頼できる情報を得ることが優先された。中央アジアが博物館探検プログラムの最初に取り上げられたのは偶然ではなく、ごく最近になってロシアに編入された住民の文化を知ること、政策上の国家的要求と中央アジア地域の民族学部門の仕事を監督するロシア東洋学の学術的利益の両方を満たすものであった。館長 Radlov の発案で、専門の「収集者 (kollektor)」⁽⁷⁾を派遣することが決まり、その最初の人物に Dudin が選ばれた [Emel'yanenko 2021: 13]。

報告書の内容から、1900–02年の中央アジア出張は3回にわたって実施されたことがわかる。その経緯は次のようだった。1回目の出張は、ロシア・トルキスタンの「サルト (sart)」⁽⁸⁾の民族誌学的コレクションの収集を目的に実施されたものだった。彼は、1900年の冬にサ

(5) ここで紹介している調査以外にも、Dudin は主に写真家として数々の遠征調査に参加している。詳しくは、Prishshepova [2011] を参照のこと。

(6) 現在のロシア人類学・民族学博物館の前身にあたる。

(7) Emel'yanenko [Dudin 2021: 36 (注5)] によれば、当時の博物館において「収集者」とは、遠征業務を含めて博物館の展示品一式を入手する任務を担う職員のことであった。

(8) Emel'yanenko [2021: 16–17] によると、報告書において Dudin は、当時採用されていた用語に従って、中央アジアのマールワラーアンナフルの定住民を「サルト」と呼んでいる。この用語の起源と使用についてはいまだ明確な見解はないが、中世初期には、遊牧民は民族や言語のちがいに関係なくオアシスの住民をサルトと呼んでいたと考えられている。彼は、Bartol'd や他の学者の立場を踏襲して、現代の民族学で「定住ウズベク (osedlye uzbeki)」と「平地タジク (ravninnnye tadzhiki)」と呼んでいる文化的伝統の近い両言語集団に対してサルトの語を用いている。さらに報告書では、東トルキスタン・カシュガルのオアシスの都市民のことをサルトあるいは「カシュガルリク (kashgarlyki)」と呼んでいる (地元住民の間で使われてきた「ウイグル (uigury)」という用語は避けている)。つまり、Dudin の記述におけるサルトという用語は、異なる起源を持つ人々に適用され、エスニシティの枠を超えた呼称として登場している。一方、報告書における「ウズベク」という用語は、15世紀から16世紀にかけてキプチャク草原からマールワラーアンナフルにやってきたテュルク系諸部族の末裔に属し、20世紀初頭になってもなお遊牧や半遊牧の生活様式を維持している集団のみに用いている。また「タジク」という用語は、かつてブハラ・アミール国でブハラ高原と呼ばれた、現代のタジキスタンの山岳地帯の住民、すなわち「山岳タジク (gornyi tadzhiki)」にのみ用いている。

シクトペテルブルグを出発し、サマルカンドのバザールからそう遠くない土着の町に定住し、バザールの商人や工房の職人、ガラクタ商などから目当てのものを手に入れていった。他に、ブハラ、タシュケント、ホジェント (Khodzhent)、コーカンド、マルゲラン (Margelan)、ウルグト (Urgut)、そして上記都市間にある農村 (kishlak) を訪問し、入手できる資料の量に応じて各都市に5日から1か月滞在し、全部で約7か月間を過ごした [Dudin 2021: 32–35, 38–39; Emel'yanenko 2021: 18]。出張から戻ると、ロシア博物館の支配人 V. G. Mikhairovich 大公 (1863–1919) の命で収集品の展覧会を手配することになり、これが成功すると、今度は旅程に1～2ヵ国を加えることを条件に再び中央アジアに派遣されることが決まった。提出した旅程は、サマルカンドからアウリエ・アタ (Aulie-Ata)、ピシュペク (Pishpek)、トクマク (Tokmak)、イッスイク・クリ (Issyk-Kul)、カシュガルアルパ (Arpa) 渓谷を経由してタシュケントへ、カシュガルからイルケシュタム (Irkeshtam) を経由してアライの (Alaiskii) 渓谷へ、ブハラ・アミール国のブハラ高原 (Nagornaya Bukhara) の諸都市を経由してブハラとサマルカンドへ至るルートだった [Dudin 2021: 40]。しかし、2回目の出張では、現地にて旅程の変更が生じたため実際たどった経路はこれとは異なり、トルクメニア、ブハラ高原、東トルキスタン、アライ渓谷にて、トルクメンやサルト、山岳タジク、ウズベク、クルグズ (kara kirgizy) の標本収集が行われ、全部で約6か月間、現地に滞在した [Dudin 2021: 41–48, 99, 121, 123–125, 486–488; Emel'yanenko 2021: 18–19]。3回目の出張は、これまでの遠征の収集の漏れを補完することを目的に計画された。未踏査だったシルダリヤ付近でのカザフ (kirgizy) やクルグズの標本収集が優先され、さらにフェルガナ盆地やゼラフシャン盆地でもサルトやウズベクなどの標本収集が行われた [Dudin 2021: 532–550; Emel'yanenko 2021: 19–20]。

3回の調査旅行で収集した標本の総数は4875点にのぼった [Dudin 2021: 554–555]。彼はそれらをエスニシティおよび地域別に一覧化しており、その内容を表1にまとめた。エスニシティ別の内訳は明らかでないが、標本の種類としては、家具や台所用品、衣服、宝飾品、武器、馬具、楽器、玩具、喫煙具の他に、陶器や木彫り、皮革、テキスタイル (綿織物、絹織物、絨毯、フェルト、刺繍)、農耕、牧畜、仕立て屋、漁業、狩猟などの生業の道具や工芸品、その原料などが含まれる [Dudin 2021: 33–34]。Dudin は、新しいものよりも古いものの方が芸術的価値を有し、民族工芸の伝統をより忠実に反映していると考え、出張中に作られたものではなく可能な限り古いものを手に入れようとした [Emel'yanenko 2021: 24]。文献からは絨毯製品の具体的な点数は明らかでないが、遊牧民のもとではとりわけ絨毯製品が収集された。たとえば、トルクメンのもとでの収集に関して Dudin [2021: 45–46] は次のように記している。

表 1 S. M. Dudin の中央アジア出張の収集資料

所蔵機関	エスニシティ (地域)	標本点数
(現) ロシア人類学・民族学博物館	トルクメン	361
	サルト(カシュガル)	204
	サルト(サマルカンド)	1268
	サルト(ブハラ)	828
	サルト(フェルガナとシルダリヤ)	651
	山岳タジク(ブハラ高原)	86
	クルグズ(アライ、カシュガリヤ、シルダリヤ)	179
	ウズベク(サマルカンド、ブハラ)	148
	カザフ(サマルカンド州、シルダリヤ州)	104
	アフガン(サマルカンド)	79
	ペルシア/他の絨毯	18

Dudin [2021: 554-555] をもとに筆者作成

テキンやサルイクの物質的生活の品々の中で私が最も注目したのは、絨毯、刺繍、銀の宝飾品であった。……中略……買い付けは〔可動式住居〕ユルタでも行われ、そのために私はいくつもの牧村 (aul) に行き、すべてのユルタを訪ね歩き、(アシユハバードやメルヴの) バザールや絨毯の売買を行う専門店にも足を運んだ。当然、時間も場所も余裕のあるバザールや商店の方が豊富な収穫を与えてくれたことは理解に容易い。けれども、ユルタでの買い付けは、私にとってもっと重要な目的があった。絨毯の特徴やその装飾について、この分野の商人や地元の「専門家」がつけるその名称が同じように呼ばれているのか、その場で確認しておきたかったのだ。このような観点から、絨毯加工業に携わる何らかの指揮者のもと幾人もの織り手がいるような大きな工房には興味がなかったのは言うまでもない。というのも、そこではその土地の様式が失われて久しく、訪ねても混乱を招くだけだからだ。私は、絨毯作りが副業ですらなく、ただ家庭の需要を満たすためだけに、織機がたまにしか動かないような牧村に行くことを好んだ。……中略……私は、小さなサイズの絨毯だけを好んで買ったが、それは安いからでもあるし、展示した時に場所を取らないからでもある。大きな絨毯で重要性を感じた時は、値段が比較的安価な場合のみ、そのような標本を買ってもいいことにした。

ここでもふれられているように、遊牧民から直接入手する以外にも都市部のバザールから購入されることもあった。Dudin [2021: 37] によれば、その経緯は次のようなものだった。

買い付けをしていると、サルト製ではないものの、彼らが日常的に使っているものに度々出くわした。そのような物としては、ロシア製の他に、ペルシア製やアフガン製、インド製、トルクメン製、ウズベク製、カザフ製のものもあった。それらはほとんどすべて、

今も昔も生活に欠かせないものであり、自ら作ったものでもあった。私は、当初、ただ私の収集品によって描きだすサルトの物質文化に必要な構成要素として、これらの物を購入したが、その後、他民族の製品の多くは、いわばサルトの生産物の見本であるという、彼らの新たな一面が明らかになってきたので、それらも含めることにした。こういったわけで、ペルシアやアフガンの銅食器、トルクメンのテキンやウズベクの絨毯などが買われたのだ。

このように Dudin の収集品は、定住民と遊牧民の市場を介した文化的交流を体現するものでもあった。以上から、表1のトルクメン、ウズベク、カラカルパク、クルグズ、カザフの項目に示されている標本点数のうち、少なくない割合を絨毯製品が占めていると考えられる。

2. ソ連期

V. G. Moshkova (1902–1952) は、フェルガナ生まれのロシア人民族学者である。著書の序文を書いた Morozova [1970: 5] によれば、彼女は 1925 年に中央アジア (国立) 大学東洋学部を卒業後、一時的に民族手工芸の調査を行う手工芸組合で働き、そこで絨毯織りに魅せられたことをきっかけに中央アジア絨毯の研究に着手しはじめた。

Moshkova が従事した現地調査は全部で 6 つある。その目的や調査地は次の通りである。絨毯製品を対象とした最初の専門調査は、1929–30 年に、中央アジア (国立) 大学東洋学部 (vostfak SAGU) と中央アジア経済評議会 (Sredazekonomsovet) の「東方女性の労働および生活向上委員会 (Komissiya po uluchsheniyu truda i byta zhenshshin Vostoka (KUBT))」によって組織された。M. F. Gavrilov を責任者として、Morozova と Moshkova の他に画家 1 名が参加した。調査の目的は、中央アジアの手織り絨毯産業の範囲に関する資料を収集し、絨毯作りの技術や道具、モチーフの用語等について作り手から聞き取ることにあった。訪問先は、クルグズ共和国南部地域のオシュ・ジャララバード (Osh-Dzhalalabad) およびウズベク共和国のアンディジャン州ジャラルクドゥク (Dzhalalkudukskii) 地区とアラヴァンブリン (Aravanburinskii) 地区、サマルカンド州ザアミン (Zaaminskii) 地区とジザク (Dzhizakskii) 地区、カシュカダリヤ州カマシ (Kamashi) とジェナウ (Dzhenau)、トルクメニアのアムダリヤ地域のケルキ (Kerki) からチャルジョウ (Chardzhou) まで、中南部地域のメルヴ、パイラム・アリ (Bairam-Ali)、タフタ・バザル、サラフス (Sarakhsh)、テジェン (Tedzhen)、アシュハバード、バハルデン (Bakharden)、ギョク・テパ (Geok-tepa) であった [Moshkova 1970: 15]。

1935 年には、トルクメン共和国絨毯財団 (Kovrovyy fond TurkmSSR) および絨毯連盟 (Kovrovyy Soyuz TurkmSSR) によって、トルクメン諸部族を対象とした調査が行われた。2 つの調査隊が編まれ、Moshkova が隊長を務める第 1 次調査隊 (計 3 名) は、アムダリヤ中下流域左岸に

暮らすサロル(salor)やヨムド、その他のトルクメン部族の絨毯を収集するために、サヤト(Sayat)、デйнаウ(Deinau)、ダルガン・アタ(Dargan-ata)、タフタ(Takhta)、イリヤルイ(Il'yaly)、クンヤ・ウルゲンチ(Kunya-Urgench)、タシャウズ(Tashauz)の村や町にて調査を実施した。第1次調査隊にも参加していた V. L. Miram が隊長を務める第2次調査隊(計3名)は、カスピ海沿岸地域に暮らすヨムドに関する資料を収集するために、タルタ(Tarta)、アク・クユ(Ak-Kuyu)、シャトルイク(Shatlyk)、チェレケン(Cheleken)、ダリハ(Dal'kha)、オグルチンスク(Ogurchinsk)、シイフのグバ(Shiikhskaya guba)、ジェベル(Dzhebel)、ガッサン・クリ(Gassan-Kuli)にて調査を実施した[Moshkova 1970: 15–16]。

1940年にも同組織によって調査が行われた。構成員は、隊長の Moshkova の他に学術協力者と画家が1名ずつであった。調査の目的は、ヨムドやチョウドル(choudor)の絨毯の収集で、対象地域はタシャウズ州であった[Moshkova 1970: 16]。

1942年のカラ・カル(Kara-Kal)への遠征旅行では、トルクメン部族のゴクレン(goklen)のもとを訪ねたが「ここですすでに[パイル]絨毯織りは途絶えていて、パラス製品が小規模に作られているのみであった」という記述以外に情報が無い[Moshkova 1970: 16]。

1944–46年には、ウズベク共和国科学アカデミー歴史・考古学研究所によって学術探検隊が組織され、サマルカンド州ヌラタ山間部にて絨毯作りを行うウズベクとウズベク・トゥルクマン部族(uzbeki plemeni turkman)の調査が行われた。ミタン(Mitanskii)、ヌラタ(Nuratinskii)、コシュラバード(Koshrabadskii)の地区にて前者の製品が調査され、ザルバンド(Zarband)、アク・テパ(Ak-tepa)、カラ・クドゥク(Kara-Kuduk)、サマリ(Samari)、プチャト(Pchat)、アルトイ・ベク(Alty-bek)、ボルガルイ(Bolgaly)の村々にて後者の製品の調査が行われた[Moshkova 1970: 16]。

1950–51年にも同研究所によって民族学遠征隊が組織された⁽⁹⁾。ウズベキスタンのナマンガ州パプ(Papskii)地区ハナバード(Khanabad)近郊の村々にて、キプチャク(kipchak)の絨毯生産に関する資料が収集された[Moshkova 1970: 16]。

以上の遠征調査で収集した標本資料は、基本的に派遣主体の機関が収蔵することになった。トルクメニスタンの領域で収集された資料は、トルクメン共和国の絨毯財団⁽¹⁰⁾と美術館(Muzei iskusstv Turkmenskoi SSR)に、ウズベキスタンの領域で収集された資料は、ウズベク

⁽⁹⁾ この遠征には Moshkova は従事していない可能性が高い。というのも、Morozova [1970: 5]も英訳者の O'Bannon 他 [1996: vii] も、彼女が「1929–46年に6つの専門調査を行った」と記しており、さらに彼女の没年は1952年だからである。しかし、そうすると従事した調査の数が合わないことになる。

⁽¹⁰⁾ Moshkova [1970: 16]によれば、財団の度々の改組や1948年のアシュハバード大地震のために大部分の標本は散失してしまった。また、O'Bannon 他 [1996: xi]によると、1995年に美術館と絨毯財団からトルクメニスタン国立絨毯博物館が設立されたらしい。したがって、表2に示したトルクメン共和国の標本のうち現存するものは、当該博物館が所蔵していると思われる。

表2 中央アジア諸国の所蔵先と収集時期の対応

所蔵機関	収集時期
トルクメン共和国絨毯財団	1929-30年 (20世紀半ば時点で散失)
トルクメン共和国美術館	1930年 1935年
ウズベク共和国美術館	1929年
ウズベキスタン民族歴史博物館	1929年 1929-30年 (トルクメン複製標本) 1928年ほか (歴史博物館専門調査隊による収集標本)
ウズベク歴史文化博物館	詳細不明
各共和国の郷土研究博物館	詳細不明

筆者作成

共和国の美術館 (Muzei iskusstv Uzbekskoi SSR) とウズベキスタン民族歴史博物館 (Muzei istorii narodov Uzbekistana)⁽¹¹⁾、在サマルカンド・ウズベク歴史文化博物館 (Muzei istorii kul'tury uzbekskogo) に収蔵された [Moshkova 1970: 16]。表2は、標本の収蔵機関と収集時期の対応を示したものである。それぞれの収集点数は不明だが、絨毯財団が収蔵していた500点ほどの標本資料を「大コレクション」と表現しているため、各調査隊の収集数はこれより少ないと考えられる。

収集品選びの基準については明らかでないが、O'Bannon 他による英訳本 [Moshkova 1996] には彼女が収集した標本の一部がカラー図版で掲載されている。それらをみる限り、ほとんどの標本は19世紀前半から20世紀初頭にかけて製作されたものであることがわかる。

また、Morozova [1970: 5] によれば、標本は資料集とともに保管されており、標本ごとに、生産地、作者の民族 (natsional'nosti) および部族的 (premennoi) 帰属、原料や技法、配色、デザイン、パターンに関する情報の記述、ならびに装飾モチーフの呼称に関する表記や絨毯デザインのスケッチや写真が付されているそうである。

Ⅳ. 流通網と生産地および作り手のエスニシティの対応関係

先述のように、中央アジア絨毯は「テキン」、「ブハラ」、「カシュガル」などの貿易品目で識別されていたが、この呼称は実際の生産地や作り手のエスニシティを反映したものではな

(11) 現在のウズベキスタン国立歴史博物館を指す。Moshkova [1970: 16] によれば、当該博物館には、1929-30年にウズベキスタンの領域内で収集した資料以外に、トルクメン共和国絨毯財団のコレクションの複製標本や歴史博物館の専門調査隊によってその他の時期に収集された標本も含まれる。後者には、たとえば Sh. I. Inogamov および M. A. Bikzhanova によるカシュカダリヤ州の半遊牧ウズベクを対象とした1928年の遠征、S. P. Rusyaikina によるスルハンダリヤ州のラカイ族を対象とした遠征、T. Mirgiyazov によるシルダリヤ地方に暮らすカザフを対象とした遠征などで収集されたものがある。



図 1 絨毯の作り手と流通網

帝国書院白地図中央アジア・西アジアの一部を使用して筆者作成

かった。20世紀初頭、Dudin はロシア博物館の収集者として「現地の人々から資料を収集し、最も完全に信頼できる情報を得る」ために中央アジアへ出張し、その任務を完遂した。彼の持ち帰った標本資料と現地住民から得た情報は、博物館標本の分析研究を進展させ、後に Moshkova が貿易品目名に対応する生産情報を解明する際にも役立てられた。図1は、その解明の結果として、中央アジア絨毯の流通網と生産地および作り手のエスニシティの対応関係を筆者が地図上に図示したものである。

それぞれの貿易品目名ごとの経由地や作り手のエスニシティをみてみよう。まず、「テキン」絨毯とは、クラスノヴォスク経由でロシアや国外に輸出された、ザカスピヤ (Zakaspiya) 地域のトルクメン諸部族の生産品のことを指していた [Moshkova 1970: 23]。次に、「ブハラ」群にはブハラで作られたすべての絨毯が含まれていた⁽¹²⁾。ブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国の領域に暮らすトルクメン、ウズベク、アラブによって作られた絨毯製品もここに含まれた。本群には、ときにアフガン (afganskije) やパルーチ (beludzhskie) の絨毯も含まれることがあった [Moshkova 1970: 23]。後に台頭した「サマルカンド」絨毯は、サマルカンドの市場で調達された製品のことを指していた。本群には、半遊牧ウズベクや他の牧畜民族 (カラカルパク、カザフ) の各部族のほかに、フェルガナ盆地のクルグズの生産品もしばしば含ま

⁽¹²⁾ ここでいうブハラは都市名ではなくブハラ・アミール国のような広域的概念と解釈すべきだろう。先述のように、貿易分類における「ブハラ」絨毯がブハラ・アミール国産の製品と解することを否定しなかった理由の一つはここにある。

れていた [Moshkova 1970: 24]。同じく「アンディジャン」群には、アンディジャンの貿易市場で購入された、主にフェルガナ盆地のクルグズによって作られた製品が含まれた。一部に、新疆で作られた製品も含まれていた [Moshkova 1970: 24]。一方、「カシュガル」絨毯は、主にカシュガルの絨毯市場で調達され、フェルガナ盆地を経由して輸出された、東トルキスタンの領域で作られた絨毯のことを指していた。アンディジャンで購入されたフェルガナ盆地のクルグズの絨毯も、しばしば間違って「カシュガル」絨毯と呼ばれていた [Moshkova 1970: 23]。

ここまでで明らかなように、フェルガナ盆地のクルグズの製品には、流通網の関係により「カシュガル」、「サマルカンド」、「アンディジャン」という複数の呼称が割り当てられていたようである。これは、貿易分類による呼称しか情報がない古い標本を、実際の生産地や作り手の情報に分類し直すことのむずかしさを示した顕著な例であると言える。

また、しばしば見受けられるカテゴリーを越えた重複は、貿易の発展とともに呼称が増加したことによって生じたものだと説明できる。先述の通り、貿易品目名の登場は「ブハラ」>「テキン」>「サマルカンド」と「アンディジャン」の順である。つまり、もともとの「ブハラ」にはすべての製品が含まれていたが、そのうち品質的に優れたものが「テキン」と呼ばれるようになり、さらに新しい貿易拠点の台頭によって「サマルカンド」や「アンディジャン」が区別されるようになったのである。

東トルキスタン産の生産地と作り手のエスニシティに関しては、Moshkovaの分析結果のみでは情報が不足しているため、Dudinの記述から補足してみよう。クルグズの製品との関連で「カシュガル」絨毯について Dudin [1928: 91] は次のように述べている。

クルグズ絨毯の一部は〔地元の〕商人に「マンガト (mangitskii)」と呼ばれていたが、中国トルキスタン西部のクルグズ遊牧民の製品は「カシュガル」という通称で取引されている。

同様にクルグズの製品について説明した箇所、Dudin [1928: 144] は東トルキスタンの生産地やエスニシティに関して次のように述べている。

1902年の中国領トルキスタン旅行では、絨毯の生産地を訪ねる時間がなかったので、カシュガル在住のロシア人 Pal'tsev 博士から聞いたことを報告することしかできない。彼によると、カシュガルから西トルキスタンの絨毯市場に供給される絨毯は、ホータン地区やアクスのクルグズと定住ウズベクが作ったものだという。

要するに、東トルキスタン産の絨毯製品の主な生産者はクルグズであったことがわかる。ま

た、引用文中の「定住ウズベク」は現在のウイグルに相当すると考えられる。したがって、「カシュガル」絨毯は次のように再定義できるだろう。すなわち、主にカシュガルの絨毯市場で調達され、フェルガナ盆地を経由して輸出された製品群で、主にホータンやアクスのクルグズとウイグルの製品が含まれ、一部に東トルキスタン西部やフェルガナ盆地のクルグズの製品も含まれていた。

V. 各国博物館コレクションの特性

以上みてきた内容をもとに、ロシアと中央アジアに分けて、その標本の収集年代や地域、作り手のエスニシティに関する情報をまとめ、そのコレクション全体がどのような性格を有しているのかについて考えてみよう。

ロシア人類学・民族学博物館の Dudin が収集した中央アジアコレクションの絨毯標本は、1900年から1902年に収集されたもので、遊牧民の牧村や農村から直接購入したものと都市部のバザールから購入したものから成る。収集地域は、現在のトルクメニスタンのアシュハバードやメルヴ周辺、ウズベキスタンのサマルカンドやブハラ、フェルガナ盆地の諸都市、ウズベキスタンおよびタジキスタン南部の山岳地帯、クルグズスタンのアライ渓谷、クルグズスタン西部とカザフスタン南西部の渓谷地帯、カザフスタンのシルダリヤ付近、中国新疆ウイグル自治区内の諸都市である。エスニシティ別にみると、トルクメン、ウズベク、カラカルパク、カザフ、クルグズ、アフガン、その他ベルシアの製品を含んでいる。

中央アジア諸国の博物館の Moshkova が筆頭となって収集した絨毯コレクションは、主に1929年から1951年の間に絨毯生産者から直接収集されたものである。収集地域は、現在のクルグズスタンおよびウズベキスタンの領域にまたがるフェルガナ盆地、ウズベキスタンのサマルカンド州およびカシュカダリヤ州、トルクメニスタンのアムダリヤ中下流域とカスピ海沿岸地域である。エスニシティ別にみると、トルクメン、ウズベク、クルグズ、アラブ、カラカルパク、カザフの製品を含んでいる。収集地域に応じて同国の機関が収蔵したため、トルクメニスタンのコレクションはトルクメン諸部族の製品から成り、ウズベキスタンのコレクションはウズベクやクルグズ、アラブ、カラカルパク、カザフなどの製品から成る。また後者には災害等で散逸してしまったトルクメン諸部族の複製標本も含まれる。

帝政期とソ連期の収集活動をふまえて各国のコレクションを比べてみると、後者は絨毯作りの専門調査によって、生産者から直接見聞きした仔細な付帯情報をもつ点で価値ある資料群であることは間違いない。その反面、前者はバザールから入手した標本を多く含み、1つ1つの付帯情報の精度や量という観点では見劣りするかもしれない。しかし、コレクション全体の生産地やエスニシティという観点からみると、東トルキスタン産の製品や周辺諸国か

らの輸入品も含むので非常に幅広いラインナップで構成されている。さらに、バザールの流通品をできるだけ忠実に反映しているため、当時の中央アジアの住民の暮らしを知る上で高い学術的価値を有する資料群であると言える。一方、中央アジア諸国の方は、コレクションを領域に応じて各国の所蔵機関に配分しているため、当時の住民の生活の全体像を再現することは難しいかもしれない。しかし、かえってその領域主義的な配分のおかげで、その共和国内に暮らす住民のエスニシティを端的に示す資料群となりえている。とりわけウズベキスタンのコレクションは、その領域内に暮らす人々の多様なエスニシティを反映するものであると言えるだろう。

おわりに

本稿で示されたように、中央アジア絨毯研究は、ロシアとの関係を背景に進展してきたものであった。当初、中央アジア絨毯は、ヨーロッパ・ロシアの貿易慣行にしたがって、「ブハラ」や「カシュガル」といったロシア商人が取引を行う絨毯バザールの都市名で呼び分けられていた。中央アジアのみならず隣国からの流通品も集まるブハラの絨毯バザールは貿易の一大拠点であり、そのため「ブハラ」絨毯にはあらゆる産地の製品が含まれていた。やがてロシア商人たちは、品質的に優れたトルクメン諸部族の製品を「テキン」という名で区別するようになり、さらに新しい貿易拠点の「サマルカンド」や「アンディジャン」といった識別も生んでいった。

中央アジアの民族や部族集団に対しては、ロシア帝国からソ連へと政権がうつっても、統治・学術の両面から関心が寄せられつづけた。中央アジア絨毯の科学的分類の試みもその一環だった。とりわけロシア人民族学者 Dudin の現地調査と標本収集は、比較的正確な情報をロシア社会にもたらし、科学的分類の礎を築いた。ロシア博物館標本を中心に、絨毯に描かれるデザインの抽出と類型化がすすみ、それらを最終的に Moshkova が自身の現地調査の成果をふまえてエスニシティ別に体系化した。言い換えると、中央アジアの絨毯と民族部族集団の研究は、ロシア語社会のフィルターを通して開拓され、蓄積されてきたものと言える。

ところで、今日も一般的なこの科学的分類——エスニシティ別分類——は、実際の作り手のアイデンティティを反映したものなのかどうか筆者は疑問に感じている。絨毯に描かれるデザイン要素の抽出と系統立ては、中央アジアの牧畜民の部族構成を裏付ける証左でもあったが、その記号の抽出とエスニシティの同定という作業は循環参照を起こしているようにも思える。筆者は今後、ロシア語の学界で築き上げられてきたエスニシティの枠組みを問い直すことができればと考えている。そのために、まずは現地住民の生活に根ざした参与観察型の調査を行いながら、住民の言葉を学び、絨毯製品に投映される（あるいは反映されない）作

り手のアイデンティティのあり様を十分に理解することに努めたい。その上で、エスニシティ分類の構築にあたって参照されてきた標本資料を批判的に分析し直すことを展望している。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP 22KJ1939 の助成を受けたものです。

参考文献

- Dudin, S. M. 1928. “Kovrovye izdeliya Srednei Azii,” *Sbornik Muzeia antropologii i etnografii* 7, pp. 71–166.
- . 2021. *Otchet S. M. Dudina o poezdках v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg.*, preparation of the text, introduction and notes by T. G. Emel'yanenko, Moscow: Fond Mardzhani.
- Emel'yanenko, T. G. 2021. “Otchet S. M. Dudina o poezdках v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg. Kak etnograficheskii istochnik,” in *Otchet S. M. Dudina o poezdках v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg.*, written by S. M. Dudin, preparation of the text, introduction and notes by T. G. Emel'yanenko, Moscow: Fond Mardzhani, pp. 13–31.
- 小松久男ほか編 2005 『中央ユーラシアを知る事典』 東京：平凡社。
- Morozova, A. S. 1970. “Predislovie,” in *Kovry narodov Srednei Azii kontsa XIX – nachala XX vv.*, written by V. G. Moshkova, Tashkent: Izdatel'stvo “FAN” UzSSR, pp. 5–6.
- Moshkova, V. G. 1970. *Kovry narodov Srednei Azii kontsa XIX – nachala XX vv.*, Tashkent: Izdatel'stvo “FAN” UzSSR.
- . 1996. *Carpets of the People of Central Asia of the Late XIX and XX Centuries*, translated & edited by G. W. O'Bannon & O. K. Amanova-Olsen, Tucson: G.W. O'Bannon.
- O'Bannon, G. W. & O. K. Amanova-Olsen 1996. “Editor's Introduction to the Translation,” in V. G. Moshkova *Carpets of the People of Central Asia of the Late XIX and XX Centuries*, translated & edited by G. W. O'Bannon & O. K. Amanova-Olsen, Tucson: G.W. O'Bannon.
- Prishshepova, V. A. 2011. “K 150-letiyu so dnya rozhdeniya S. M. Dudina: khudozhnika, etnografa (po materialam MAE RAN),” *Antropologicheskii Forum*, no. 15, pp. 608–649.
- 志田夏美 2022 「中央アジア絨毯に関する先行研究レビュー——『ウズベク絨毯』をめぐって——」『イスラーム世界研究』15: 254–270.
- 宗野ふもと 2015 「手織り物からみる女性の日常生活——ウズベキスタン牧畜地域の事例から——」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（未出版博士論文）。

JACAS 年次大会

日本中央アジア学会 2023 年度大会プログラム

■概要

日程：2024年3月16日(土)～3月17日(日)

開催形式：ハイブリッド(オンライン+対面)

対面会場：京都大学東南アジア地域研究研究所(稲盛財団記念館3階大会議室)

■プログラム

● 3月16日(土)

13:00～13:10 開会の挨拶

13:10～15:10 パネル(公開)

「中央アジアと日本」

趣旨説明・司会：ダダバエフ・ティムール(筑波大学)

ダダバエフ・ティムール(筑波大学)

「ウズベク移民と日本社会——在日ウズベキスタン人移民の日本選択と新来在留外国人としての位置づけ——」

園田茂人(東京大学)

「中央アジアの心象地図と日本——2018年アジア学生調査の結果から——」

篠原建仁(株式会社 INPEX ソリューションズ調査事業部)

「中央ユーラシアの新たなコネクティビティ—— The Middle Corridor ——」

宗野ふもと(シルクロード国際観光文化遺産大学)

「ウズベキスタンにおける高等教育の国際化と日本」

質疑、討論



15:20～17:20 個人発表①

司会：徳永昌弘(関西大学)

ソイポフ・ジャスル(筑波大学)

“Effects of the COVID-19 pandemic on Uzbekistani migrants in Japan”

討論者：二瓶直樹(早稲田大学)

土居海斗(アジア経済研究所)

「都市に暮らす若者の幸福観——タシケント市の大学生への質問票調査から——」

討論者：和崎聖日(中部大学)

17:25～18:10 日本中央アジア学会総会

● 3月17日(日)

9:30～11:30 個人発表②

司会：磯貝真澄(千葉大学)

水田正史(大阪商業大学)

「ガーニャール朝末期マシュハドの為替と金融——中央アジアとの関係を中心に——」

討論者：植田暁(アジア経済研究所)

石山実弥(筑波大学)

「トルキスタン共産党機関紙『トルキスタン』における民族へのプロパガンダ分析」

討論者：小松久男(東洋文庫)

13:30～16:00 個人発表③

司会：秋山徹(北海道教育大学釧路校)

鈴木朝香(東京大学)

「権威主義体制下のトルクメニスタンにおける情報統制——抑圧的な情報空間にみられる協力調達戦略をめぐって——」

討論者：樋渡雅人(北海道大学)

今堀恵美（東海大学）

「ウズベキスタン手工芸家支援の試み——日本における刺繍展示会とワークショップの報告——」

討論者：廣田千恵子（日本学術振興会（北海道大学））

ヌルガリエヴァ・リヤイリヤ（高崎経済大学）

「カザフスタンのマルチベクトル外交政策——中国とロシアを中心に——」

討論者：宇山智彦（北海道大学）

使用言語：英語

*発表者、司会者、討論者の所属はいずれも発表時のものです。

COVID-19 パンデミック下の日本における ウズベキスタン人移住者への影響

ジャスル・ソイポフ

COVID-19が2019年末に中国の武漢で発見されてから3年の間に世界中で約6億8700万人が感染し、そのうち687万人が死亡した。COVID-19のパンデミックは、全面的または部分的な操業停止と大量の雇用喪失によって、世界的な経済の停滞を引き起こした。過去20年間、日本は少子高齢化などの人口動態の変化に見舞われてきた。発展途上国に比べ、日本では給料が高く、仕事がすぐに見つかることが、移住者にとっての主な魅力である。2020年現在、日本には290万人の移民がおり、うちウズベキスタン人は2022年現在5,513人である。

COVID-19のパンデミックの際には、移民を含む脆弱な集団が受入国の国民よりも大きな影響を受けたと主張する学者もいる。移民は失業などの社会経済的影響を受けた。

もう一つの問題は健康問題で、移民のCOVID-19感染率は受入国国民のそれを大幅に上回っていた。医療へのアクセス不足は大きな懸念事項であった。移民の心理的健康影響には不安や抑うつが含まれ、身体的影響については、移民は受入国出身者よりもCOVID-19の病状が長期化した。

留学生は、ホスト国の学生と同様に、インターネット接続の不具合など対面授業からオンライン学習への突然の移行によるいくつかの課題に直面した。プラス効果のひとつは、学習の強化であり、オンライン学習への情熱である。

カナダやオーストラリアのように、自国民や永住権保持者のみに財政支援を行う受入国もあった。しかし日本では、COVID-19の流行期間中、日本政府は国籍を持たない在留者に対しても助成金や融資を行った。

日本のウズベキスタン人移住者のように、言語や文化の壁、人口規模の小ささなどの理由で研究されていない脆弱なグループもある。本研究は、そのようなギャップを埋め、国際移動という学問分野に貢献するものである。研究課題は「COVID-19パンデミックは日本のウズベキスタン人移民にどのような影響を与えたか？」である。

定性分析を用いて25人の在日ウズベキスタン人移住者（うち女性4人、男性21人）を調査した。13人が学生であった。2021年7月初旬から8月末までのデータ収集には、半構造化イ

インタビューとともに、コンビニエンス・サンプリングを用いた。データ分析には主題分析を用いた。

調査の結果、学業、経済・雇用、メンタルヘルスへの影響という3つの分析すべき課題が見つかった。ウズベキスタンの学生が直面した学業への影響は、他の留学生が経験したものと非常によく似ていた。例えば、技術的な課題、クラスメイトや講師との交流の低下、チューターからの適切なサポートやフィードバックの欠如などである。

奨学金やその他の経済的支援を学生に与える大学もあった。低所得の学生は日本政府からローンを受けることができた。

日本では多くの企業が業務を停止し、従業員数を減らしたり、月給をカットしたりした。そのため、長期的な計画や希望を変更せざるを得なかった在日ウズベキスタン人もいる。一方、経済的な問題にそれほど直面しなかった、あるいは経済状況が改善したという回答もあった。

メンタルヘルスへの影響という点において、日本にいるウズベキスタン人移住者の中には、不安やストレス、孤独感に直面し、日本での将来に希望が持てなくなった人もいる。家族に会うため、あるいは結婚するために故郷に帰れないことが、彼らの不安のレベルを高めた。

ウズベキスタンからの移民は、学業を継続し、ビザを維持する方法を模索している。学費が払えずに退学し、学生ビザから特定活動ビザに変更した学生もいる。

経済・雇用への影響という点では、ウズベキスタン人移民、特にフルタイム労働者は、日本政府の財政支援により、カナダやオーストラリアなど他国の移民と比較してそれほど多くの課題に直面していない。ただし、正規の職に就けなかった専門学校卒業生が、日本での滞在を延長するために短期大学や専門学校に再入学するといった課題は存在する。

(筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」)

都市に暮らす若者の幸福観 — タシケント市の大学生への質問票調査から —

土居 海斗

旧ソ連圏および中東欧の移行諸国を対象とした移行幸福感研究では、移行諸国の幸福度は他の地域と比較して低く、特に経済状況と強い相関を持つことが示されてきた。しかしながら近年の研究では、中央アジアでは客観的経済指標は貧しいが幸福度は高いという正反対な傾向が指摘されている。このパズルに対して、そもそも幸福の定義や意味が文化や社会生態学的環境によって異なることが指摘される[内田・荻原 2012]。既存の移行幸福感研究では主に幸福のレベルや決定要因に関する国際比較に重点が置かれてきたため、幸福の概念そのものや概念の文化差に関する研究はほとんど進んでいない。中央アジアの幸福感の独自の特徴を解明するうえで、マクロな社会とミクロな心理的表現の相互関係を前提とした、地域に特有の幸福概念の理解は必須である。そこで本報告では、質的データと量的データを組み合わせた混合研究法によって、ウズベキスタンの文化に埋め込まれた若者の幸福概念を幸福の定義と対象の観点から明らかにし、幸福像をマッピングした。また、幸福の定義、対象、レベルの複雑な相互関係も詳細に検証した。

質問票調査はタシケント市に所在するウエストミンスター国際大学タシケント校において実施し、145名の大学生から回答を得た。幸福の定義に関しては自由記述式のエッセイ(「あなたにとって幸せとは何ですか」)から把握した。幸福の対象(「自分」、「親」、「きょうだい」、「親族」、「隣人」、「友人」、「大切な人」)についてはそれぞれ5段階で回答する自己評価型の設問を用いた。幸福度についてはその程度を10段階で評価する設問を用いた。

エッセイの主題分析の結果、幸福の定義として、生活領域、心理的側面、抽象的概念という3つの大きな主題が得られた。生活領域はさらに「家族」、「社会関係」、「健康」、「仕事とお金」、「宗教」、「生活全般」、「教育」というカテゴリーに分類され、その順で回答数が多かった。心理的側面も同様に「達成・成長」、「調和」、「感情」、「自由・自己決定」、「認識」、「満足感」、「人生の意義」というカテゴリーに分割され、その順で回答数が多かった。また、幸福の対象については、「親や家族の幸せ」、「個人の幸せ」、「親族や隣人、友人の幸せ」の順で重要とされた。

さらに、同質的な幸福の定義を有する個人をグループ化するためにクラスター分析を用いた

結果、6つの異なる幸福像が生成された。調和と満足感を重視する「安らぎ志向層」、感情、認識、抽象的概念を重視する「感性志向層」、社会関係、宗教を重視する「人間関係重視層」、仕事とお金、自由・自己決定を重視する「自己追求層」、達成・成長を重視する「達成感追求層」、家族を重視する「家族重視層」である。ここで「感性志向層」、「自己追求層」、「達成感追求層」はより個人志向の幸福観を、「安らぎ志向層」、「人間関係重視層」、「家族重視層」はより集団志向の幸福観を反映している。そして、個人志向の幸福観を持つクラスターでは「個人の幸せ」が、集団志向の幸福観を持つクラスターでは「親や家族の幸せ」がより重視された。さらに、クラスター間で幸福度に差異がみられ、幸福度が最も高いのは「人間関係重視層」で、最も低いのは「安らぎ志向層」であった。

上記の結果を吟味すると、次のような含意が得られる。第一に、ウズベキスタンの若者の間には、個人主義的な幸福観（個人の主体性や達成感の重視）と集団主義的な幸福観（調和のとれた家族関係や対人関係の重視）が共存していることである。伝統的に集団主義的な社会とされるウズベキスタンにおける異なる志向性の幸福観の共存は、近年の社会経済的変化に伴う価値観やライフスタイル、社会規範の変化を反映している可能性がある。これは近代化が経済発展や社会変化を導き、伝統的価値観の衰退と個人主義的価値観の台頭をもたらすという近代化理論によって説明される[Hamamura 2012]。一方、文化遺産理論によれば、いくら社会経済的変容期にあっても、文化などの広範な信念体系が変化しない限り、伝統的価値観は持続し続ける。つまり、ウズベキスタンの文化に固有な集団主義的な価値観もまた存在し得るのである。特に、このような幸福観の共存は高学歴層の若者にとって特徴的であると考えられる。第二に、幸福をどのように定義するかは、幸福の対象やレベルと大きく関連するということである。つまり、個人は幸福の概念に導かれて心理的表現を行うことを示唆している。これは幸福の概念を見過してきた移行幸福感研究に欠けた観点であり、移行諸国と中央アジアの幸福感に関する相違は、幸福の概念の文化差によって説明される可能性を示唆している。しかしながら本調査の参加者の属性には不均衡があることから、幅広い世代や地域を対象としたさらなる調査が求められる。

参考文献

- Hamamura, T. 2012. "Are Cultures Becoming Individualistic? A Cross-Temporal Comparison of Individualism–Collectivism in the United States and Japan," *Personality and Social Psychology Review* 16(1), pp. 3–24.
- 内田由紀子・荻原祐二 2012 「文化的幸福観——文化心理学的知見と将来への展望——」『心理学評論』55、26–42頁。

※本研究はJSPS科研費JP23K18821の助成による研究成果の一部である。

(アジア経済研究所)

ガージャール朝末期マシュハドの為替と金融 — 中央アジアとの関係を中心に —

水田 正史

1891年4月、イギリス海外銀行にしてイランの独占的発券銀行たるペルシャ帝国銀行のマシュハド支店が開業した。マシュハドはイランの主要都市の1つであり、イラン各地、中央アジア、アフガニスタン、インドなどからなる交易と金融のネットワークの中心でもあった。したがって、同地には同行支店開設以前から多数の商人や金融業者が営業していた。

当時、マシュハドでは貨幣が不足しており、ロシアへの送金のためにロシアの金貨とルーブル紙幣が買い占められていた。ペルシャ帝国銀行マシュハド支店の開設は、この貨幣不足を解消するものとして期待された。

同行が銀行券を発行するや、その流通に、地元金融業者から次のような対応が見られた。すなわち、彼らは、同行銀行券所持者の無知に付け込み、それをディスカウントで買い、好機が訪れればプレミアムで売ったのである。

同行銀行券が流通していたのは、イラン領内においてだけではなかった。中央アジアにも流出していった。イギリス海外銀行券がロシア領で流通していたのである。さらにマシュハド内部に目を転ずれば、イランの本位貨幣ゲラーン銀貨のみならず、トルコ・リラ、ブハラ・ティッラー、インド・ルピー、ヘラート・ゲラーン、インド・カレンシー・ノートなどが流通していた。つまり、マシュハドおよびその周辺地域は通貨の混沌状態であったのである。

通貨の混沌状態、ということになると、為替の問題に関心が向かうことになる。当時、マシュハドでは、イラン通貨ゲラーンがポンドに対して低落しつづけ、それは同地のみならず、同地を州都とするホラサン州全体の交易に深刻な影響を与えた。

この外国為替問題に加えて、イランの銀貨と銅貨の交換比率の問題がこの頃、現れた。銅貨が銀貨に対して減価したため、銅貨で支払いを受けていた貧民たちは大きな打撃を受けた。

次いで取り上げるべき重要な事実として、ルーブル紙幣の問題がある。当時、マシュハドの商人たちは商品購入のためにインドに送金するのに、為替手形を使うことはめったになく、ルーブル紙幣を使ったというのである。このルーブル紙幣は、マシュハドの聖廟への巡礼者などによってマシュハドにもたらされ、マシュハドで使われる。地元の商人たちはそれを郵

便でオデッサ(オデーサ)へと送る。オデッサでそれらはポンドへと替えられ、さらにロシアの銀行によってボンベイ(ムンバイ)へと送られる。つまり、ルーブル紙幣がこれら広域における「国際通貨」であったのである。この「ルーブル国際通貨システム」は突然現れ、突然無くなったという。

通貨の混沌状態はこれらにとどまらなかった。イランのゲラーン銀貨が中央アジアへと輸出されたのである。ペルシャ帝国銀行がこの交易から利益を得た。同じ頃、ロシア政府が対イラン(ホラサン州)国境に為替事務所を開設した。

1903年あるいは翌年の時点で、マシュハドにはペルシャ帝国銀行以外にロシアの国策銀行であるペルシャ割引貸付銀行が存在した。同行は、銀行業務に加えて、自己勘定と他人勘定で交易業務を行っていた。

この頃、ゲラーン銀貨の中央アジアへの輸出が継続的に減少した。その理由の1つは、トルコマン人が、ゲラーンよりも為替の変動を受けにくいルーブル銀貨を好むようになったこと、であった。1905年初めには、ゲラーン銀貨が熔かされて地金の形でロシア「本土」へと輸出された。

以上のように、本発表では、グレート・ゲーム(アジア西部における英露の角逐)の焦点たるイラン北東部と中央アジアでの英露の在外銀行の活動と同地域の為替・金融との関係を解明することを試みた。このことにより、20世紀初めのアジア西部の諸地域における政治変動の本質を解明する上での新たな視座を獲得する可能性が開かれたのではないかと考える。

討論者の植田暁氏をはじめ、コメントを頂戴した方々に厚く御礼申し上げる。頂いたコメントにより訂正ないし留保すべきと感じた点もあるが、「発表要旨」なので発表内容をそのまま要約するにとどめた。

(大阪商業大学総合経営学部)

トルキスタン共産党機関紙『トルキスタン』における 民族へのプロパガンダ分析

石山 実弥

本報告では、ロシア共産党地方支部であったトルキスタン共産党がトルキスタン自治ソビエト社会主義共和国で発行していた機関紙『トルキスタン』(1922–1924)における「民族」へのプロパガンダ活動の詳細と意図を明らかにするとともに、中央アジア住民の帰属意識を「民族」へと集約した目的の考察を試みた。

本報告で対象とする時期である 1923–1924 年は現代の中央アジアにおける民族・国境の原型を作り出した民族・共和国境界画定がソビエト政権によって実施される前後の時期である。当時の中央アジア諸共和国に属する人々は必ずしも「民族」という括りのもとで帰属意識を持っていたわけではない。人々は「民族」以上に宗教・地域・文化に基づいた多層的な集団に帰属意識を有していた。「民族」という区分に基づき集団を分割しようとすれば、人々の帰属意識と齟齬が生まれる。そのような問題を有しながらも「民族」に基づき共和国を設立し、「民族」に基づいた集団に帰属するよう強制した。そのため、中央アジアのロシア共産党地方支部はこの民族・領域区分を当時の中央アジア諸共和国に属する人々に浸透・受容させる必要があり、宣伝活動を行っていた。以上を踏まえ、本報告ではトルキスタン共産党機関紙『トルキスタン』内で行われる「民族」に対するプロパガンダの詳細分析を試みた。

本報告では、『トルキスタン』内の民族・共和国名称をタイトルに含む記事に着目し、「民族」へのプロパガンダの分析を試みた。第一に、『トルキスタン』が宣伝対象とする「民族」を明らかにすることを目的とし、調査を行った。本調査では、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターがマイクロフィルムとして所蔵する『トルキスタン』のデータを使用した。当該史料には欠損が多く存在する。そのため、完全に正確なデータとはいえないものの、当該史料を用い『トルキスタン』記事タイトルのリスト化を行った。加えて、民族・共和国境界画定の際に領域区分の基準となった民族「ウズベク」「カザフ」「タジク」「キルギズ」「トルクメン」の記事タイトル内での使用率の分析を行った。分析の結果、圧倒的に民族名称「ウズベク」が使用される回数が多く、また記事内容も多様であることが判明した。以上の分析は史料に欠損が多いことから正確ではないものの、1924年10月12日より『トルキスタン』内でタイト

ル下に「ウズベク語による[新聞] На узбекском яз」という表記も加わったことも考えると当該新聞は「ウズベク」に最も焦点を当てていたと言えるだろう。

第二に本報告では、民族・共和国境界画定が実行される前後の時期に焦点を当て、実行時期に民族・共和国名称である「ウズベク」、「ウズベキスタン」の記事タイトル内使用率に増加が見られるか分析した。調査の結果、共和国名称「ウズベキスタン」の使用率には明確な増加が見られるものの、民族名称「ウズベク」の使用率には著しい増加は見られないことが判明した。民族・共和国名称の扱いには差が見られ、「ウズベク」に関する記事は多様な記述が存在するのに対し、「ウズベキスタン」に関する記述は主に共和国の基礎情報や建国の進捗を広報する記事に限られていた。この理由として、当時「ウズベク」という民族概念はある程度形作られていたのに対し、「ウズベキスタン」は新たな共和国概念として急ぎ浸透させる必要があったという違いが挙げられる。

以上を前提として踏まえ、本報告では第三に新聞『トルキスタン』内で見られる「ウズベク」民族に対する宣伝記事に焦点を当て、「民族」に対するプロパガンダの詳細分析を行った。「ウズベク」民族に着目した宣伝を分析すると、『トルキスタン』内では民族語の統一・言語教育・共産党員の育成・女性の社会進出といったソビエト政権による改革活動を、「ウズベク民族の発展のため」という文脈でプロパガンダを行っていたことが読み取れた。

トルキスタン共産党機関紙『トルキスタン』における「民族」に焦点を当てたプロパガンダの性質をまとめると、①「ソビエト政権の政策・決定を受容・浸透させるため」と、②「ロシア共産党イデオロギーに即した民族概念を強固とするため」という2つの目的を有していることが見て取れた。また、民族語・ウズベク文学作品・教育施設に関する宣伝といった「教育」と強い結びつきを持ったプロパガンダが多数見られ、民族教育を推進することで共産党イデオロギーの浸透を目指す意図がうかがえた。

「民族」への帰属意識の集約は民族語の普及を促し、共産主義教育を容易とする。また、宗教・文化・地域に基づく多層的な帰属意識は反ソビエト運動に結び付きやすい。この時期、ソビエト政権が「民族」へと帰属意識の集約を目指した理由として、多層性ゆえに制御が困難となっていた中央アジアのナショナリズムを「民族」へと集約することで制御を容易とする意図があったと考えられる。

(筑波大学大学院国際公共政策学位プログラム)

権威主義体制下のトルクメニスタンにおける情報統制 —— 抑圧的な情報空間にみられる協力調達戦略をめぐって ——

鈴木 朝香

本研究は、権威主義体制下にあるといわれるトルクメニスタンについて、同国の抑圧的な情報空間に特徴的にみられる非常事態等における情報統制の現状を明らかにし、その解釈のあり方を探求するものである。

トルクメニスタンでは、ソ連の中央集権的な統治機構を多く引き継ぐ、個人独裁型の権威主義体制が敷かれており、強い権限をもつ大統領と少数のエリートによって統治されている[Bohr 2003; 地田 2011: 39–42]。同国は、抑圧的な情報統制を行う表現の自由が極めて制限された国ともいわれ、これまで多くの人権団体がその実態を報告してきた⁽¹⁾。しかし、厳しいといわれるトルクメニスタンの情報統制について、その詳細を検討した研究は極めて少ない。他方、同国の事例は、例えば新型コロナウイルス感染症の世界的流行のなかで、政府が国内感染者ゼロを主張するなど、他の権威主義国とは異なる様相を呈する。そこで本研究では、トルクメニスタンの情報空間に特徴的にみられる情報統制の現状を明らかにし、その解釈のあり方を探求することで、同国情報統制の特徴と、他の権威主義国家と共有する普遍性を明らかにすることを目指す。

まず本発表においては、トルクメニスタン政府による情報統制の概要として、同国における表現の自由の法的抑圧、当局による暴力的抑圧、またデジタル技術を用いた情報の統制について、文献調査から明らかになったことを報告した。トルクメニスタンでは、憲法における曖昧な留保付きの表現の自由規定で、その保障される範囲が不明瞭にされているだけでなく、テレビやラジオ、新聞・雑誌などのメディアに係る法律においては、政府の管理下で放送・出版活動をすることを求め、実質的に反政府的な報道をできない状況を生み出し、メディアの独立性を著しく侵害している。また人権活動家などへの警察による嫌がらせ行為や暴力、2つのナショナル・インターネット・ゲートウェイを用いたデジタル情報空間の徹底した監視・管理等の物理的抑圧による統制も報告されている[Nourin et al. 2023]。

上記のような抑圧のなかで、トルクメニスタンではどのような情報・表現が統制され、ど

⁽¹⁾ 例えば“Freedom in the World 2023 Turkmenistan,” *Freedom House*, URL: <https://freedomhouse.org/country/turkmenistan/freedom-world/2023>, 閲覧日: 2024年04月19日; “World Report 2023-Turkmenistan Events of 2022,” *Human Rights Watch*, URL: <https://www.hrw.org/world-report/2023/country-chapters/turkmenistan>, 閲覧日: 2024年04月19日。

のような情報・表現は許容されているかを明らかにするために、本研究は、特に緊急事態における公的なデジタル情報空間の実態に焦点をあて、オンラインニュースの記事を分析した。より具体的には、トルクメニスタンの国営・民間・独立系の3つのメディアが、インターネット上に掲載した記事のなかで、新型コロナウイルス感染症を表す2つの単語と事故・災害に関連する10の単語を含む記事を収集し、主に質的な読解を行った。期間は2020年1月から2023年6月までで、記事はロシア語で書かれたものを対象とした。

分析の結果、トルクメニスタンの国内メディアは事故・災害の発生や新型コロナウイルス感染症患者の確認に関する情報はまったく報道しない一方で、その対策・対応に取り組んでいることや、海外におけるそれらの発生情報、過去の事故・災害には触れることが分かった。特に民間メディアは、世界各地の災害情報は報じていながら、国内や隣接する地域で発生したものについては報道しないことから、本国では緊急事態の発生情報が抑圧されていると考えられることを報告した。他方、気候変動に伴う災害への対策・対応や、国際機関や他国政府と連携した新型コロナウイルス感染症対策に関する記事は、国営・民間の両メディアにおいて報じられており、国内での緊急事態等の発生に言及することなく、その対策・対応に触れることは許容されていると推測される。

最後に、本研究では上記の分析結果を、権威主義体制の統治戦略である抑圧と抱き込み(協力調達)及び正当化の観点から検討を試みた。緊急事態の発生情報が統制されていることは、抑圧戦略により説明が可能だが、発生は伝えていない緊急事態への対策・対応を報じる行為は、政府のパフォーマンスの高さをアピールすることで体制の正当化を図る行為と考えられるのではない。また、対策・対応を報じる記事のなかでも、特に実際に発生した事故に対する対応と考えられる大統領令を掲載した国営メディアの記事や、事故・災害に関する記事と比較して量的に多く発信されていた新型コロナウイルス感染症の対策・対応に関する記事は、正当化の観点からだけでなく、被統治者の潜在的な反発を抑圧することを目的とした協力調達戦略の観点から説明が可能ではないかと指摘した。

参考文献

- Bohr, Annette. 2003. "Independent Turkmenistan: From post-Communism to Sultanism," in *Oil, Transition and Security in Central Asia*, edited by Sally N. Communings, London and N.Y.: Routledge Curzon, pp. 9–24.
- 地田徹朗 2011「ポスト・ニヤゾフ時代のトルクメニスタン政治——ベルディムハメドフ『改革』の方向性と政治体制の変化——」『日本中央アジア学会会報』7、19–44頁。
- Nourin, Sadia. and Tran, Van. and Jiang, Xi. and Bock, Kevin. and Feamster, Nick. and Phong Hoang, and Nguyen. and Levin, Dave. 2023. "Measuring and Evading Turkmenistan's Internet Censorship: A Case Study in Large-Scale Measurements of a Low-Penetration Country," *Proceedings of the {ACM} Web Conference 2023*. <https://doi.org/10.1145%2F3543507.3583189>

(東京大学大学院学際情報学府)

ウズベキスタン手工芸家支援の試み — 日本における刺繍展示会とワークショップの報告 —

今堀 恵美

現在ウズベキスタンではかつてないほど観光化が進み、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァといった都市では土産物としての手工芸品の需要が高まっている。その一方で廉価な手工芸品の輸入が広がり、地域で継承されてきたデザイン、費やされる技能、品質の差が売り上げに直結しにくい状況がある。

従来のウズベク工芸研究は作品を地域で表象させる語りを中心〔Чепелевская 1961〕だったが、特にこの10年間に各工芸分野で活躍する手工芸家たちを実名で網羅的に取り上げ、作品の特徴や経歴、展示会（とくに国際展示会）への出品、受賞歴を紹介する研究〔Рахмова ほか 2019, Бинафша 2021 など〕が増加した。これらは現在活躍する手工芸家を表彰し、廉価な制作だけではなく、次世代につながる工芸制作や観光業を支える人材育成のロールモデルとし、手工芸家の作品で差別化を図る作家性確立への試みともいえる。作家性の確立は作品のブランド化を可能にし、質の高い制作活動をする工芸家のエンパワーメントにもつながるだろう。

質の高い制作を続ける手工芸家の活動の幅を広げる試みとして、2020年にウズベキスタン大統領ミルジヨエフから友好賞を受賞した刺繍作家ズフロ・オブロベルディエヴァを日本に招聘し、2024年2月ウズベク刺繍の展示会および刺繍教室を実施した。本報告ではこの展示会を通した手工芸支援の試みを考察した。展示会開催の方針として、ズフロ・オブロベルディエヴァという現代の個人作家の作品紹介に注力した。また制作は単なるアート（自己表現）ではなく、現地の女性刺繍作家が事業のイニシアティブをもち、事業によって村落部の下請け女性に収益がある点も明示した。

展示会には壁掛け（スザニ）や目隠しなど40点以上の作品を展示し、5日間で560名を超える来場者があり、刺繍教室では74名の参加者があった。ただし本展示会は科研費の研究成果を還元するという性質から展示会場内での販売活動は自粛することになった。

展示会場で実施した来場者アンケートの結果について報告した。アンケート回答者には大別して大学生および40代から60代女性という2種類のグループが見られた。回答者は両グループともウズベク刺繍家の作品を高く評価し、購入意欲も高い。とくに40代から60代女性グループにとっては「滅多に日本で見られない、ウズベキスタンで有名な刺繍家の作品を見る機会」と認識され、「現地に行っても（土産物屋などで）本物を見られない作品」、「日本で習う機会のない

刺繍ステッチ」が強い関心をひいた。一方で、大学生にとっては遠い世界だった中央アジアの文化、ウズベク刺繍、作家本人を目の当たりにすることが関心の幅を広げる契機となっていた。アンケートではウズベク刺繍家の作品が今後日本で販路を拡大させる可能性について問うた。回答では展示品のような装飾性の高い作品の価値は認めつつも、実際に手に取る品として実用性や普段使い小物への応用の可能性が指摘された。

上記からウズベキスタンの手工芸家を支援し、パートナーシップを構築する試みとしての展示、ワークショップ、SNS の可能性として以下の3点を指摘した。

1. 展示や手工芸を実際に体験する刺繍教室は日本人のウズベク手工芸に対する見方を変えることに一定程度の役割を果たしている。一方でウズベク工芸家自身も、直接中央アジアに関心のある日本人に触れ、新たなネットワークを形成した。

2. 展示会広報に SNS での情報伝達が大きな威力を発揮した。中央アジアに関心のある人々に SNS 上のインフルエンサーから直接情報が届き、展示会へ足を運ぶ契機となった。SNS や翻訳サイトといった新たなツールが刺繍家に直接日本人とのコミュニケーションを可能にし、日本へ新たな販路を拡大させる可能性を提供した。

3. ウズベク刺繍家たちは日本での展示に参加しても常に母国の家族や知人とスマホでつながっていた。常に彼らに相談し、時に交渉しつつ、新たな販路拡大を決めていた。

今回の展示会を通じて以下の3点を考慮する必要性を痛感した。

1. 助成金使用のルールや大学での学務など研究者は一定の行動規制があり、単独でパートナーシップを構築するのは限界がある。

2. 人類学者などの研究者は現地の人たちと長年に亘って築いてきた信頼関係を母国（日本）でも継続し、中央アジアの工芸に関心のある日本人につなげるコーディネーターとしての役割が期待される。

3. 中立性、客観性確保のために活動を制限するのではなく、彼らとともに新たな世界をデザインし、実現させるためにアイデアを提供し、多くの協力者を巻き込んで行動することが必要とされる。

今回の結果をウズベク刺繍家と共に検討し、さらなる制作活動の発展に貢献していきたい。

参考文献

- Бинафша, Н. 2021. Ўзбекистон Амалий Санъати. Китоб Альбом. Тошкент: «San'at» журнал нашриёти.
- Рахмонова, М., Ҳамроев, А. 2019. Бухоро Ҳунармандчилиги Дурдоналари. Тошкент: «O'zbekistan» НМИУ.
- Чепелевецкая, Г. А. 1961. Ўзбекистон Сўзанази. Тошкент: ЎзССР Давлат Бадий Адабиёт Нашриёти.

(東海大学文化社会学部アジア学科)

Kazakhstan's Multi-vector Foreign Policy: Focus on China and Russia

Lyailya Nurgaliyeva

After the collapse of the Soviet Union, Kazakhstan had to build their foreign policy from scratch. Accepted on October 25, 1990, the declaration “On State Sovereignty” was the first historical document to secure the country as a subject of international law with the right to an independent foreign policy. Speaking about the initial stages of forming the country’s foreign policy, Kasymzhomart Tokayev, the Kazakhstan former Minister of Foreign Affairs from 1994–1999, stated that from December 1991 to 1993 the basic principle of a multi-vector diplomacy was laid and is now the core of the country’s foreign policy [Tokayev 2001: 41–43]. Following Tokayev’s statement, the Kazakh researcher, Murat Laumulin, also stressed that Kazakhstan’s decision to start aiming for a multi-vector foreign policy was the best way to survive that harsh time.

A flexible policy of multi-vector diplomacy was encouraged by the geographical location of the country, with features such as a common border with major powers like Russia and China, the lack of direct access to sea lines of communications, and by Kazakhstan’s abundant natural resources. These resources have attracted great interest from neighbors, albeit the relatively small size of Kazakhstan’s economy in comparison to the size of territory [Tokayev 2001: 41–43]. For these reasons, Kazakhstan needed to have friendly relations with as many neighboring states as possible. Kasymzhomart Tokayev stressed that “from the start Kazakhstan sought out a foreign policy which would allow for stable and mutually beneficial friendly relations based on the principles of complete trust with neighboring countries and all others” [Tokayev 2003: 158].

Since Kazakhstan’s independence up until the present day, the country’s multi-vector foreign policy went through several stages of development. Kazakhstan’s government issued the Concept of Foreign Policy, approved three times respectively in 1995, 2001,

and 2014.

The most important document was that issued on March 15, 2001. It shifted the country's foreign policy direction from maintaining balanced relations with countries worldwide to focusing on targeting specific states. The leadership saw this shift as serving the country's long-term interests. Against the background of this policy shift in 2001 was Russia's presence.

Since Putin's arrival as the President of Russia in 2000, Russia's foreign policy has shifted noticeably towards a stronger emphasis on relations with Central Asia. Thus, Kazakhstan decided to pursue a conditional multi-vector foreign policy: a focused strategy to keep a friendly relationship with Moscow while simultaneously securing independence from Russia. An example of this is its hydrocarbon development policies. Since its independence, the development of the oil sector was crucial for Kazakhstan. In those days, however, Russia was the only export option for Kazakhstan's oil due to its interconnected infrastructure, a by-product of the Soviet Union. Kazakhstan wanted to secure more independence from Russia by diversifying export routes. Therefore, Kazakhstan put great effort into energy cooperation with China.

The 2014 Concept of Kazakhstan's foreign policy emphasizes China's importance as a strategic partner in energy, investment, trade cooperation, and interaction in the transit and transport sector. After Xi Jinping's proposal to build the Silk Road Economic Belt on September 7, 2013, Kazakhstan was among the first countries to welcome his initiative. The collaboration between Kazakhstan and China had the potential to become the driving force for Central Asia's economic security and bring different advantages to Kazakhstan.

The SREB project was among the most discussed topics in China and overseas during 2016, and it was the most frequent subject of articles in China's official daily newspaper, the People's Daily [Laruelle 2018: 10]. A total of seven belts have been planned in various fields, including transport, energy, trade, information, science, agriculture, and tourism. This project has the potential to become a large-scale, free-trade zone spanning from Central Asia to the north-western provinces of China, and then on to Eastern and Central Europe.

The reason why Xi Jinping delivered his speech in Kazakhstan was because, in comparison to other Central Asian states, Kazakhstan offers key geographical advantages. China will have been well aware of Kazakhstan's capacity to open new cargo routes,

access markets in the Customs Union, and the country's favorable investment climate.

Kazakhstan's goal to access international markets is laid out in the state '100 Concrete Steps' program, which is in line with China's plans to implement infrastructure projects for the New Silk Road. Indeed, the adoption in November 2014 of the new economic policy 'Nurly Zhol – Path to the Future', focusing on infrastructure development was, in fact, consistent with the Chinese 'Silk Road Economic Belt' initiative and aimed at maximizing the benefits of its implementation. The main cargo of the "New Silk Road" will be carried out from East to West.

In order to implement this new economic policy, Kazakhstan joined the China-led Asia Infrastructure Investment Bank (AIIB) on October 24, 2014, which was initiated by President Xi Jinping in 2013. The main purpose of the AIIB was to promote economic development, create wealth, and improve the interaction of infrastructure in Asia.

China is currently the biggest trade partner of Kazakhstan. The 2022 trade volume between China and Five countries of Central Asia registered a record of over 70 billion US dollars and has been increased by about 40% from the previous year. Among these Five Central Asian countries, the most significant trade volume occurred with Kazakhstan, amounting 30 billion US dollars.

Kazakh-Chinese investment cooperation has been upgraded to a new level. Previously, the majority of Chinese investment companies investing in Kazakhstan have been associated with the fuel sector – oil and natural gas, as well as the construction of pipelines. Nowadays, the interaction is more in the non-primary sector. Kazakhstan has supported the proposal of the Chinese program for the transfer of production capacity to its territory, such as the production of glass, cement, and processing of agricultural products. This, in turn, might provide powerful impetus to the development of non-primary sectors of Kazakhstan's economy such as transport and logistics, production of building materials, and processing of agricultural products.

In summary, we can see that the multi-vector foreign policy has gone through different stages of development since its establishment. However, the most significant change was the 2001 shift from a general approach without any specific target countries towards a specific approach targeting Russia due to proactive Russian policy in Central Asia. Putin's arrival as the president of Russia in 2000 represented a fundamental turn of Russian foreign policy towards the Central Asian region. In those circumstances, Kazakhstan had

to protect its national interests and reduce the consistently increasing economic influence of Russia. Thus, the multi-vector foreign policy of Kazakhstan from 2001 up to the present was an elaborated strategy towards the reduction of economic dependence on Russia through enhanced economic cooperation with China.

References

- Laruelle, Marlene. 2018. "Introduction: China's Belt and Road Initiative. Quo Vadis?" In *China's Belt and Road Initiative and Its Impact in Central Asia*, edited by Marlene Laruelle, Washington, D.C.: The George Washington University, Central Asia Program, pp. x–xii.
- Tokayev, Kassym-Jomart. 2001. *Diplomatiya Respubliki Kazakhstan*, Astana: Elorda.
- Tokayev, Kassym-Jomart. 2003. *Ocherki diplomata. Kniga 1: Preodolenie*, Almaty: Diplomaticheskoe ocherki Kazakhstanskogo ministra.

(Takasaki City University of Economics)

ウズベク移民と日本社会

— 在日ウズベキスタン人移民の日本選択と新来在留外国人としての位置づけ —

ティムール・ダダバエフ

1991年の独立後のウズベキスタンは移民輩出国となり、ウズベキスタンからの移民の主な行先は文化的に馴染みがあり、同国でも広く使われるロシア語が通用するロシアやカザフスタンであった。ウズベキスタンからの移民にとって、日本は地理的にも心理的にも遠い「海外」として認識されており、文化的および言語的な違いも日本社会と日本の労働市場への浸透の障壁となっていた。しかし、近年の傾向から判断すると日本は、雇用、教育、専門能力開発、そしてより高い生活水準を追求するウズベキスタンからの移民の目的地になりつつある。在日外国人は、人数においては中国人、ベトナム人やフィリピン人などが圧倒的多数をしめている。しかし、在日ウズベキスタン人の全体数は少ないものの、その伸び率は近年加速しており、90日未満の短期滞在を除く、中・長期滞在者数は、1994年の20人から2020年現在4000人にまで増加している。地理的に離れ、文化的に異なっている中央アジアのウズベキスタン人が移民先として日本を選ぶ理由はどのようなものなのか。彼らが日本に移り住む動機と手段はいかなるものなのか。日本においてどのような状況に置かれ、日本社会をどのように理解し、自身の文化、宗教やその他の価値観と日本のそれとをどのように適合させているのか。ウズベキスタン社会の担い手たちが、今後ウズベキスタン本国の社会的変化にどうかかわっていくのか。

本報告は2023年6月に刊行された『ウズベク移民と日本社会』（東京大学出版会）の内容を紹介し、これらの問いに答えることを試みた。本書は在日ウズベキスタン人を日本へのニューカマーの最新例として扱い、彼らに対するインタビュー調査を通して、日本から離れ、文化や価値観の面では異なる移民の眼にうつる日本社会の魅力と、彼らの日本選択の理由を明らかにすることを目的とした。

在日外国人を扱う先行研究において、日系人、留学生の適応慣行、および留学生の日本社会統合過程などの研究は多いが、これらは日本の経済成長期（1955–1975）に日本に到着した「古い」移民を対象にした研究か、日本における欧米からの移民と学生の経験に焦点を当てた研究である。それに加え、歴史的に日本とつながりを持ってきた韓国人、中国人などの労働市場への参入を明らかにした研究もある。

しかし、本報告で紹介した研究は、ほとんど研究の対象となつてこなかった、日本への「新参者」のグループを代表するウズベキスタン人による日本での滞在に焦点を当てることで、日本への移住者が、歴史的に日本とのつながりが深い地域から、距離的に離れ、日本に馴染みがない中央アジアのウズベキスタンへと拡大していく傾向を分析する。

本書が取り上げるおもな問いは以下の3つである。第一に、日本に移住するウズベキスタン人が自身の移住をどのように解釈し、日本社会における生活を自身のこれまでとこれからの生活の中にどのように位置付けているのか。第二に、多くの選択肢がある中で、彼らは移住先としての日本という選択にどのような意味を持たせているのか。そして第三に、彼らは日本滞在中における自身のアイデンティティと日本社会ないし日本人のアイデンティティをどのように理解し、自民族の価値観と日本の社会的な規範をどのように受け止めているのか。

これらの問いに答えることによって、本書はウズベキスタン人の日本滞在中の2つの側面を明らかにした。第1の側面は、グローバルな移民の文脈における小規模な民族グループの流動性である。彼らの経験を調査し、受入国での滞在中の目的を探り、滞在中から移民への移行過程を解明した。第2の側面は、前大統領であるイスラム・カリモフの死去後、変わりつつある彼らの送出国であるウズベキスタンに対する彼らの認識と期待を明らかにした。

在日ウズベキスタン人に対するインタビューの実施と分析を通じて、本書は次の2つの議論を展開する。まず、在日ウズベキスタン人が他のディアスポラ移住者と同様に、恒久的な定住、または少なくとも長期滞在を求めているという信念を持っているのか否かを検証した。もし持っていないのであれば、在日ウズベキスタン人は同時に自国と受入社会である日本の両方の居住者として自分自身を位置付けているのかを調査した。

上述した在日ウズベキスタン人が、日本での長期的な定住を望んでいるという予想に反し、日本での滞在を一時的なものとして扱っている場合、彼らにとっての日本での「一時的な」滞在の意味合いを、インタビューを通じて明らかにするよう努めた。

第二に、本書は在日ウズベキスタン人が日々日本人にどのように接し、その接し方が彼らの「ウズベクチック」(ウズベキスタン人らしさ)というアイデンティティにどのように影響したのかを分析する。とくに彼らから見る「日本人論」が、自分たちのウズベキスタン人としてのアイデンティティの理解を深める手段になるのかを検証した。そして、在日ウズベキスタン人は日本における「滞在」をイスラームにおける「ムソフィール」(異国を遍歴するムスリム)として、いかに説明しようとしているのかを明らかにした。

(筑波大学人文社会系)

中央アジアの心象地図と日本 — 2018 年アジア学生調査の結果から —

園田 茂人

近年、国際政治や国際関係で果たす「感情」や「認識」の問題に焦点があてられるようになってきている。特に 21 世紀になってからは、世界各地で対外認識に関する大規模な世論調査が実施されるようになったこともあり、様々な分析がなされるようになってきている。

中央アジアもその例外でない。日本でも 2014 年から外務省による「中央アジアにおける対日世論調査」が実施され、中央アジアにおける対日認識が継続的に調査されている。ところが、その質問の多くが日本 (人) のみに焦点が当てられ、人びとの心象地図の特徴、及びそこで日本の位置づけを明らかにしているとは言いがたい。そこで本報告では、報告者が筑波大学や東京大学で博士号を取得した中央アジア出身者の協力を得て、ウズベキスタンとカザフスタンの大学で学ぶ、それぞれ約 400 名の学部学生を対象に行った調査 (2018 年アジア学生調査) のデータを用い、その心象地図の分析を試みる。

心象地図といっても、どのようにしてこれを実体化するかをめぐって、社会心理学者や地域研究者、国際政治学者の間で合意が得られているわけではなく、対外認識に関して調査データを集めてきた研究機関もアドホックに調査項目を定めてきた。そこで本報告では暫定的に、回答者である学生たちが判断する国ぐにとの距離を測定し、そこから類推される心象地図の特徴を論じることにしたい。報告における国ぐにとの距離は、「自国に対する影響をどう評価するか」や「自国にとって経済発展のモデルとなるところはどこか」といったマクロなレベルと、「どの国の言語を習得しているか／将来、自分の子どもに習得させたいか」や「どの国に留学したいか」「どの国の企業で働きたいか」といったミクロなレベルとで把握されている。

アジア学生調査の結果からは、現実的にはロシア語圏との強い結びつきが意識されているものの、将来の望ましい姿を英語圏 (とりわけ英米) に見ているといった傾向を顕著に見てとることができる。

たとえば、自国に対する影響という点で最も肯定的に評価されたのがロシアであるが、そのスコアは 2005 年のアジアバロメーター調査の結果と比べると、明らかに低下している。他方で、2005 年のアジアバロメーター調査ではさほど高い評価を得られていなかった日本や中国、韓国、米国といった国ぐにの影響は、相対的に高くなっており、特に米国の評価は

急速に高まっている。また「自国とについて経済発展のモデルとなる国はどこか」という問いに対しては、米国という回答が全体の3割近くを占め、ウズベキスタンでは中国(13.7%)、カザフスタンでは日本(17.3%)が、それぞれ第二位を占めている。

似た傾向は言語習得についても言える。自らの言語能力についての自己判断では、ウズベキスタン、カザフスタンともにロシア語が最も流暢であり、英語がこれに次いでいる。それ以外の欧米言語(フランス語、ドイツ語、スペイン語)やアジア言語(中国語、日本語、韓国語)については、実際にできる者の割合は少ないものの、自分の子供に習得してほしいかどうかを聞くと、相当数が肯定的な回答をしている。もっとも、比率で言えば、英語への期待が最も多く、次にロシア語となっている。

他方で、学生の利益に直接関係する留学や就職に関しては、圧倒的に英語圏への評価が高い。英米が希望する留学先を二分し、日本や韓国、シンガポールといったアジア圏はその次のグループを形成する。タジキスタンやキルギスタン、アフガニスタンといった近隣国への留学を希望する者はほとんどいない。また、希望する就職先は、ウズベキスタン、カザフスタンともに自国の企業／組織だったが、その割合はそれぞれ25.4%、36.5%と過半数を占めるに至っていない。アメリカ企業やヨーロッパ企業を希望する者も少なくなく、日本企業や韓国企業での就職を希望する者も、それぞれ5%程度を占めている。ウズベキスタンではロシア企業を希望する者が5%弱いるが、これもアメリカ企業の21.3%に遠く及ばない。

このように、中央アジアの若い世代は英語圏に自国や自分自身の将来を見ており、日本と韓国はその次のレイヤーに属する国として位置づけられている。こうした特徴は、ダダバエフ氏が紹介した日本のウズベク移民にも見て取ることができるが、詳細は『ウズベク移民と日本社会』(2023年、東京大学出版会)を参照されたい。

最後に、内閣府が実施してきた「外交に関する世論調査」の結果を眺めると、2004年から2021年にかけて、日本人で中央アジア・コーカサスに親近感を持つ者の割合は頭打ちで、その距離感が全く縮まっていないことがわかる。どうも日本と中央アジアでは、その相互認識は非対称的なようだが、今後この点に関する詳細な研究・検討が望まれる。

(東京大学東洋文化研究所)

中央ユーラシアの新たなコネクティビティ

— The Middle Corridor —

篠原 建仁

Middle Corridor (日本側通称：カスピ海ルート／以下 MC) は、中央アジアのカザフスタンからカスピ海を横断し、コーカサスのアゼルバイジャンとジョージアを経て黒海あるいはトルコ経由で欧州へ繋がる、東西輸送ルートである (図1 参照)。

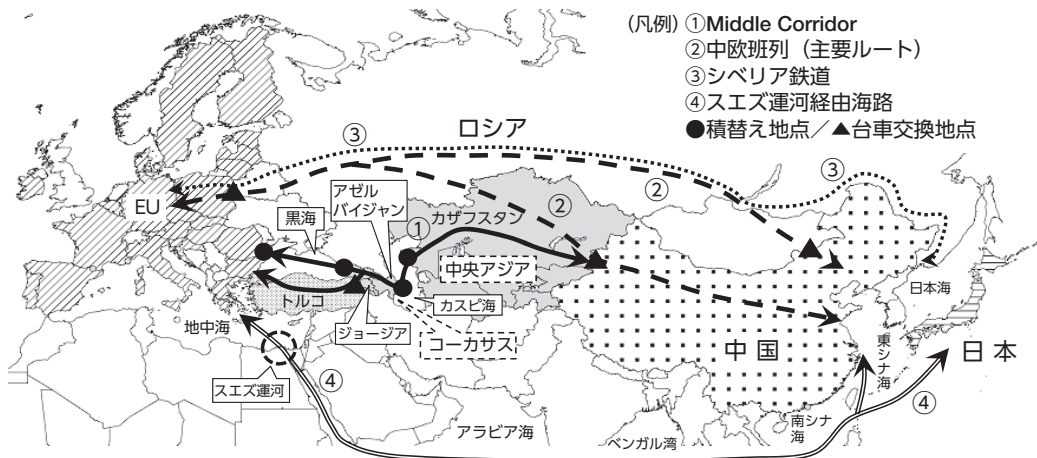


図1 ユーラシアの東西主要輸送ルート

Created with mapchart.net / 出所：諸資料を基に発表者作成

MCの主な特徴は、①鉄道等の陸上輸送とカスピ海の海上輸送からなる複合輸送で、少なくともカザフスタン、アゼルバイジャン及びジョージアの3ヶ国とカスピ海を経由する、②ロシアを経由しない、③欧州・中国間の海路や中国からカザフスタン、ロシア等を経由して欧州に向かう鉄道などの主要ルートに比べ、輸送能力が小さいことである。鉄道／トラック⇄船への積み替え、国境での通関手続き、線路幅の違いから必要となる貨物の積み替えなどが必要となり、それらは何れも輸送費用と輸送時間の増加に繋がる。

旧ソ連時代から存在したルートだが、数度の積み替えによるコストや所用時間増、アジアと欧州を結ぶ海上輸送路に比べ小さい輸送能力もあり、あまり利用されなかった。しかし、

2020年の海上運賃高騰で代替輸送ルートとして、更に2022年のロシアによるウクライナ侵攻により欧州と東アジアを結ぶロシア迂回輸送ルートとして脚光を浴びた。

特にEUは中央アジア、特にカザフスタンで豊富に存在する石油や天然ガスと言ったエネルギー資源のみならず、クロムやモリブデン、銅などのレアメタルに注目し、それらを欧州へロシアを経由せずに輸送するルートとしてMC実現に強い関心を示し始めた。

EUは日本に比べ、貿易面でも中央アジアやコーカサス諸国と近い関係にある。2022年に限り、EUは中央アジアにとって最大の輸出先、3位の輸入先(日本は何れも9位)であり、コーカサスにとっても1位の輸出先、2位の輸入先(同10位以下、7位)である。両地域のEU向け輸出の多くは、現時点で石油および同製品や天然ガスである。

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻後、ロシアの資源からの脱却を目指すEUは、MC実現に向けた動きを加速させた。同年には、ミシェル大統領やフォンデアライエン欧州委員会(EUの内閣に相当)委員長(EU首相に相当)を含むEU高官が相次いで両地域を訪れ、MCへの支援に言及した。

2023年6月、欧州委員会は中央アジアを対象にしたMCに関する報告書を公表した⁽¹⁾。同報告書は、中央アジアとEUを結ぶ最適ルートとして、カザフスタン南部とウズベキスタンの人口が多い地域からカスピ海に向かって南北に300～600Kmの幅を持たせたエリアを、“Central Trans-Caspian Network (CTCN)”と位置づけ、CTCN内の鉄道や道路の改修、貨車増強、港湾拡張や国境通過点の改善に関する33のハードインフラ、7のソフトインフラプロジェクト(総額185億ユーロ)の実施を推奨すると共に、当該地域の輸送インフラ全体を管轄する運営組織の設立と言ったソフト面の対応がより重要とも指摘した。

2023年9月にはドイツと中央アジア5ヶ国の初の首脳会議で、6ヶ国はEUのインフラ投資戦略「グローバル・ゲートウェイ⁽²⁾」のイニシアティブの下で、MCの開発とそれに必要な資金調達を行うことに強い関心を確認した⁽³⁾。同年11月には、世銀がカザフスタン、アゼルバイジャン及びジョージア3ヶ国のみを対象としたMCに関する報告書を発表した⁽⁴⁾。

(1) “Study on Sustainable transport connections between Europe and Central Asia”, *European Commission*, URL: https://transport.ec.europa.eu/transport-themes/international-relations/study-sustainable-transport-connections-central-asia_en, 閲覧年月日: 2023年6月30日

(2) グローバル・ゲートウェイ(Global Gateway)——2021年12月にEUが発表した、発展途上国のインフラなどへの投資を増強するための新戦略。エネルギーなどのハード面から、保健・教育などのソフト面までの広範な分野へ、2027年までに約3,000億ユーロを投資する。

(3) “Joint Declaration by Heads of State of Central Asia and the Federal Chancellor of Germany”, *Bundesregierung*, URL: <https://www.bundesregierung.de/resource/blob/998352/2226656/45f64011ff425e6db0dab0c60ff50310/2023-09-29-z5-erklaerung-en-data.pdf>, 閲覧年月日: 2023年9月29日

(4) “Middle Trade and Transport Corridor – Policies and Investments to triple Freight Volumes and Halve Travel Time by 2030”, *The World Bank*, URL: <https://www.worldbank.org/en/region/eca/publication/middle-trade-and-transport-corridor> 閲覧年月日: 2023年11月27日

MCが上記3ヶ国間の貿易拡大にも貢献する地域の「経済回廊」になるとして、今後資源輸出等の伸びが予想されるカザフスタンを、MCの最大の受益者と位置付けた。一方でMCのボトルネックとして、カスピ海海上輸送力の不足、カスピ海及び黒海沿岸港の貨物取扱能力の不足、鉄道、カスピ海の水位低下等を挙げた。

2024年1月にはEUがMCへの投資フォーラムを開催し、MC整備に100億ユーロを投資する旨をコミットしたことで⁽⁵⁾、このルートの実現に向けた強い意思を内外に示したのみならず、MCの当事者として主体的に動き始めた。MCの持つ様々な課題がどこまで解決するかはこれから見ていく必要があるが、EUによるルート整備が実現すれば、ルート通過国の経済発展に貢献するのみならず、通過地域で活動する日系企業もこのルート利用を通じ、ビジネス拡大に繋がる可能性もある。

(株式会社INPEXソリューションズ 調査事業部(現独立行政法人 国立印刷局))

⁽⁵⁾ “Global Gateway: €10 billion commitment to invest in Trans Caspian Transport Corridor connecting Europe and Central Asia announced at Investors Forum”, *European Commission*, URL: https://ec.europa.eu/commission/presscorner/detail/en/ip_24_501, 閲覧年月日: 2024年1月29日

ウズベキスタンにおける高等教育の国際化と日本

宗野 ふもと

本発表では、ウズベキスタンのサマルカンド市にあるシルクロード国際観光文化遺産大学(以下「シルクロード大学」と表記)を事例として、ウズベキスタンの高等教育機関における国際化と日本の位置づけを考察した。シルクロード大学は、2018年の上海協力機構青島サミットでのミルズィヨエフ大統領による呼びかけにより、加盟国間の教育分野における協力や観光分野における専門家養成を目的として設立された大学である。

ウズベキスタンの高等教育の国際化の目的は、カリモフ時代とミルズィヨエフ時代で異なる。カリモフ時代(1991～2016年)には、主な目的はエリート育成にあり、先進国の大学への若者の派遣や国外大学の分校設立が主な取り組みであった。2016年末にミルズィヨエフが大統領に就任して以降、高等教育の国際化は、教育の質向上を目的として推進されるようになった。2019年に発令された大統領令「ウズベキスタン共和国の高等教育制度を2030年までに発展させる構想に対する支援」では、単位互換制への移行、世界大学ランキング上位1000位へのランクイン、国際交流促進などの国際化の取り組みが高等教育の発展にとって重要だとみなされている。これを受けて、国内の大学では国際化の取り組みが急速に行われるようになった。

ウズベキスタンにおける高等教育の国際化とは、欧米発の教育システムを受け入れることであり、その進展や評価に注目が集まってきた。しかし、現在の国際化は、東南アジア、トルコ、中東、中国、ロシア及び中央アジア諸国など多くの国の影響や関係の中で進展している。以上を踏まえて、本発表では、①ウズベキスタンの高等教育機関の現場において国際化はいかに進められているか、②国際化において日本はどのような位置づけにあるのかという点を、インタビュー調査で得た情報を紹介したうえで考察をおこなった。

以下では、シルクロード大学における国際化の実態を、2019年の大統領令で言及された、単位互換制への移行、世界大学ランキング上位1000以内へのランクイン、国際交流促進に着目して紹介した。

単位互換制について、単位制へ移行途上である大学が多い中、シルクロード大学ではすでに単位制が導入されている。単位制導入の目的は、学生が専門や興味をより深め、留学しやすくすることにある。世界大学ランキングについて、授業の多くを英語で行うこと、教員に

論文や著書の出版を強く推奨すること、留学生や外国人教員を受け入れることで、国際化の点で高得点を獲得し順位を上げようとしている。国際交流促進について、外国人教員や留学生の受け入れ、学生への留学やインターン先の紹介、大学間協定の締結推進など多くの取り組みを行う。大学間協定について、2023年6月時点で、国外81大学と協定を結んでいる。最多はインドネシア、続いて中国、ロシア、トルコの大学である。

シルクロード大学は、英語での授業、単位制の導入などを行っていることから、欧米発の教育評価システムを重視していることがわかる。しかし、国際交流に目を向けると、上海協力機構加盟国やイスラーム圏との組織的人的交流が盛んに行われている。興味深いのは、中国の強い影響下にあるかと思いきや、実際には他の国々とも関係を構築し国際交流を進めている点である。

それでは、日本はシルクロード大学の国際化においてどのような位置づけにあるのか。非欧米圏、非上海協力機構加盟国、非イスラーム圏の日本だが、日本での留学経験を持つ現学長は、日本との協力関係構築を強く望んでいる。日本からの教員や学生の受け入れや組織間関係の形成は、シルクロード大学の重要な課題である。学生の間でも日本への留学や就労への関心は高まっているという。また、追加調査は必要だが、国外移住を考える人々の間では、日本で留学や就労した人は、ウズベキスタンに戻ったのちに成功しやすいという認識があることも見えてきた。とはいえ、日本との関係強化が順調に進んでいるとはいえない。ウズベキスタンに対する日本側の消極的姿勢や、両国では仕事の進め方が異なっているために計画が実現しにくいという問題を抱える。

本発表を通して、シルクロード大学は、欧米発の世界基準の教育システムへの適応を目指しつつ、中国などの上海協力機構加盟国との組織的人的交流や、インドネシアなどのイスラーム圏との交流を行い、多元的な国際化を推進していることが明らかとなった。日本は、シルクロード大学の国際化にとって重要な欧米圏、上海協力機構加盟国、イスラーム圏ではないが、学長の強い意向の下に交流が行われている。日本への期待は強いが、個人的な経験や意向が重要で組織的後押しは弱いという点が、現時点でのウズベキスタンの高等教育国際化におけるウズベキスタンと日本との関係形成の特徴であるといえよう。

(シルクロード国際観光文化遺産大学(現筑波大学人文社会系))

書 評

磯貝真澄・帯谷知可(編)
『中央ユーラシアの女性・結婚・家庭——歴史から現在をみる——』
アジア環太平洋研究叢書・第6巻、東京：国際書院、2023年、287頁

塩野崎 信也

ある社会に特有の文化や制度を研究する際に、その基本的な構成単位である「家族」が重要な考察対象となることは、今更言うまでもないだろう。本書は、中央ユーラシアを対象地域として、家族に関連する3つの要素、すなわち女性・結婚・家庭に焦点を当てた論集である。編者の1人である磯貝真澄氏が「序 中央ユーラシアの女性・結婚・家庭：歴史から現在をながめる試み」において指摘するように、中央ユーラシアにおけるこれらの研究は、他地域と比較して進展しているとはいいがたい現状にある。本書は、歴史学と文化人類学の学際的研究によって、その空白を埋めようとする。磯貝氏は、まず、本書を構成する5つの論考と1つの資料紹介の内容を端的に紹介した上で、本書が単に共通のテーマを持つ論文の集合ではなく、各章で明らかにされる個別の事例の類似点・共通点をもたらした交流や人的紐帯をあぶり出し、「より広域で生じた事象を動態的に展望するための考察材料を提示する」(14頁)としている。特にこの作業を担っているのが、第1章から第3章である。

帯谷知可氏による「第1章 忘却の彼方のムスリム女性解放論——オリガ・レベヂェヴァを読み解く——」は、世紀転換期のロシア帝国における「イスラーム的男女平等論」の主張者の1人、オリガ・レベヂェヴァ(1854–1912以降)に焦点を当てる。帯谷氏は、様々な言語に通じた翻訳者・東洋学者として活躍したこのロシア人女性の小作品『ムスリム女性の解放について』の内容を端的にまとめた上で、イスラームは本質的に男女平等を妨げない、とする彼女の主張を読者に提示する。彼女の思想については現代的な視点に基づく様々な批判がありうることも明かされるが、帯谷氏は作品の内容の分析やその評価には敢えて大きくは踏み込まない。

むしろ本章の考察の骨子となるのは、レベヂェヴァの思想が形成された背景、すなわち、同時代人との交流や影響関係についてである。その分析から明らかになるのは、レベヂェヴァには当時のロシアあるいはヨーロッパにおけるラディカルなフェミニストたちとの結び付きがほぼ見られないこと、レベヂェヴァを軸として浮上する人々がオスマン帝国、エジプト、英領インド、南カフカースにまたがるイスラーム的男女平等論の「水平的な広がり」におけ

る結節点であり、彼らを起点とした「垂直的」な思想の継承関係が想定できること、そしてレベヂェヴァとその作品はそれらを接続する「ハブの機能を果たしていた」(42頁)ことである。

没年すらも明らかではなく、現代においてはほぼ忘れ去られた人物であるところのレベヂェヴァが、実は各地の男女平等論を結びつける重要な位置付けにあったという指摘は非常に興味深いし、今後のこの分野の研究に広く資する見解であると評価できる。一方で、イスラーム的男女平等論の「水平的な広がり」とは具体的に何なのか、評者には理解が難しかった。この言葉が、友人関係のような相互的で密接な人的紐帯のみならず、著作の中での引用などといった思想的な影響関係をも含む、様々な要素の曖昧な総体を指して用いられているからであろう。それ故に、「ハブの機能を果たしていた」というレベヂェヴァの評価も、曖昧で抽象的なものに留まっているという印象を受けた。この点を明瞭にしていれば、本論考の価値はさらに高まっていただろう。

続く「第2章 近代オスマン帝国における女性作家の誕生——ファトマ・アリエとハイブリッドな評伝の虚実——」の主人公は、オスマン帝国における最初期の女性作家、ファトマ・アリエ(1862-1936)である。本章の著者である佐々木紳氏は、アリエと「心の父娘関係」にあったアフメト・ミドハトによる評伝『ファトマ・アリエ女史、あるいはオスマン人女性作家の誕生』を取り上げ、まずは同書から家族や性差をめぐる規範意識を抽出する。さらには、史料に「書かれなかったこと」という、歴史学が最も苦手とするテーマに敢えて挑む。

佐々木氏によると、『ファトマ・アリエ女史』は、アフメト・ミドハトがアリエ本人からの手紙を大幅に引用しながら解説や評価を加えた「ハイブリットな評伝」である。その性質故に、この作品には「2人のファトマ・アリエ」を見いだすことができると言う。すなわち、アフメト・ミドハトが夢想した虚像としての彼女と、実像としての彼女自身である。より正確には、後者もまた実像ではなく、ファトマ・アリエ自身が思い描いた「あるべき自分」という虚像ということになるだろうが、いずれにせよ佐々木氏は、この「2人のアリエ」の齟齬に着目しつつ、「書かれなかったこと」を探っていく。特に注目されているのが、第1章の主人公レベヂェヴァとの交際である。レベヂェヴァはアフメト・ミドハトと少なくとも一時期は親密な交流を持った人物であり、彼を通じてアリエはレベヂェヴァと知り合った。そして、両者の交際を制限しようとするアフメト・ミドハトの意向に反し、2人の女性が自立的な交友関係を築いていたという「書かれなかった」事実を、佐々木氏は見事に復元してみせた。

ただ、人的紐帯の分析を重要視する本書の方向性に鑑みると、女性同士の交流を制御しようとしたのがアフメト・ミドハトの個性によるものなのか、それとも当時の規範意識に基づくものなのか、何らかの見解を示すべきであったように思う。また、非常に細かい点になるが、『ファトマ・アリエ女史』が出版された「1311年」がヒジュラ暦ではなくルーミー暦と

考えられることは、脚注ではなく本文で示すべきであっただろう(73-74頁、98頁注10)。この単純明快でおそらく妥当であろう結論が明記されていないために、本文の説明が非常に分りにくくなってしまっている点は、もったいなかった。

磯貝真澄氏による「第3章 ロシア帝国末期ヴォルガ・ウラル地域のムスリム知識人とイスラーム宗務行政——ムスリム家族規範論からみえる結びつき——」が扱うのは、ヴォルガ・ウラル地域の改革派ウラマー、リザエッディン・ブン・ファフレッディン(1858-1936)の家族や女性に関する思想である。彼は帝国の宗務行政機関たるオレンブルグ・ムスリム宗務協議会の協議員(カーディー)でもあった人物で、女性の読者を想定した作品も多く執筆した。しかし、先の2つの章と同様、磯貝氏が重視するのも、作品の内容そのものではなく、その背景に見られる人的紐帯である。

まず、宗務協議会の協議長(ムフティー)であるスルタノフとの関係が取り上げられる。磯貝氏はスルタノフの訓示の内容とリザエッディンの執筆活動とを比較し、彼らが問題関心や論理をかなりの程度共有していたことを明らかにする。また、彼らが『人間関係の作法』という女性向けの書物の公刊事業において協力をしていたことも示される。そして、協議長と協議員という「タテ」の関係を通じて構築された家族や女性の規範論が、ガスプリンスキーらとの友人関係に基づいて「ヨコ」へと広がっていく——磯貝氏自身の言葉を借りれば『「ナナメ」に倒れ込んでいく」(105頁)——過程が、本章においては重点的に扱われる。また、章の後半では、リザエッディンがアフメト・ミドハトやファトマ・アリエらオスマン論壇をはじめとするロシア国外の刊行物を参照していたことが示され、前章との関連性が提示されている。

示唆に富んだ本章であるが、とりわけ、ロシア帝国において「聖職者」と定義されたウラマーが家族の問題に関わることを当然視する環境は帝国の宗教行政そのものを背景としているという指摘は、このテーマの根幹に関わる非常に重要なものである。また、リザエッディンの作品の中には匿名で発表されたものもあれば、実名を掲げてカーディーとしての自身を押し出す形で刊行された作品もあるという事実も、興味深かった。

一方で、評者からの要望も、いくつか示しておきたい。例えば、『人間関係の作法』からの引用中で *ma'rifat* を「教育」と訳している箇所がある(114頁)。訳語の選択そのものに異論があるわけではないが、*ma'rifat* という語が持つ多様で複雑な意味合いを考えると、この箇所の含意について、より詳しい解説が欲しいところである。また、同書に関する解説の中で、バスマラが付されているから「まちがいでなく読者はこれを宗教的な書物だと認識しただろう」(135頁注18)とする見解が示されているが、この箇所にはより細やかな論理展開が必要であっただろう。確かにバスマラは宗教的な文句ではあるのだが、一方で、様々な文章の冒頭に、その内容に関わりなく付されるものでもある。当時のこの地域におけるバスマラの用法

について、いま一步踏み込んだ説明が欲しかった。

さて、19世紀後半から20世紀初頭における事例を歴史学的手法を用いて分析したこれまでの3章とは異なり、残りの2つの章は、主に文化人類学的な手法を用いて現代の事例を明らかにする。

「第4章 社会問題としてのトイ(祝宴)——ウズベキスタン、ミルジヨエフ大統領によるトイ規制法——」が扱うのは、現代ウズベキスタンにおけるトイに関する議論であるが、著者の菊田悠氏は、まずこの問題が100年余りにわたって論争の種となっていたことを示す。ジャディード知識人、共産主義者、民族共和国における政治家や宗教者という異なる背景を持つ人々が、繰り返し過剰なトイを批判してきたが、それにもかかわらず人々は過剰なトイを継続してきた。そして、その論争の流れの最新の事例であるミルジヨエフ大統領の演説と彼の意向を強く反映した上院決議およびトイ規制法が、本章の考察対象となる。

さて、ウズベキスタンの独立直後、ナショナリズムと結びつく形でトイは肯定的にとらえられてきたが、その潮目が変わり始めたのは、カリモフ前大統領時代の1998年頃からのことであるとのことだ。ミルジヨエフ大統領の政策は一見その流れの延長のように見えるが、菊田氏によると、実はそうではない。カリモフ時代、あるいはそれに先行するソヴィエト時代、トイは前時代的なものとして否定されたが、ミルジヨエフはトイを民族的伝統として評価し、むしろその本来あるべき姿への回帰を主張していると言うのである。

ウズベキスタンの現政権が過剰なトイを社会問題として認識していること、そしてトイに含まれる様々な要素のうち、政権にとって許容しがたい部分を「悪い習慣」、許容できる、あるいは許容せざるをえない部分を「民族的伝統」として峻別しようとする現政権の論理は非常に面白い。また、現実に対する政権側の妥協の産物として、明らかに「民族的伝統」ではないにもかかわらず何故か許容された要素が存在することも、興味深かった。

全体的に明快な論考であったが、敢えて細かい指摘も1つだけしておきたい。それは、タシュケント市長の対トイ政策を批判して大統領が述べた「[前略……]こんな友人より敵の方がましだろう。ウスマノフが市長であれば、私に他の敵は不要だ」という言葉が引用されている箇所についてである(146頁)。ここは、ウスマノフが件の市長の名であることが前後で明示されておらず、引用文の言い回しが少々分かりにくいこともあり、理解が難しかった。

藤本透子氏による「第5章 結婚をめぐる交渉——中央ユーラシア草原地帯におけるカザフ社会の変容——」は、評者にとって最も興味深い章であった。それは、評者がロシア帝政期における南コーカサスのムスリム居住地域(現在のアゼルバイジャン共和国)の離婚裁判を最近の研究テーマとしているからでもある。評者の扱っている離婚裁判においても、本章のテーマの1つである「誘拐婚」とみなされる事件が非常に多く記録されているのだが、その様相は、本章で示された現代カザフ社会におけるものとは若干異なる。

本章の解説によると、カザフ社会における結婚は、親同士が子どもの結婚を決める「コルナン・アルウ」、すなわち「縁組」と、女性の親の許可を得ずして男性が女性を連れ去って結婚する「アルップ・カシュ」の2つに区分される。「アルップ・カシュ」は、女性の事前の同意を得ない「誘拐婚」にあたる事例と、女性が事前に知って同意している「駆落ち」にあたる事例とが混在するため、本章においては「誘拐婚／駆落ち」と訳されている。この2つの婚姻形態は、20世紀初頭までは「縁組」が基本で、例外的なケースとして「誘拐婚／駆落ち」が存在していた。しかし、ソ連時代になると、本人の意思が重視されるようになったことで「縁組」の形骸化が起り、さらには「誘拐婚／駆落ち」の一般化が生じた。なお、ここで「本人」として想定されているのは、主に男性である。それ故に、女性の同意を得ない字義通りの「誘拐婚」が増加することとなり、近年になってそれが人権問題化した結果、再び形式的な「縁組」が主流化しつつあると言う。

藤本氏が示すように「誘拐婚」と「駆落ち」の境界は時に曖昧であるが、ここで指摘しておきたいのは、「縁組」と「誘拐婚」の境界もまた曖昧さをはらんでいるという点である。本章181頁で提示されている一部の事例、すなわち、女性の両親の合意を事前に得た上での形式的な「誘拐婚／駆落ち」があったことは、これを示唆しているだろう。そして、実のところ、19世紀後半の南コーカサスにおいては、女性本人の合意無き「縁組」による結婚が、後に女性本人の訴えによって「誘拐」として事件化された例が多数存在しているのである。これは、当時の南コーカサスにおける「誘拐婚」が、女性の両親と男性側による「縁組」に基づく形式的なものであった可能性を示すものと評者は理解している。そして、「駆落ち」に該当する事例は、女性が自身の意思でこの「縁組／誘拐婚」から逃れる手段として現れる。

すなわち、現代のカザフスタンでは、まず両親らの意思に基づいて「縁組」と「誘拐婚／駆落ち」の区別がなされるが、19世紀後半の南コーカサスでは、まず女性の意思の有無に基づいて「駆落ち」と「縁組／誘拐婚」が区別されていた、ということになる。この違いが結婚に関わる当事者と裁判所という視点の違いによるものなのか、地域や時代の違いによるものなのか、あるいは評者の知る事例が裁判に至った極端なものであるからなのかは、今のところ分からない。ただ、カザフ社会においても、結婚をめぐる交渉の焦点が女性の親の許可の有無から女性本人の意思へと移行しているとの藤本氏の指摘は、この件を考える重要な手がかりになるだろう。

本書の末尾には、宗野ふもと氏による「資料紹介 ウズベキスタンの女性雑誌『サオダト』（幸福）——1972～1974年の記事目録——」が収録されている。これは、1925年に創刊されて以降、誌名を変えながら現在まで発行が続いている女性誌『サオダト』の3年間、36号分の掲載記事の目録である。資料の整理・分類すら十分に進展していないこの分野の研究状況を考えると、これは今後の分析の手がかりとなり、研究の進展に資するものとなりえよう。

本目録では、記事の題名が列挙され、「論説」「文学」のような大雑把な分類が示されている。この形式は、生田真澄「タタル知識人による女性向け雑誌『スユム・ビケ Sūyum Bika』(カザン、1913–1917) 目録」(『アジア・アフリカ言語文化研究』65号、2013年、149–180頁)に準拠したとのことである。ただ、当該先行研究と比べると、目録としての情報量、あるいは有用性には差があるように見受けられる。何よりも、『スユム・ビケ』の目録を眺めた際に感じた面白さが、こちらからはあまり感じられなかった。それは『スユム・ビケ』の論説のタイトルが「シャリーアの前における婦女子」、「子どもの養育」、「化粧の起源」のように内容がある程度想像できるものが大半であるのに対し、『サオダト』のそれは「[私たちの考えから一つ] 時間」、「偉大な歩み」、「事実と数字」のように抽象的で分かりにくいものが多いからであろう。もちろん、このこと自体は宗野氏の責任ではないが、一方で目録の形式があまり適切ではなかったのも確かだろう。例えば、記事の内容の概略を示すか、内容に基づいたより細かい分類を行っていたら、より良い目録になったのではないか。いずれにせよ、本目録を作成するにあたって得られたであろう様々な情報を用いた今後の研究の進展を期待したい。

さて、全体的に質の高い論考から構成される本書であるが、歴史学の手法に基づいた前半の3章と、文化人類学の手法を土台とする後半の2章との間の断絶は気になるところである。この点に関しては編者自身も自覚的で、特に前半の3章には「人類学者との共同作業の痕跡が直接には見えづらいかもしれない」(15頁)、とも述べている。やはり、全体的なまとめにあたる章があった方が良かったように思う。「序」において磯貝氏が各章の内容に対する非常に示唆に富む指摘をいくつもしていることを考えると、これらの内容を発展させ、さらには全体を統合する考察を加える形で「終章」として提示していたら、本書の価値はさらに高まっただろう。

また、前半3つの章の配置も悩ましいところである。確かにレベヂェヴァ、アリイエ、リザエッディンの3者の交流・影響関係を考えると、本書が採った配置が最も適切であることに評者も異論はない。ただ、3つの章の間で一部の説明が前後したり重複したりしており、正直読みにくい。例えば、歴史的事実に関する独立の章を設けるか、あるいは特に内容が密接に相関する第1章と第2章は共著という形で統合しても良かったのではないか。

これらが多かれ少なかれ無茶な要求であることは、評者も理解している。ただ、全体的な用語法や考察の枠組みは、ある程度の統一がなされるべきであっただろう。例えば、レベヂェヴァは、第2章においては彼女のオスマン語の筆名に基づいて主に「ギュルナル」と呼ばれている。史料中にこの呼称が頻出するためという理由も説明されてはいるが、やはり地の文においては呼び名を統一した方が読みやすかっただろう。また、人的紐帯の分類にあたって、帯谷氏は直接的な思想の継承を「垂直」の関係、地域的な広がりを「水平」の関係と設定するが、

一方で磯貝氏は立場の上下をとまなう関係を「タテ」、そうではないものを「ヨコ」としている。人間関係の分析という同一の枠組みにおいて、異なる概念に同じような言葉が用いられており、少々混乱した。後半の2章において示されるジャディード知識人や近代カザフ知識人にさかのぼる思想上の系譜が帯谷氏の言う「垂直」の関係と理解しうることを考えると、帯谷氏の用いた概念をさらに明確に定義した上で本書全体に敷衍し、各章を通貫する概念として用いるのも選択肢であっただろう。そうすることで、磯貝氏が用いた概念も、より整然と理解することができたのではないだろうか。

このように、より良くなる余地がいくつかある本書であるが、その目的、すなわち、中央ユーラシアのみならず、より広い地域における女性・結婚・家庭に関するさらなる研究へと「考察材料を提示」することは、十分になされているものと評者は考える。また、本書が現代的なフェミニズムや文明論の価値判断に基づいた批判の類から注意深く距離を保っている点も、歴史学あるいは文化人類学の研究書として高く評価すべきところである。本書は、今後この分野の研究を行おうとする者の必読の書となるだろう。

(龍谷大学文学部)

ナウルーズの祭典における地区展示 —— ウズベキスタン・スルハンダリア州の事例 ——

志田 夏美

はじめに

筆者は、ウズベキスタンに暮らす遊牧的伝統を保持する人々——ウズベク牧畜民——に関心をもっており、スルハンダリア州ボイスン郡にてフィールドワークをおこなっている。ここでは現在も家内工業による絨毯織りがおこなわれているからである。絨毯は、元来、家畜の毛を原料に織られたため牧畜経済に特有の生産物であった。現在では原料に綿が用いられるケースも多くなっているが、それでも絨毯作りという営み自体は、ごくありふれた生活の営みの一つとしておこなわれている。

草原とオアシス双方の文化を有するウズベキスタンにおいて、遊牧民の物質文化を代表する絨毯が「伝統」や「民族文化」としてどのように扱われているのか。筆者は、できれば国立博物館の展示にみられるような官製の民族史における位置づけではなく、地元住民による「われわれの」文化としての位置づけをとらえたいと考えてきた。そこで、3月21日の祝日にむけて各地で開催される「ナウルーズの国民／民族祭典 (Navro'z xalq sayllari)」のうち、スルハンダリア州の会場の地区展示を参照することにした。後述するようにこの祭典は行政が主催するものだが、展示品は学校の郷土資料室や住民の自宅から持ち寄られたものであり、その展示構成は地元のマハッラ職員に一任されている。その点で、研究者が構成した博物館展示とは異なるものとして、「われわれの」文化表象をみる好例と考えた。

調査対象の概要

2024年のスルハンダリア州のナウルーズの祭典は、各行政区にて次の日程で開催された。3月14日にバンディホン郡 (*Bandixon tumani*)、ボイスン郡 (*Boysun tumani*)、ジャルクルガン郡 (*Jarqo'rg'on tumani*)、15日にサリアシア郡 (*Sariosiyo tumani*)、クズルク郡 (*Qiziriq tumani*)、シュルチ郡 (*Sho'rchi tumani*)、16日にオルティンサイ郡 (*Oltinsoy tumani*)、クムクルガン郡 (*Qumqo'rg'on tumani*)、シェラバード郡 (*Sherobod tumani*)、17日にデナウ郡 (*Denov tumani*)、ウズン郡 (*Uzun tumani*)、ムズラバト郡 (*Muzrabot tumani*)、18日にアングル郡 (*Angor*

tumani)、テルメズ郡 (Termiz tumani)、19日にテルメズ市 (Termiz shahri) 共催の州の主要祝祭典 (Viloyatning asosiy bayram sayli) が執り行われた⁽¹⁾。このうち筆者は、3月14日のボイスン郡の祭典会場と、3月19日のテルメズ市共催の州の祭典会場に足を運んだ。

会場は大きく分けて、歌や踊りを披露する演芸ステージと展示スペースから成る。前者には座席が用意され、有名歌手が登場することもあり、州規模の祭典では招待客のみ入場が許される。筆者は、前年に観賞したことがあるため本年は入場しなかった。そのため、本稿であつかう情報はすべて展示スペースの見学から得たものである。

ボイスン郡の祭典《会場：ボイスン市 青少年レクリエーション広場(Yoshlar istirohat bog'i)》

会場の全体像は図1の通りである。演芸ステージのほかに、移動式住居のウトウ(o'tov)、木製縁台のディヴァン(divan)、古道具や民族料理などの民族誌資料展示、手工芸職人による展示販売、伝統格闘技クラシュ(kurash)の競技場、子どもの遊技場、曲芸ショー、野外レストランなどのコーナーから成る。ディヴァン上には、長座布団のクルパチャ(ko'rpacha)やローテーブルが置かれ、弦楽器のドンブラ(do'mbila)をもったバフシ(bakhshi)による弾語

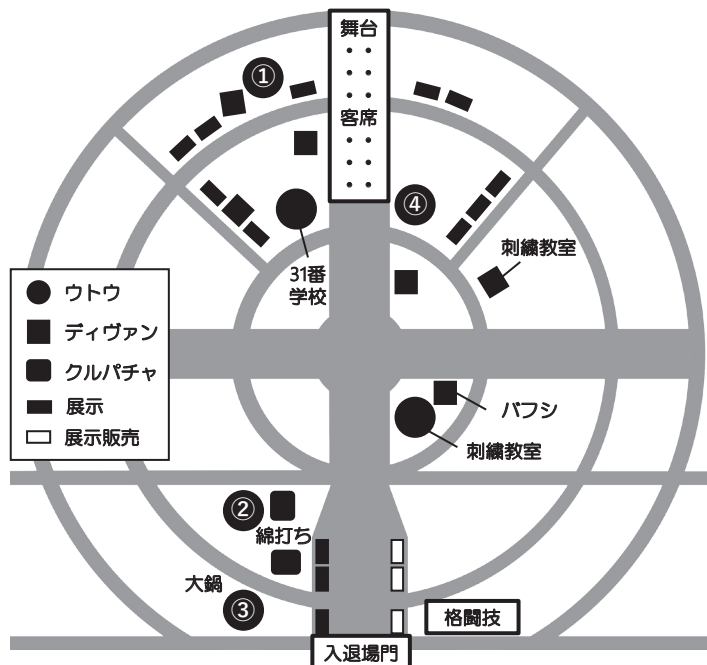


図1 ボイスン郡の祭典会場の全体図

⁽¹⁾ Surxondaryo viloyati hokimligi, 2024年3月13日, Facebook, URL: <https://fb.watch/r6KCcAQAmQ/>, 閲覧日 2024年3月29日。



写真1 綿打ちと糸紡ぎ(右手前)の様子

り、刺繍のデモンストレーションが随時おこなわれていた。ウトウの周囲では、地面に絨毯とクルパチャが敷かれ、糸紡ぎや綿打ち〔写真1〕のデモンストレーションが時折おこなわれたり、大鍋で作った油脂と砂糖を煮詰めたペースト菓子のハルワ(halva)が来場者にふるまわれたりしていた。これらのデモンストレーションに携わる人は、多くの場合、民族衣裳に身を包んでいた。

ウトウは全部で6つあり、基本的には関係者の休憩所として使用されていた。その内外は、大判刺繍のスザナ(so'zana)や、横に細長い刺繍のザルデヴォル(zardevor)などで飾られていることが多く、外側の装飾には絹の絨織物のアトラス(atlas)が用いられていることもあった〔写真2〕。床には平織絨毯のパラス(palas)が敷かれていた。必ずしも近くに関係者がいるわけではなかったため、ウトウ本体や装飾品の所有者を正確に把握することはむずかしかった。しかしながら、聞き取った情報を概観すると、2つの学校(Boysun barkamolavlod bolalar maktabi、31-maktab)と、ボイスン郡を構成する4つのマハッラ・セクター(sektor)⁽²⁾から出展されているらしかった。

民族誌資料は、会場の至る所に展示されていた。たいていテーブルの上に資料が並べられ、出展元の学校名などが表記されていた(5, 12, 30, 32, 35, 48, 49-maktab、5, 8-DMTT、Boysun ko'ptarmoqli texnikumi、Boysun tuman 2-son kasb-hunar maktabi)。標本資料としては、土製の容器や木製の調理器具と食器、織物に関連する古い小道具のほか、比較的最近作られた民族帽のドウッピ(do'ppi)、パッチワーク布のクラク(quroq)、アラビア書道絵画や書見台、当日

(2) ソ連期の村議会(Кишлачный совет)を基本的に引き継ぎながら改組・再編した行政単位で、各セクターには隣接する8～11のマハッラが含まれる。



写真 2 アトラス等で飾ったウトウと展示の様子

調理して持ち込まれた実物の民族料理が展示されていた。

スルハンダリア州の祭典《会場：テルメズ市 芸術宮殿 (San'at saroyi) 内》

展示スペースの全体像は図2の通りである。州を構成する15の各行政区のほかに、子どもの遊技場と就学前教育と学校教育部門 (Maktabgacha va maktab ta'lim bo'limi) [図2の枠外ジャルクルガン後方]の展示ブースから成る。各地区展示場内にも演芸ステージがあり、民

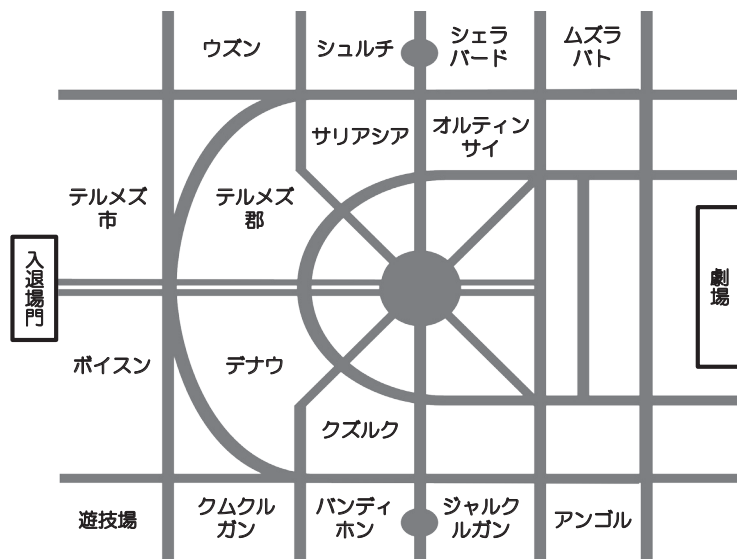


図 2 スルハンダリア州の祭典会場の全体図 (展示スペースのみ)

族衣裳を着た少女や老女による舞踊やバフシによる演奏が随時おこなわれていた。

建造物として、ジャルクルガンを除く各地区に1～3つウトウが設置されていた。オルティンサイやシェラバードのウトウは骨組みが金属製で、アンゴルのもは2分の1サイズに輪切りにした疑似的なものだった。ジャルクルガンには土壁の家屋と2階建てのやぐらがあり、ムズラバト、シェラバードにも後者があった。これらは基本的に関係者の待機スペースとして利用されていた。装飾には総じて、スザナやザルデヴォル、アトラス、クラクが用いられていた。ウトウの戸口上部には、逆三角に飾る刺繍布のブクチャ(*bukcha*)ないしブグジャマ(*bo'g'joma*)⁽³⁾が数多く見られ、内側に婚礼用カーテンや房飾りが掛けられている例もあった。床面には、もれなくコクマ(*qoqma*)織りのパラスが敷かれていたが、クムクルガンのみガジャリ(*gajari*)織りのパラスを内側壁の装飾として用いていた。刺繍製品について質問すると、たいいて「祖母や母、おばたちが作った」という返事がかえってくるように、1970～80年代に作られたものが多いようだったが、テルメズ市のウトウの装飾はボイスンの手工芸職人の作品によるものだった。一方、パラスはさほど古くなく、製作者がわかる場合は比較的新しく織られたものだった。ウトウと同様に、ディヴァンもクムクルガンを除く各地区に1～3台置かれていた。木工彫刻の施された天蓋付きのもの、アトラスなどの布で簡易的に屋根を付けたもの、屋根のないものがあった。座面には、コクマ織りのパラス(ジャルクルガンのみガジャリ織り)とクルパチャが敷かれ、食卓布がローテーブルか敷物の上に広げられていることが多かった。食卓布の上に民族料理を並べて展示している例もあれば、ボイスンでは先述の手工芸職人による刺繍、クズルクでは糸紡ぎや綿打ち、カード織りなどの手工芸、デナウではバフシによる弾語りなどのデモンストレーションがおこなわれていた。

手工芸に関連するものとして、数多くの地区展示に織機が設置されており、垂直型と地面に固定する水平型のものがあった。前者を設置していたのはバンディホン、デナウ、オルティンサイ、テルメズ市で、いずれもタキル(*takir*)織りが、後者はアンゴル、ボイスン、ムズラバトで、コクマ織りが途中まで織られていた。サリアシアではコクマ織りを模した小型の木枠が置かれ、同様にクムクルガンでは垂直に立てかけた木枠にタキル織り、水平に置いた木枠にテルマ(*terma*)織りが表現されていた〔写真3〕。織機を設置していない場合でも、織物やフェルトに関連する道具やその完成品は全地区で展示されていた(テルメズ郡のみ機械製カーペットも展示していた)。ボイスンやシュルチなどでは、それら手工芸品の展示販売ブースも用意されていた。テキスタイル以外の手工芸品としては、人形、木工彫刻(柱や書見台、

(3) 本来、ブクチャは花嫁の持参財(衣服やシャツなどの布製品)を包む布製の袋物で、ブグジャマは同じく持参財の寝具を包む大きな布であり、両者とも家財道具を積み重ねたユク(*yuk*)を彩る装飾として用いられた。布の一つの隅に刺繍やフリンジなどを施し、その装飾部分がみえるよう、封筒のように逆三角の形に飾った(なかには装飾部分だけを切り離した三角布の場合もあった)。かつてブグジャマはパラスから作られたが、後に布から作られるようになった。



写真3 織機の模型(クムクルガン)

弦楽器など)、陶器、衣服・帽子、刺繍絵画などがあった。

食文化に関連するものとして、土製の容器や木製の調理器と食器、実物の民族料理(テルメズ郡のみトルクメン料理)のほか、野菜やフルーツなどの食材が展示されていた。たとえば、川や湖を模したプールに魚が放たれ、柵のなかにはヒツジやヤギが囲われていた。他にも猛禽類、穀類、ワインなどがあった。ナウルーズの祝いに欠かせない麦汁を一晩中煮詰めたペースト菓子のスマラク(*sumalak*)は、民族料理と同様、試食を兼ねて展示されたものだった。また、木製の農具や乳製品作りの器具、粘土製の窯のタンディル(*tandir*)などが設置されている例もあった。

他には、各地区の観光名所や特産品をあらわす大型の模型が展示されていた。たとえば、サリアシアのサンガルダクの滝、ボイスンのオモンホナの聖泉、ムズラバトのカンプル・テパ遺跡、テルメズ郡のテルメズ・オタ廟、アンゴルの風車とシャシリク、シェラバードのザクロ、ジャルクルガン他のドンブラなどがあった。また、各地区にまつわる偉人の書物、絵画、郷土資料館や専門学校などの紹介ブースも見られた。

むすびにかえて

2つの会場の展示を総合的にみると、いわば定番の展示品があることがわかった。すなわち、ウトウ、ディヴァン、クルパチャ、スザナ、ザルデヴォル、パラス、織物関連用具、土製の容器や木製調理器具と食器、そして実物の民族料理である。また、定番のデモンストレーションとしては、民族衣裳を着た少女たちの踊り、老女による糸紡ぎや綿打ち、男性バフシによる演奏をあげることができる。

ウトウの装飾には、スザナやザルデヴォルが使われ、逆にパラスはほとんど敷物としてしか使用されていなかった。当該地域の20世紀後半の様子に鑑みると、このような装飾は元来のものとは異なる。民族学者 Б. Х. Кармышева [1985: 266–267] によると、かつて半遊牧ウズベクの間では装飾的なフェルトや毛皮、毛織物が用いられ、オアシス定住民の間に普及していた大判の刺繍は見られなかったという。筆者は、刺繍製品を用いた装飾方法について、「真正な」伝統的用法ではないと一蹴してしまうのではなく、むしろ現地住民の再解釈の結果、つまり「われわれの」文化を表す事例の一つと捉えたい。このような装飾の質的変容は、遊牧民の間における定住民の生活様式の受容を物語るものであり、このテーマのさらなる追究は、草原とオアシスの文化的交流の近現代史の解明の手がかりとなるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22KJ1939 の助成を受けたものです。また、同国におけるフィールドワークは〈松下幸之助国際スカラシップ〉により実現しました。ここに記して御礼申し上げます。

参考文献

Кармышева, Б. Х. 1985. Юрта в современном быт у узбеков: Мастера ее убранства // Народные мастера Традиции, школы Выпуск I / Под ред. М. А. Некрасовой. М.: Изобразительное искусство. С. 256–269.

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

中屋昌子『信仰と越境のウイグル
——「進歩」の共和国から復興のイスラム共同体へ——』
京都：文理閣、2023 年、164 頁

田中 周

冷戦の終結はナショナリズムと宗教的アイデンティティの再燃をもたらし、世界的な宗教復興が生じるとともに、各地で民族や宗教をめぐる紛争が顕在化した。このことは国境を越える超国家的な存在である宗教に対する、近代国民国家システムの限界を露呈したとも言える。イスラムと国民国家をめぐるのはこれまで多くの研究がなされてきたが、本書は両者のせめぎあいの関係性に新たな視座を提供するものである。

本書は、中国共産党の宗教政策はどのようなものか、改革開放以降に新疆で生じたイスラム復興はどのように進展したか、新疆から離散したウイグルがトルコでどのような宗教的コミュニティを創出しているか、という問題意識に基づいている。そのうえで、特に改革開放から2010年代半ばまでの時期を対象として、イスラム復興によって故郷からの離散を余儀なくされ、離散先でコミュニティを形成する人々を指す「イスラム復興ディアスポラ」という概念を軸に、新疆からトルコに亡命したウイグルの実態を分析する。

本書の構成は以下のとおりである。序章で本書の問題関心、先行研究上の位置づけ、核となる概念、調査概要等をおさえたうえで、第1章「新疆における宗教統制の成立過程」は、中華人民共和国建国から改革開放までの中国共産党の宗教政策の変遷と、イスラムを支柱としたウイグル社会の変容の模様を提示する。第2章「新疆におけるイスラム復興と宗教統制」は、中国共産党の宗教政策・法体系の背景にある理論的枠組みを明らかにしたうえで、イマーム、女性信徒、未成年者に対する宗教統制の実態を分析する。第3章「サラフィーのウイグル」は、2009年7月5日に生じた「ウルムチ事件」の実態と、事件がウイグルを亡命に走らせた事例を紹介する。第4章「民族主義者はいかにイスラムの覚醒を経験したのか」は、トルコに亡命した世俗的なウイグルが亡命後に敬虔なムスリムとなった事例を紹介する。第5章「スーフィーはなぜトルコに来たのか」は、1980年に中国を離れ、1990年代初頭にトルコに亡命したウイグルの事例を紹介する。第6章「トルコで見出したイスラム共同体」は、亡命したウイグルを支援するためにトルコで設立されたNGO団体を事例として、イスタンブル

におけるウイグルコミュニティの実態を分析する。終章は、ウイグルのイスラム復興ディアスポラが、イスラム復興が急速に進むトルコで、信仰に篤いトルコ人とともにイスラム的共存システムを育みつつ、コミュニティを拡大させてきた様を総括する。

本書の特色は、トルコ・イスタンブール県および新疆ウイグル自治区において、2010年から2023年にわたって実施した聞き取り調査を主軸とする現地調査の成果に立脚している点にある。特に第3章から第6章でスポットライトを浴びる複数のウイグルが生々しく語る、越境に至る経緯、宗教的な覚醒、亡命先のトルコに至る過程等をめぐる経験には衝撃を受ける。本書のこれらミクロレベルの事例は、いずれも得難く貴重な情報を提供すると同時に、ウイグルが経験した信仰と越境の世界を、色彩豊かに我々に提示することに成功しているといえる。

最後に今後の著者に対する期待として、以下の二点を指摘したい。第一に、第3章から第6章の事例の主軸を担う聞き取り調査は、いずれも男性を対象としている。これと同程度のウイグル女性の経験と思想に関する調査結果が加われば、物語はより重厚さを増すであろう。第二に、本書はウイグルのイスラム復興ディアスポラを受け入れるトルコ住民と同様に、ウルムチ事件をめぐるレジェップ・タイイップ・エルドアン首相(当時)のウイグルに寄り添う姿勢、およびトルコとウイグルのムスリム兄弟としての連帯を強調するトルコ政府の姿勢を好意的に描いている。ただし、エルドアン政権にはムスリムの擁護者としての顔もあれば、中国を重要な戦略的パートナーと位置付けて、両国の関係強化を図るためにその新疆政策を肯定的に評価する顔も持つ。これらの顔は国際政治状況や選挙等をめぐる国内政治状況に応じて使い分けられてきた。このようなトルコ政治の奥行きに対する視角が加われば、本書の魅力はより増すものと考ええる。

(東京大学先端科学技術研究センター)

研究文献リスト

中央アジア関連研究文献リスト2023

本リストは、2023年(1月～12月)に刊行された、原則としてイスラーム化以降の中国新疆、旧ソ連領のムスリム地域、およびその周辺地域に関する学術文献(学術的映像作品、データベースを含む)をリストアップしたものである(理科系のものを除く)。原則的に、国内で刊行された、国内で活動する研究者による著作を中心とし、エッセイや辞典項目等は除外した。ただし、本学会会員の著作については、海外刊行のものも一部含まれる。なお、各文献の副題はコロンつなぎで統一した。

書籍

■ 荒川正晴、弘末雅士責任編集『岩波講座世界歴史10 モンゴル帝国と海域世界 12～14世紀』

岩波書店(3,200円+税)

- ・ 四日市康博「ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト」
- ・ 松井太「トルキスタン・トルコ系諸集団とモンゴル帝国」
- ・ 向正樹「モンゴル覇権期のディアスポラ」
- ・ 高橋英海「中央アジア・東アジアの東シリア教会：モンゴル時代を中心に」
- ・ 森達也「ユーラシア世界の中国陶磁流通」
- ・ 川口琢司「カラチュの時代：ティムール朝を中心に」

などを所収

■ 磯貝真澄・帯谷知可編『中央ユーラシアの女性・結婚・家庭：歴史から現在をみる』(アジア環太平洋研究叢書6) 国際書院(3,500円+税)

- ・ 帯谷知可「忘却の彼方のムスリム女性解放論：オリガ・レベヂェヴァを読み解く」
- ・ 佐々木紳「近代オスマン帝国における女性作家の誕生：ファトマ・アリエとハイブリッドな評伝の虚実」
- ・ 磯貝真澄「ロシア帝国末期ヴォルガ・ウラル地域のムスリム知識人とイスラーム宗務行



政：ムスリム家族規範論からみえる結びつき」

- 菊田悠「社会問題としてのトイ(祝宴)：ウズベキスタン、ミルジヨエフ大統領によるトイ規制法」
- 藤本透子「結婚をめぐる交渉：中央ユーラシア草原地帯におけるカザフ社会の変容」
- 宗野ふもと「ウズベキスタンの女性雑誌『サオダト』(幸福)：1972～1974年の記事目録」などを所収

■ 今村薫編『中央アジア牧畜社会：人・動物・交錯・移動』京都大学学術出版会 (3,600円＋税)

- 今村薫「中央アジアにおける家畜化の歴史生態学的展開」
- 久米正吾、新井才二「天山山脈の最初の牧畜民」
- 塩谷哲史「ラクダと都市が支えた草原の移動：18～19世紀の中央アジアとロシア」
- 今村薫「カザフスタンにおける家畜ラクダ2種とそれらのハイブリッド作出」
- 児玉香菜子「中国人民公社期におけるラクダ飼養：内モンゴル自治区エゼネー旗の事例から」
- ソロンガ「ラクダの去勢：中国内モンゴル自治区アラシャー右旗の事例から」
- 廣田千恵子「山地環境下における牧畜と季節移動：21世紀モンゴル国カザフ牧畜民を事例として」
- 地田徹朗「アラル海災害からの「復興」における牧畜の役割：小アラル海地域社会の災害適応とレジリエンス」
- 星野仏方「乾燥・半乾燥地における人と家畜」

などを所収

■ 小松久男(編者代表)、梅村坦・坂井弘紀・林俊雄・前田弘毅・松田孝一(編)『中央ユーラシア文化事典』丸善出版 (22,000円＋税)

■ ダダバエフ、ティムール、園田茂人編『ウズベク移民と日本社会』東京大学出版会 (6,200円＋税)

■ 中屋昌子『信仰と越境のウイグル：「進歩」の共和国から復興のイスラム共同体へ』文理閣 (2,500円＋税)

■ 野田仁編『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』(Studia culturae Islamicae no. 119／MEIS Series no. 29) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(非売品)

- 長峰博之「ジョチ・ウルス後裔政権史料は何を参照し、ジョチ・ウルス再編をいかに認識したのか？」
- Brophy, David, “Between Hagiography and World History: Muḥammad Amin Kashghari’s *Asar al-Futuh*”
- 小沼孝博「ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求：『ハミード史』序論の検討から」

- 塩谷哲史「19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記」
 - 近藤信彰「近代イランにおけるテュルク的過去の参照」
 - 木村暁「トルキスタンを歴史化する：ロシア統治と『トルキスタン史』」
 - 秋山徹「遊牧英雄の黄昏、民族英雄の黎明：民族創成過程における対露協力者の位置づけをめぐる」
 - 野田仁「近代カザフ人の歴史叙述：アルタイの知識人アクトの視線」
 - 小野亮介「トルコ共和国国章制定の議論から見るゼキ・ヴェリディ・トガンの過去の参照と歴史観」
 - 磯貝真澄「ソ連初期のムスリム知識人による自己語り：1928年のハサンアター・ガベシーの自伝的回想を読む」
などを所収
- 吉村大樹、グリエヴァ・カマラ『2022年度言語研修「アゼルバイジャン語」研修テキスト1 アゼルバイジャン語文法教本』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（非売品）
- 吉村大樹、アイダエヴァ・ザリファ『2022年度言語研修「アゼルバイジャン語」研修テキスト2 アゼルバイジャン語会話・聴解トレーニングブック』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（非売品）

論文

- 諫早庸一「イスラーム経由コペルニクス行き：ユダヤ教徒がつなぐ同心球天文学の道」『ユリイカ』55(1), 224–232頁
- 諫早庸一「グローバルに文化を問うこと：作図についてモンゴル帝国期東西天文学交流を例に」縄田雄二・小山憲司編『グローバル文化史の試み』中央大学出版部, 37–70頁
- ISAHAYA Yoichi, “기후변화가 제국을 흔들었을까? 1270~80년대 몽골 사례 연구 / Did the Climate Change Shake the Empire? The Case of the Mongols in the 1270s and '80s,” *생태환경과 역사 / Journal of Ecological and Environmental History* 10, pp. 5–40, <https://doi.org/10.23202/jeeh.2023..10.001>
- 諫早庸一「ハンの巡行：ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス」『スラヴ研究』70, 105–134頁
- ISAHAYA Yoichi, “Marāgha Ceased to Function: The Tūsī Family’s Intellectual Network and Īl-Khānīd Political Itinerance,” *Crossroads: An Interdisciplinary Journal of Asian Interactions* 22, pp. 1–24, <https://doi.org/10.1163/26662523-bja10018>
- Уяма Томохико. Между эссенциализмом и многоидентичностью: Центральная Азия как

- часть Востока, Юга и мира // Социологическое обозрение. Том 22, № 1. С. 61–71, <http://doi.org/10.17323/1728-192X-2023-1-61-71>
- 宇山智彦「多方面外交を維持・拡大する中央アジア：分断ではなく競存を求める中小国」『国際問題』714, 48–58頁
 - ONUMA Takahiro, “Manchu Words Referring to the Qing Emperor: han and ejen,” *Saksaha: A Journal of Manchu Studies* 12, pp. 61–72, <https://doi.org/10.3998/saksaha.4214>
 - 帯谷知可「ウズベキスタン：ヴェールを捨てたその後に」長沢栄治監修、岡真理・後藤絵美編『記憶と記録にみる女性たちと百年』（イスラーム・ジェンダー・スタディーズ5）明石書店, 171–184頁
 - 河原弥生「19世紀フェルガナ盆地におけるミールザーたちの系譜書：コーカンド・ハーンの母方の系譜として」『東洋文化』103, 205–228頁
 - 小松久男「韃靼の志士：イスラーム世界と日本」『民族解放の夢』（アジア人物史10）集英社, 353–417頁
 - 小松久男「中央ユーラシアの新聞・雑誌史料：時代の思潮を読む」佐々木紳編著『歴史の蹊、史料の杜：史資料体験が開く日本史・世界史の扉』風間書房, 197–217頁
 - 小松久男「宗教復興のダイナミズム：近現代中央アジアの政治と宗教」長沢栄治・後藤絵美編『東大塾 現代イスラーム講義』東京大学出版会, 102–125頁
 - 小松久男「トルキスタンの地歴教科書（タシュケント、1918年）を読む」『日本中央アジア学会報』18, 1–25頁
 - KOMATSU Hisao, “XX. yüzyıl başlarında Türkistan’da kolektif kimlik arayış çabaları,” Akile Gürsoy, haz., “*Kültürün Mimarı*” Bozkurt Güvenç’e Armağan, Ankara: Nobel, pp. 132–145
 - 坂井弘紀「中央アジアの神話」『神話世界と古代帝国』（アジア人物史1）集英社, 110–129頁
 - 坂井弘紀「敵はロシア：中央ユーラシア・テュルクの伝承に現れるロシア」『大学表現学部紀要』23, 13–32頁
 - 新免康「中国新疆における「文人」としての「少数民族」政治エリート：セイピディン・エズィズィを事例として」『中央大学アジア史研究』47, 224–201頁
 - 新免康「近代史の文脈からみた現代新疆の少数民族政治エリート：熊倉潤著『民族自決と民族団結：ソ連と中国の民族エリート』」『アジア経済』64 (3), 61–74頁
 - SHIOYA Akifumi, “Shi’ite Captive Release Negotiations in Khiva: A Nexus of Khivan-Iranian and Anglo-Russian Relations,” *Acta Slavica Iaponica* 43, pp. 73–93
 - 田中周「GCA をめぐる中国の反テロ戦略：アフガニスタンを事例として」川島真・鈴木絢女・小泉悠編著、池内恵監修『ユーラシアの自画像：「米中対立／新冷戦」論の死角』

PHP 研究所, 371–388 頁

- 地田徹朗「ロシア＝ウクライナ戦争とカザフスタン：ロシアのウクライナ侵攻には反対も、しかし…」『Artes Mundi』8, 77–86 頁
- 長峰博之「サライはどこに？：ジョチ・ウルの「首都」サライをめぐる近年の研究動向によせて」『西南アジア研究』95, 76–100 頁
- 長峰博之「17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本：ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ」『日本中央アジア学会報』19, 1–23 頁
- Нагаминэ Хироюки. Тукай-Тимуриды, Шибаниды и Крымское ханство в сочинении Кадыр Али-бека: как позднеджучидские источники представляли реорганизацию Джучиева Улуса? // Золотоордынское обозрение. Том 11, № 2, С. 349–370
- NAGAMINE Hiroyuki, “Jadwal in the Paris Manuscript of the Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu‘īnī and Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, B. 411,” *MUSEUM.KZ* 1(2), pp. 31–42
- 野田仁「多様なひとびとをつなぐ翻訳：イスラームの各地への展開と知の伝達」黒木英充・後藤絵美編『イスラーム信頼学へのいざない』（イスラームからつなぐ1）東京大学出版会, 61–81 頁
- 野田仁「1916年前後の中央アジアにおけるムスリム・ネットワーク：新疆への視線」『東洋史研究』82 (2), 1–33 頁
- パチカロフ、アレクサンドル V、長峰博之（翻訳・注釈）「概説 ゾロタヤ・オルダの首都、旧サライと新サライの歴史（翻訳・注釈）」『小山工業高等専門学校研究紀要』56, 52–62 頁
- 堀川徹「ティムール帝国とイスラーム都市文化」姜尚中（総監修）『アジア人物史 6 ポスト・モンゴル時代の陸と海』集英社, 3–70 頁
- 宮崎千穂「タシケント市におけるロシア帝国の梅毒・DV をめぐる医療警察的監督：軍隊・非感染証明・接触者調査」『ロシア史研究』110, 3–30 頁
- Lee Jinhye, “Should Korean Diaspora Evacuees from Ukraine be Considered “Refugees” or “Ethnic Returnees” in South Korea?” *Ritsumeikan Journal of International Relations and Area Studies* 57, pp. 23–42
- Lee Jinhye, “Why do Diasporas Re-Emigrate to their Historical “Homelands”? A Case Study of Koryo Saram’s “Return” from Post-Soviet Uzbekistan to South Korea,” *Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University* 5, pp. 51–65

『日本中央アジア学会報』投稿規定

1. 投稿者は、原則として日本中央アジア学会の会員に限ります。
2. 原稿は、過去に他の学術誌・書籍等に掲載されたことのないもの、投稿時点で他の学術誌・書籍等に投稿中・寄稿中でないものに限ります。
3. 原稿の使用言語は原則として日本語とします。
4. 投稿に際しては、完成原稿を MS-Word 形式で作成し、電子メール添付にて送付してください。手書き原稿は受け取りません。
5. 原稿の送付先は下記の通りです。

E-mail: jacaseditor@gmail.com

日本中央アジア学会編集委員会

6. 原稿の種別は、「論説」、「研究ノート」、「書評論文」、「中央アジア研究動向」、「中央アジア現地事情」、「書評」、「新刊紹介」、「年次大会発表要旨」からなります。ただし、編集委員会が必要に応じて当該号に限り「特別寄稿」などを設定することがあります。
投稿者は、掲載を希望する種別を明記のうえで投稿してください。ただし、掲載される際の種別に関する最終的な判断は、編集委員会が行います。

7. 原稿の分量は、種別ごとに、1枚 400字換算にてそれぞれ以下の通りとします。

「論説」、「研究ノート」、「書評論文」：60枚以内

「中央アジア研究動向」、「中央アジア現地事情」：15枚以内

「書評」：20枚以内

「新刊紹介」：3枚以内

「年次大会発表要旨」：5枚以内

なお、上記の枚数には、本文のほかに、表題、注、参考文献、図表等も含まれます。

8. 原稿の書式については、執筆要領を参照してください。
9. 原稿の投稿締め切りは5月10日とします。ただし、年次大会発表要旨については4月20日までに提出してください。
10. 投稿された原稿の採否は、編集委員会において決定します。「論説」、「研究ノート」、「書評論文」の原稿については、査読を行なった上で、編集委員会が最終的な採否の決定を行ないます。掲載が決定された場合でも、編集委員会より手直しを求めることがあります。
11. 校正は、初校についてのみ著者校正をお願いします。その際、大幅な修正や加筆はご遠

慮ください。再校以降の校正は、編集委員会の責任で行ないます。

12. 本誌に発表したものを転載する場合は、予め編集委員会に通知した上で、『日本中央アジア学会報』に掲載されたものである旨を記載してください。また、転載された出版物の発行後、速やかに本学会事務局宛てに1部寄贈をお願いします。なお、刊行後の1年間は、インターネット上での発信を含め、転載をご遠慮願います。
13. 本誌に掲載された原稿の著作権は、特に記載のない限り、著者に属します。編集委員会は、本誌に掲載されたすべての原稿について、電子化された媒体により複製・公開し、公衆に送信することができるものとします。(クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (CC BY 4.0) ライセンスの下に提供されます。)

(2017年 6月 21日改訂)

(2017年 12月 1日メールアドレス変更)

(2022年 5月 8日改訂)

『日本中央アジア学会報』執筆要領

1. 原稿の形式・体裁

- (1) 表紙に、原稿の種別(「論説」、「研究ノート」など)、表題、英文タイトル、要旨(800字以内)、執筆者名、所属・職位等、および連絡先(郵便番号、住所、電話番号、メール・アドレス)を記す。
- (2) A4判とし、余白は天地30ミリ、左右25ミリとする。
- (3) 原稿は横書きとし、1行の文字数は40字、1ページの行数は30行に設定する。
- (4) フォントについては、和文はMS明朝、英文はTimes New Romanを用いる。アラビア文字等のラテン文字翻字を示す際は、Times New Romanで表示できる文字については必ずTimes New Romanを用い、表示できないものについてのみ特殊フォントを使う。特殊フォントを使用する場合は、原稿のファイルをメール添付で送付する際に、あわせて原稿のPDFファイル(特殊フォント部分をマーカーで示すこと)も添付する。フォントの文字サイズは、10.5ポイントとする。アラビア数字(算用数字)はすべて半角とする。
- (5) 数字は原則としてアラビア数字(算用数字)を用いる。ただし、本文中ではコンマを用いない。万以上の数字については、万・億・兆などの漢数字を用いることもできる。概数の場合は、十数年、数十人などとする。
- (6) 読点は「、」、句点は「。」を用いる。
- (7) 引用文を提示する際は、引用部分の行の始まりをすべて2字下げるとともに、引用部分の上下を半行空ける。
- (8) 日本語以外の諸言語の文字については、原則として、漢字、ラテン文字、キリル文字以外の文字を使用しない。漢字は原則として日本の常用漢字を使用する。ただし、固有名詞の表示や漢文文献の引用など、必要な場合はこの限りでない。アラビア文字等についてはラテン文字に翻字する。ラテン文字翻字については、ALA-LCなど、原則として国内外で採用されている標準的な方式にしたがい、必ず原稿内で方式を統一する。キリル文字も同様にラテン文字に翻字してもよい。
- (9) 注は脚注とし、1からはじまる通し番号とする。原稿ファイルにおいて、MS-Wordの脚注機能を用いて作成する。
- (10) 出典を示す参考文献とページ番号のみの注は設けない。下記3.で示すような形式にしたがって本文内に入れる。
- (11) 原稿末に参考文献リストを置き、参考文献を示す。具体的な書式等については下記の2.を参照。
- (12) 図版は、執筆者が完全版下となるデータを提供する。図版には通し番号を付し、本文

中に挿入希望箇所を表示する。また、別紙に各図版の説明（キャプション）を記す。図版のデータについては、必ずファイル名に図版の通し番号を入れ、原稿のファイルを送付する際に、画像データも合わせてメール添付で送付する。後者のファイルは BMP 形式が望ましい。

2. 参考文献リストの様式

- (1) 参考文献リストにおける文献の配列は、著者の姓のアルファベット順とする。単著・編著の区別は、配列順に関係しない。同一著者の複数の文献を掲げる場合は、出版年の古い順に並べる。同一著者の文献が同一年に複数ある場合は、タイトルのアルファベット順に、刊行年に a、b、c ...、a、b、b...などを付加して区別する。なお、文献の言語別に分けて表示する方法を採ってもよい。
- (2) 同じ著（編）者の文献が複数ある場合、2 番目以下の文献の著（編）者名部分を——（3 倍ダッシュ）で表記する。
- (3) 史料等について任意の略号を使用する場合は、参考文献リストにそれを示し、原稿内で統一的に用いる。
- (4) 参考文献リストにおける書誌データの具体的な記載方法については、基本的に下記にしたがう。

①単行本

和文：著（編）者名、出版年、書名、出版地、出版社、の順に記す。

欧文：著（編）者名（姓、名の順）、出版年、書名（イタリック体）、出版地、出版社の順に記す。

（例）

佐口透 1986 『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館。

Jarring, Gunnar. 1991. *Prints from Kashgar: The Printing Office of the Swedish Mission in Eastern Turkestan, History and Production with an Attempt at a Bibliography*, Stockholm: Svenska Forskningsinstitutet i Istanbul.

Muminov, Ibragim M. 1968. *Rol' i mesto Amira Timura v istorii Srednei Azii v svete dannykh pis'mennykh istochnikov*, Tashkent: Fan.

Муминов И. М. 1968. Роль и место Амира Тимура в истории Средней Азии в свете данных письменных источников. Ташкент: Фан.

②学術誌掲載論文等

和文：著者名、発行年、論文名、雑誌名、巻号、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名（姓、名の順）、発行年、論文名、雑誌名（イタリック体）、巻号、掲載ページ、の順に記す。

(例)

佐口透 1950 「新疆ウイグル社会の農業問題——1760-1820年——」『史学雑誌』59 (12)、22-50 頁。

Fletcher, Joseph F. 1982. "The Biography of Khwush Kipäk Beg (d.1781) in the *Wai-fan Meng-ku Hui-pu wang kung piao chuan*," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 36, pp. 167-172.

Pugachenkova, Galina A. 1952. "K istorii «parandzhi»," *Sovetskaia etnografiia*, 1952, no.3, pp. 192-195.

Пугаченкова Г. А. 1952. К истории «паранджи» // Советская этнография. 1952. № 3. С. 192-195.

③論文集等掲載論文

和文：著者名、出版年、論文名、編者名、書名、出版地、出版社、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名(姓, 名の順)、出版年、論文名、著書名(イタリック体)、編者名、出版地、出版社、掲載ページ、の順で記す。

(例)

羽田明 1964 「Ghazāt-i-Müslimin 訳稿——Ya'qūb-bāg 反乱の一史料——」内陸アジア史学会編『内陸アジア史論集』東京：株式会社大安、324-339頁。

Togan, Isenbike. 1992. "Islam in a Changing Society: The Khojas of Eastern Turkestan," in *Muslims in Central Asia: Expressions of Identity and Change*, edited by Jo-Ann Gross, Durham and London: Duke University Press, pp. 134-148.

Arapov, Dmitrii Iu. 2011. "Volga-Ural: islam i sovetskaia gosbezopasnost' v 1926 g.," *Volga-Ural'skii region v imperском prostranstve XVIII-XX vv.*, edited by Naganawa Norihiro, D. M. Usmanova, and Hamamoto Mami, Moscow: Vostochnaia literatura, pp. 230-240.

Арапов Д. Ю. 2011. Волга-Урал: ислам и советская госбезопасность в 1926 г. // Волга-Уральский регион в имперском пространстве XVIII-XX вв. / Под ред. Наганавы Норихиро, Усмановой Д. М., Хамамото Мами. М.: Восточная литература. С. 230-240.

④史料等に略号を使用する場合は略号、コロン(:)を挟んで書誌データを記す。

(例)

『新疆識略』：『欽定新疆識略』全12巻、松筠纂、道光元年序、海積書局石印、光緒20年；[再版]台北：文海出版社、1965年。

TN: (Mullā Sharaf al-Dīn A'lam ibn Nūr al-Dīn), *Tārīkh-nām (Tārīkh-i Rāqim)*, ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵・写本番号:r. 10190.

3. 本文・注における文献の表記

- (1) 本文もしくは注において参考文献に言及する際には、著（編）者姓、出版年、ページを表示し、括弧〔 〕内に入れる。ページ番号は、出版年の後に半角コロン(:)を挟んで示す。
- (2) 同一文献に関して複数回の言及がある場合、前掲書、前掲論文、同上書、同上論文、*op. cit.*、*ibid.*、等の語は使用しない。
- (3) 具体的な表記の方法については下記の形式にしたがう。

(a) 文の冒頭で言及する場合

佐口 [1986: 173–174] は……

Jarring [1991: 85] によれば、……

Пугаченкова [1952: 192] によれば、……

(プガチェンコヴァ [Пугаченкова 1952: 192] によれば、……としてもよい)

ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀 [2008: 9] は……

羽田 [1982: 80–81]、佐口 [1963: 109–110] によれば……

(b) 文中または文末で言及する場合

……という指摘もあり [佐口 1986: 173–174]、本稿では……

……と指摘されている [羽田 1986: 86–87]。

……と指摘されている [Jarring 1991: 85]。

……という記述がある [Пугаченкова 1952: 192]。

……という記述がある [TN: 122b–123a]。

……とされている [ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀 2008: 9]。

……と論じられている [羽田 1982: 80–81; 佐口 1963: 109–110]。

……といわれる [羽田 1982: 80–81; 1986: 109–110]。

- (4) インターネット取得のデータを用いる際には、脚注に、記事等の題目、サイト名、URL アドレス、閲覧年月日を記す。

(例)

“Strategy of Innovative Industrial Development of Kazakhstan for 2003–2015,” *GOV.KZ*, URL: <http://en.government.kz/resources/docs/doc3>, 閲覧日：2009年6月18日。

(2017年6月21日改訂)

(2022年5月8日改訂)

日本中央アジア学会会則

第1条(名称) 本会は日本中央アジア学会(JACAS: The Japan Association for Central Asian Studies)と称する。

第2条(目的) 本会は、中央アジアを対象とする諸分野の研究を推進し、普及するとともに、研究上の連携を図ることを目的とする。ここで言う中央アジアとは、旧ソ連領中央アジア諸国と中国新疆ウイグル自治区を中心とし、その周辺地域を含むものとする。

第3条(事業) 本会は前記の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 研究および研究発表のための会合の開催
2. 会誌の発行
3. ウェブサイトの公開・運用
4. その他の必要な事業

第4条(会員) 本会の会員については以下の通りとする。

1. 中央アジア研究に関心をもつ個人で、本会の主旨に賛同する者。
2. 入会に際しては、原則として会員1名の推薦を必要とする。
3. 会員は、所定の会費を納入しなければならない。会費を3年を超えて滞納した者は会員の資格を失う。

第5条(役員) 本会は、会員の中から以下の役員をおく。役員の任期は4年とする。ただし、再任を妨げない。また、下に述べる、理事会の指名による理事の任期終了時期は、会員の投票によって選ばれた理事と同一とする。

1. 会長 1名
2. 理事 10名程度
3. 監事 2名

理事10名は会員の投票によって選出される。会長は投票によって選ばれた理事の中から互選される。また、理事会は本会の運営の必要に応じて、会員の投票によらない理事を若干名指名することができる。監事は理事会が指名する。いずれの役員も総会で承認を受けるものとする。

第6条(事務局) 本会の会務遂行のため、会長は若干名の担当者を選任して事務局を構成する。また、事務局長を置くことができる。

第7条(総会) 原則として年1回、総会を開催する。

第8条(編集委員会) 会誌の編集・発行のため、本会に編集委員会を置く。編集委員会は、編集委員若干名により構成される。編集委員のうち1名を編集委員長とする。編集委

員の任期は本会役員と同一とする。また、編集委員長は編集幹事を選任することができる。

第9条（会則変更） 本会則の改正は、総会において承認を経なければならない。

付則1（1）本会則は、本会の設立年月日である2004年4月1日から施行する。

（2）会費は当面、年間3,000円（学生1,000円）とする。

付則2（2010年3月29日改正）

（1）第8条（編集委員会）の規定については、2010年4月1日から施行する（2019年3月23日一部改正）。

付則3（2019年3月23日改正）

（1）第5条（役員）の規定のうち役員選出方法については、2020年4月1日に就任する役員の選出から施行する（2022年3月21日一部改正）。

付則4（2024年3月16日改正）

（1）本会は2024年4月1日から以下の所在地に置く。

京都市左京区吉田下阿達町 46 京都大学東南アジア地域研究研究所
帯谷知可研究室

※ 2010年3月29日改正
2012年3月31日一部改正
2019年3月23日改正
2024年3月16日改正

日本中央アジア学会 役員（2024年11月30日現在）

会長 帯谷知可

理事 秋山徹 磯貝真澄 宇山智彦 小沼孝博 木村暁
坂井弘紀 塩谷哲史 クアニシ・タスタンベコワ
野田仁 樋渡雅人 和崎聖日

監事 熊倉潤 濱本真実

日本中央アジア学会 編集委員会

秋山徹 磯貝真澄 小沼孝博（委員長） 菊田悠
クアニシ・タスタンベコワ 樋渡雅人

『日本中央アジア学会報』編集幹事

宗野ふもと

日本中央アジア学会報 第20号

2024年11月30日発行

編集・発行 日本中央アジア学会

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア地域研究研究所
帯谷知可研究室内

E-mail: jacasoffice@gmail.com

URL: <http://www.jacas.jp/>

©2024 JACAS, the Contributors

* 本誌掲載の著作物は刊行の1年後に北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP) において公開されます。
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/88280>